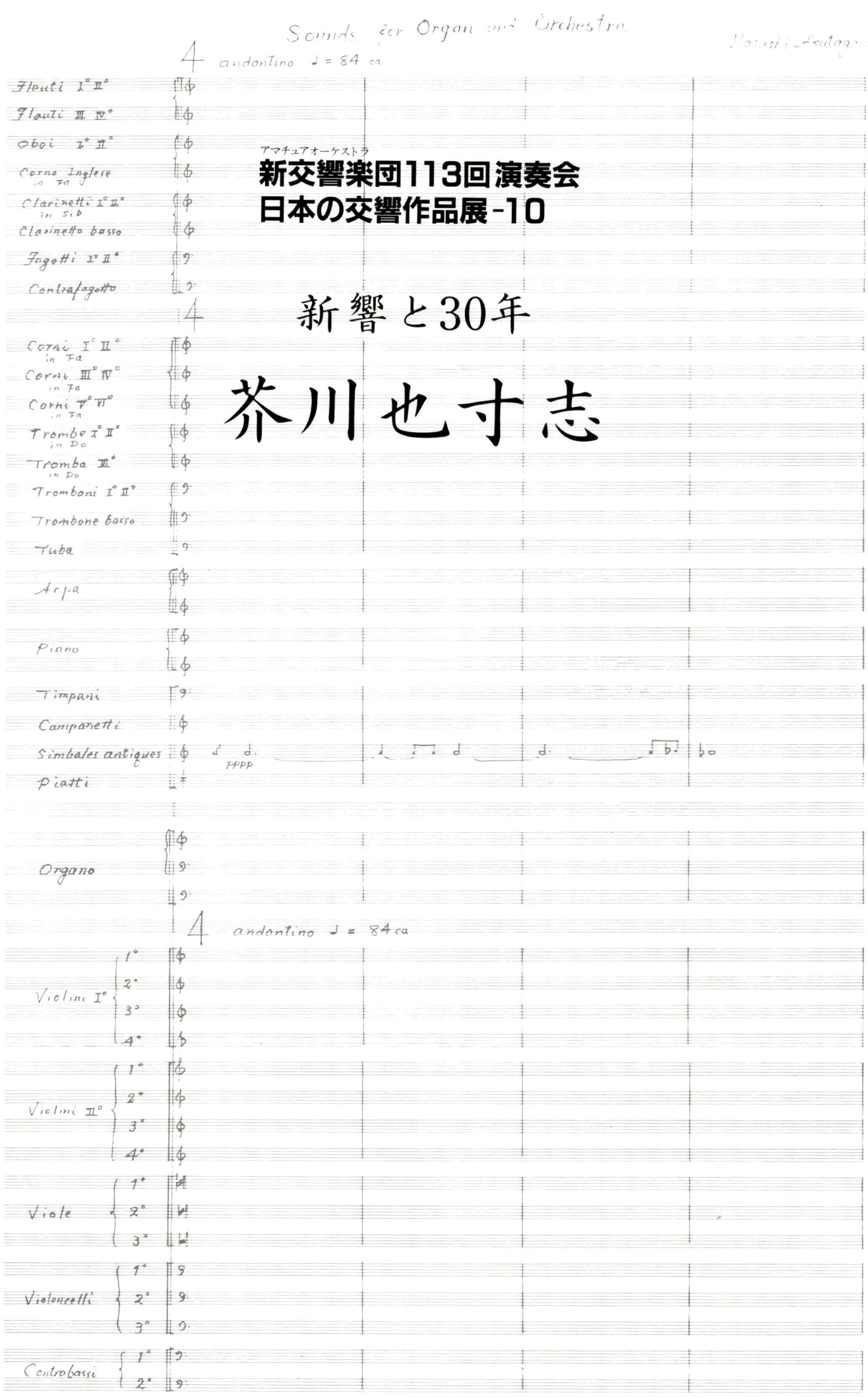
新響と30年

Yasushi Akutagawa

1986



アマチュアオーケストラ

新交響楽団113回演奏会
日本の交響作品展-10

新響と30年

芥川也寸志

1986年11月30日（日）2時●東京文化会館大ホール

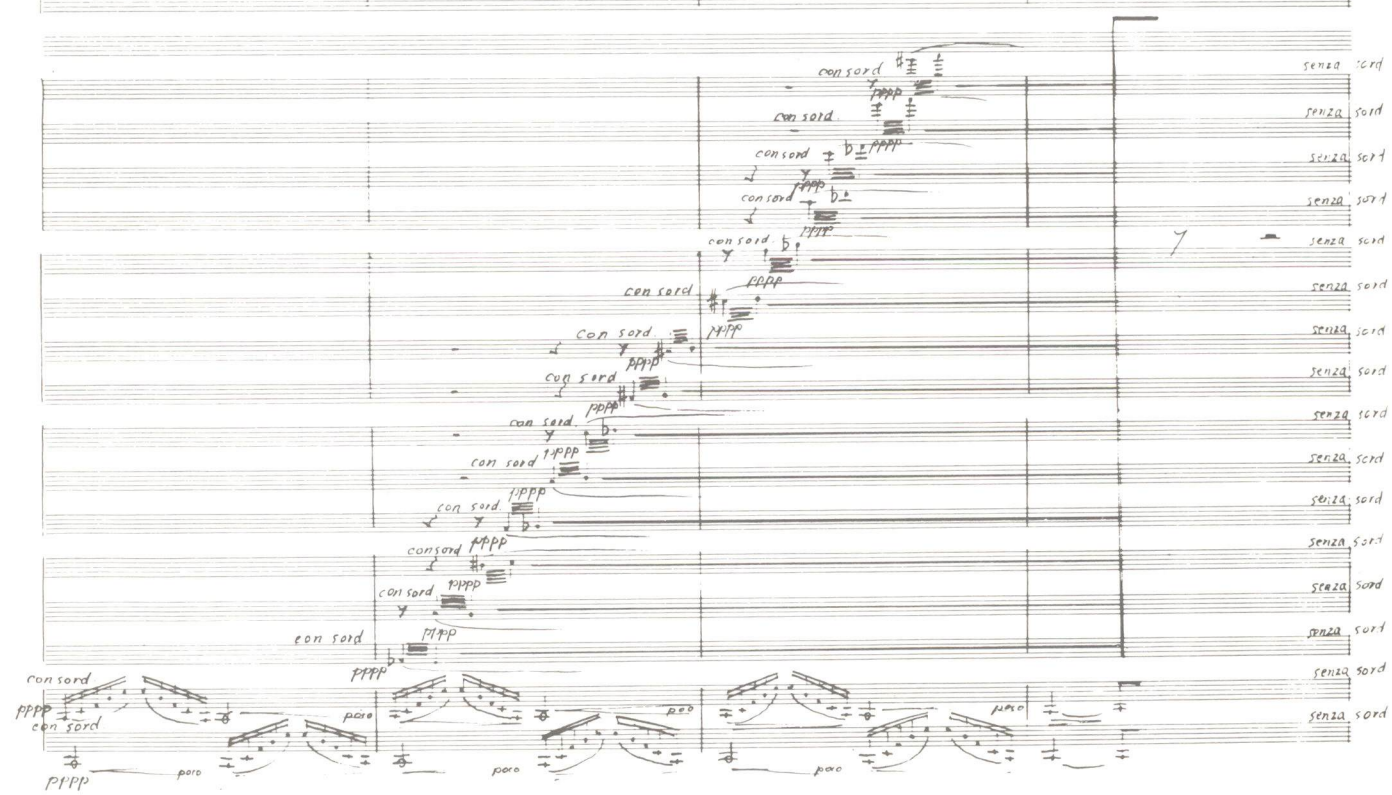
アレグロ・オスティナート

紘楽のための三楽章

交響管紘楽のための音楽

エローラ交響曲

交響曲第一番



■後援：毎日新聞社■協賛：(社)日本作曲家協議会

音楽はみんなのもの

芥川也寸志



写真・木之下晃

私にとってのアマチュア

芥川也寸志

Webster 大辞典によると、“Amateur” の第一義には “Love” とある。まさに愛してやまぬ、これこそアマチュアの心であろう。

辞書にこだわるようだが、新村出の “広辞苑” で “愛” をひくと、“なさけをかけること。かわいがること。何ものかにひきずられる感じ。また、或る物事に没頭する快感。” などとあり、金田一京助の “国語辞典” では “相手のしあわせや発展をねがうあたたかい気持ち。” とある。もののついでに、諸橋轍次の “新漢和辞典” には、“1．イ，いつくしむ。かわいがる。ロ，したしむ。ハ，このむ。2．おしむ。イ，大切にして手離さない。ロ，物惜しみする。3．異性や物をむさぼり求めること。〔仏〕” などとある。

これらの字意は、あたまに音楽を、音楽について、音楽に対して、等の言葉をつければ、いづれもアマチュア音楽家の気持ちを言いあてているように思うが、とりわけ、何ものかにひきつけられる感じ、或る物事に没頭する快感、はそのものズバリの表現ではないだろうか。要するに代償を求めず、ただひたすら音楽を愛し、それに没入していく心、それがアマチュアの中身であり、魂でもあろう。

ところが、世間一般ではアマチュアという言葉をこのような意味には使わない。アマチュアのオーケストラといえば、素人の専門家の真似をしている、したがって下手な、程度の低い、価値の劣るオーケストラ、が通り相場になっている。またプロには、プロフェッショナルのほかに、プログラム、プロダクション、プロレタリア、プロセントなどの略語としての使われ方があるからかもしれないが、オーケストラを聞いてきたと言えば、それは必ずプロの、意味するかわりに、アマチュアの場合には、大抵アマチュアの、と但し書きがつけられる。

これは、音楽とは本来プロのものであって、アマチュアはそれを真似しているに過ぎない、というひどい誤解が世間一般に流布されているためだと思われる。

音楽は一体だれのために存在するのか、を考えたときに、それはプロたちのために、などとは到底考えることは出来ない。大体，人間は音楽なしには生きてゆけぬ。大きな悲しみに立ち向かうには、それに耐える歌がどうしても必要になるし、戦いに臨んででは勇気をかきたてる歌が、赤子を寝つかせるには子守歌がいる。人間が歌を必要とするということは、歌というものが、人間の一部を構成しているということでもある。

プロとはある特別の才能をもった、ある特別の訓練を経た、ある特別の人間のことだろうから、音楽がそんな特別なもののために存在するなどということは、到底考えることは出来ない。

あえて言えば、音楽はみんなのものであり、“みんな” を代表するものこそ、アマチュアと言ってよいであろう。この意味から言えば、アマチュアこそ、音楽の本道である。

しかしながら、アマチュアが普通以上に低く価値づけられているのを、世間一般の誤解のせいばかりにすることは出来ないような気がする。世の中のアマチュア自身が、必要以上に自分たちを卑下した発言をしたり、行動をしたりするのをよく見かけるからである。

どうせ私たちはアマチュアですから、と彼等はよく言う。私はいつも、もう少し胸をはって、誰よりも音楽を愛している私たちアマチュア、と言ってくれればいいのに、と思う。もう一方、プロたちの方にも、自分たちはいやしくもプロであって、そこいらの怪しげなアマチュアとはわけが違うぞ、という必要以上の優越感を誇示したり身振りをする癖がある。私にいわせれば、プロとアマチュアとは、もともとはじめから性格を異にする存在であって、同列に比較したり、論じたりするのは、ナンセンスという他はないのだ。

ところが、アマチュアの地方オーケストラがすこしうまくなって、プロのオーケストラになってゆくケースがよくあるように、この誤解はあながちナンセンスなどと言って、軽く片付けられないくらい、一般に定着してしまっている。その上に、プロが必要以上に威張り、アマチュアが必要以上に卑下するとなると、この傾向が倍加されるのは、あたりまえであろう。これが実に残念でならない。私はいつも、妙に威張っているプロに出会うと、冗談じゃあない、アマチュアがこれだけの演奏をしているのに、それでプロでございますなんて言えるのか、と言ってやりたくなるのである。

私はいつも、アマチュアを『素晴らしきもの』の代名詞にしたい位に思っている。ただひたすらに愛することの出来る人たち、それが素晴しくないはずがない。私がいつも、新交響楽団の肩書に、小さくアマチュア・オーケストラといれるように頼んでいるのは、それを忘れないようにするために、そして、大勢の方々にそれを分かって頂きたいためにである。

私が新交響楽団とともに、30年を過ごすことが出来たのは、私の人生においてかけがえもなく、素晴しいことの一つであった。

これからも新交響楽団は、今と同じように美しく、愛に満ちあふれた素晴しい存在であってほしい。

新交響楽団よ、永久に栄光あれ！



ベートーヴェン「第５番」は、実に39年前の第１回演奏会で取り上げた曲なのであった。素人の単なる楽しみとしての音楽でなく、真に音楽を愛し、追求し、磨き上げ、訴えたい、そんな理想を掲げて最初にとりあげたこの曲には、新響にとっても特別の感慨がある。30年という歳月の中で、我々はいろいろなものを積み上げて来たが、考えてみると、「第５番」と共に歩み出した頃の夢と気慨を育ててきた歴史ではなかったかと思われるのである。

30周年をやっと迎えた「若いオーケストラ」新響と、50余年のキャリアを重ねて益々若々しく冴えわたる山田一雄先生。本日は、我々の、巨匠との出会いの結実であると同時に、ここからまた未来へ向かって求め続けるものを考える、新たなる出発点となるはずである。

（島田清純）

第112回演奏会プログラムより

('86)

異色のアマチュア「新交響楽団」

目を見張る創造的音楽活動

アマチュアのオーケストラがたとは　いつも感う。盛んだ。ますます盛んになってゆくだろう。プロのオーケストラが、どこも経済的に苦しくそれをカバーするために休むひまなく仕事に明け暮れ、そのことが技術水準の低下につながる危険を爆弾みたいにいつも抱えこんでいる一方に、もちろんそれなりの苦労はあるにせよ、余暇のすべてをつぎこんで、練習に練習をかさね、年一回か、多くて数回のステージを、演奏するよろこびでいっぱいといった表情でつとめるアマチュア・オーケストラがある。筆者は、単純なアマチュア礼讃にはくみしないが、あの表情のかがやきを、友人の職業オケ奏者のだれまるまるとなるとこれはもうそれのステージでも見たいものだ。

ところで、この七月二十日に百十一回めのコンサートをひらいた新交響楽団は、数あるアマチュア・オーケストラのなかで、指揮力が大きいだろうことは想像される。号令をかければ動く軍隊ではないのだから、この「音楽」とが創造的に創造をあたえる司能性のひとつが、ここうな意欲が皿とならの肉となってにもある。

化庁も放送局・レコード会社もいる、と見ていだろう。恥ずかしいほどの「文化功労」的しごとだ。このような方向性をうちだすにあたっては、音楽監督である芥川也寸志の見識と「曲」は「日本初演」であり、この長大な、そして作曲者の屈折した怨念（おんねん）のこめられた音楽の魔力は、十二分に表現され

（芥川也寸志指揮）。

アマチュアの音楽活動と「音楽」とが創造的に創造をあたえる司能性のひとつが、ここうな意欲が皿とならの肉となってにもある。

（森）

朝日新聞61.7.26



新交響楽団創立30周年記念
高い水準の「一千人の交響曲」

日本のトップ・クラスのアマチュア・オーケストラで、十年前にはサントリー音楽賞も受賞した新交響楽団が創立三十周年を迎えた。その記念公演の一つ、マーラーの「千人の交響曲」を聴いた。指揮は山田一雄、独唱は豊田喜代美、岩崎由紀子、大倉由紀枝、江宮すゑ子、春日保子、林誠、勝部太、岡村喬生、合唱が武蔵野合唱団と合同の公演のために公募と組織した新響と十周年視聴合唱団、それに成川少年少女合唱隊、合唱学校音楽部、藤沢ジュニアコーラス、多摩ファミリーシンガーズで、約七百名の合唱と百五十名近いオーケストラの演奏であった。

まずオーケストラ、合唱とともに、二つによく練り上げられているのに驚かされた。

アマチュアの団体というと、音楽に対する情熱や表現意欲は旺盛だが、技術がそれに追いつかず熱気だけが空回りすることも多いのだが、ここではまったくそれが感じられず、整然と知的に洗練された表現がその根底を支えていたから、見事なまでによく整理されていた。これは山田一雄のすぐれた解釈によるが、それを完全に表現し得る演奏者たちの力倍は高く評価されてよい。

いずれにせよ、プロのオーケストラもうかうかしてはいられないほどの水準を演奏で、心から拍手を送りたいと思う四月六日東京文化会館。

渡邊學而

'86年4月「音楽舞踊新聞」より

一千人の交響曲を聞いて

小五　長谷　自

四月六日に、上野の文化会館へ、えんそうを聞きに行きました。

そして、コーラスの人が大勢いてびっくりしました。当麻さんもその中にいるけれど、さがせませんでした。

七人のどくしょうの人は、コーラスの人もきれいでしたけど、それよりもっときれいでした。

ひとりでうたっても、会場のすみからすみまで聞こえるくらいでした。

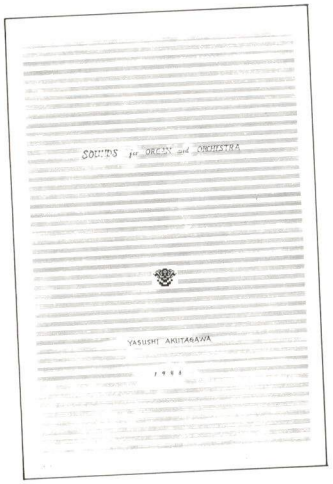
しきしゃの人もおもしろかったです。とびはねたり、いろいろなかっこをしました。そして、あせをふいたり、すごいはく力でした。やっているうちにしきしゃの人が、上を見たので、「なにかな。」と思ったら、五人くらいでラッパを吹いていました。歌の人も一人、上で歌いました。それもまたきれいな声でした。

楽器をやっている人も、すごい顔でやっていて、すばらしかったです。

最後、お客さんが長くはく手をしました。しきしゃの人やどく唱の人たちが、ぶ台へ行ったり、きたりしていました。

楽器も、コーラスも、どく唱も、しきも全部すてきでした。

また、聞きたいなぁと、思いました。



●1986年10月12日、芥川也寸志作曲オルガンとオーセストラのための「響」が東京・溜池のサントリーホール、オープニングセレモニーで初演された。

財団法人　サントリー音楽財団
理事長　佐治敬三

私どもが民間放送のスタート以来現在まで提供を続けております東京放送ラジオのクラシック番組「百万人の音楽」に昭和42年から芥川さんがレギュラーご出演を頂くことになったのがご縁で、昭和44年、サントリー音楽財団の創設にご参画をお願いしてから、芥川さんには財団理事としてとりわけ親しくご指導を賜わってまいりました。

このたび私どもが赤坂・六本木アークヒルズの一角にオープンいたしましたサントリーホールの建設に当たりましては、芥川さんに献堂の曲を委嘱いたしました。

そのすばらしい作品は、満場のご来賓に深い感銘を与え、この上なく美しい花を添えて頂きました。

何よりも私が芥川さんに敬服いたしておりますことは、あれほどにお忙しい方にもかかわらず、当財団の運営につきましても、またサントリーホールの建設に当りましても、つねに誠心を傾けて真率なご助言を頂戴してまいったことで、唯一度たりともおざなりなご発言を伺った記憶がございません。

音楽の振興によせられる芥川さんの熱情は還暦を過ぎられた今日いよいよ豊かに湧きつづける泉のようで、その清冽な水は大きな川となり、音楽界の各方面にいくつもの支流となってとうとうと流れて止まない観があります。

国内はもちろん海外での作曲家としてのご活躍のほかに、著作権保護の確立という大事業をはじめ、アマチュア音楽の振興、テレビ・ラジオや著述でのご活躍、各種の財団や協会での指導的ご活動など、今日のわが音楽界が芥川さんのご尽力に負うところ決して少なくはございません。

昭和31年、“アマチュアこそ音楽の原点”という信念にもとづいて音楽監督にご就任、長い歳月にわたって文字通り手塩にかけてこられた新交響楽団は、昭和52年、みごと「サントリー音楽賞」に輝かれましたが、いまやわが国超一流のアマチュア・オーケストラとして、プロの交響楽団にもときに厳しい刺激を与えるまでに成長されました。

芥川さんと新響の皆さんの30年一筋の情熱とご精進に心から脱帽し、「日本の交響作品展10―新響と30年・芥川也寸志」のご成功を切に祈念いたします。

昭和61年11月

三枝　成章

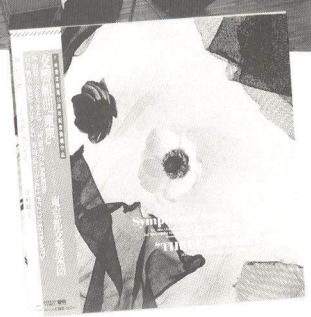
新交響楽団創立30周年おめでとうございます。又、第113回演奏会ということで、アマチュアとしては記録的とも思われる演奏会を続けてこられたことに敬意を表します。

今回は芥川先生の作品展ということですが、新響との30年間のかかわりの中で初めての試みと伺い、意外なことに驚いています。

芥川先生とは、JASRAC や作曲家協議会など、又最近では交響組曲「東京」で御一緒させて頂きましたが、先生のことで驚いたことがあります。私の知人が、日本語のアクセント辞典を見ていたら、巻末に芥川先生の御名前があったというのです。気になって他のものも見てみたら、やはり先生の御名前が。そうなんです、芥川先生は三代続いた生粋の「江戸っ子」で、東京の標準語の監修者でもあられるのです。　（作曲家）



レコード録音風景



●アレグロ・オスティナートは、FM東京開局15周年記念委嘱作品――交響組曲「東京」の第四曲として作品された。

●芥川也寸志、第37回日本放送協会放送文化賞を受賞。



芥川也寸志氏の現代を視る会

●芥川也寸志、紫綬褒賞受賞。

秋の褒章受章者八百二十三人（うち女性五十五人）が一日、総理府から発表された。学術、芸術分野で優れた業績をあげた人に贈られる〝ミニ文化勲章〟の紫綬褒章は、作曲家・芥川也寸志さん、俳優・小林桂樹さん、舞踊家・松山樹子さんら十九人が受章。人の噂話ごとり、それぞれの道に本年励んできた人たちへの黄綬褒章は三百十八人、教育、産業、農水産などと各分野で社会に貢献した人に贈られる藍綬褒章は四百九十四人が受章する。

（黄、藍綬褒章受章者名は関係地方版に掲載）



バテないでと励まされたよう

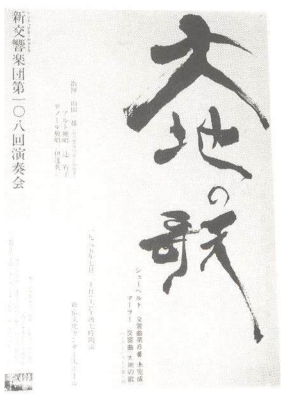
芥川也寸志さん

大正十四年生まれ。今年で六十歳の作曲家、芥川也寸志さんは「バテないで、もう少しがんばりなさいと言われたような気持ちです」。

芥川氏は、その三男。昭和十九年、東京音楽学校（現・芸大）に作曲家の道へ。「多年にわたり叙情豊かなメロディーとリズミカルな旋律により、現代的で品位の高い優れた作品を発表、独自の作風を確立した」というのが、褒章の理由だ。

日本音楽著作権協会の理事長を務め「反核・日本の音楽家たち」の呼びかけ人、交響楽団の指揮者、テレビ、ラジオの音楽番組出演も、作曲も曲。「時間がないのが悩みだが、依頼をこなすだけでなく本当に作りたい曲を書いていくことが、これからは大事な仕事」と考えている。

●題字は山田一雄先生



新交響楽団第一〇八回演奏会

大地の歌





鹿島ハイツでの合宿



指揮者　山田　一雄

日本帝国の健在をオーケストラで誇示する海外宣伝放送も仕事だった。山田は代々木生まれ、学習院から東京音楽学校（芸大）のピアノ科を出た。

作曲家の団伊玖磨（78）と芥川也寸志（56）は、戦前から日比谷公会堂へ通った。音楽学校では一年違いだが、戦争末期は一緒に陸軍戸山学校軍楽隊にいた。百二十人の軍楽隊は、靖国神社から千鳥ケ淵、赤坂見附を通って、新橋から銀座通りに出ると、八列横隊に展開した。団は小太鼓をたたき、芥川はサクソフォーンを吹いていた。空襲下の帝都市民を鼓舞する軍楽隊の響きは、銀座のビルにはね返ってすばらしかった。焼け跡から、子どもが泣きながらついてきたりした。軍楽隊での成績は、芥川が一番、団は三番だった。

洗濯と整とんがきらいで、「シラミをわかして滅亡された」と団は笑う。

敗戦直後、芥川はバイオリンをひいて進駐軍施設を渡り歩いた。一着きりの兵隊服で、ダンスホールで知り合った仲間と一座を組み、「バッチイ・バンド」と自ら呼んだ。サクソフォーンを肩にバイオリンを手に、銀座の米軍専用レストランに流しもした。

団はピアノをひいてチョコレートを投げられる屈辱に耐えられず、反米に徹し、進駐軍アルバイトはしなかった。「ぼくはいつも、何かに腹を立てていたのを覚えている」と団はいう。二人は前後してNHKの専属になり、団は労使協調をすすめる『労働の時間』の劇音楽を、芥川は放送劇『えり子とともに』の音楽を受け持った。昭和二十五年、NHKの作曲コンクールで、二人はともに特賞になり、作曲家として認められた。

「ぼくたちは本当にたたきあげの時代をすごして、技術というものをしたたかにおぼえてきた。アルチザンとしての誇りがあります」と団はいう。玉ネギ畑が続いていた千駄ケ谷の生まれ、芸術院会員。芥川は現在、日本音楽著作権協会理事長をやり、アジア地域の著作権制度確立に力を入れている。田端で生まれた。



作曲家　芥川　也寸志



作曲家　団　伊玖磨

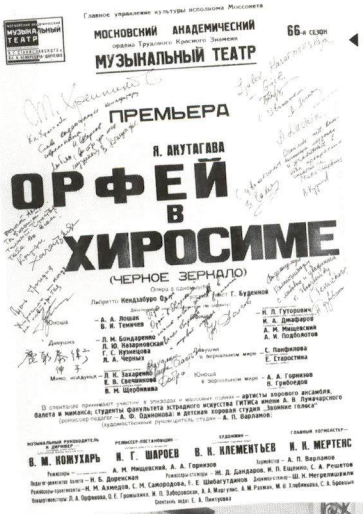
新人国記 '85

東京都 ⑦

日比谷公会堂通い

>1031<

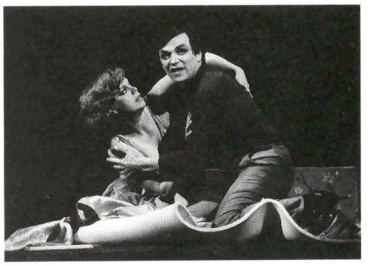
'85



◀レパートリーとなった「ヒロシマのオルフェ」のポスター



舞台より





ダンチェンコ劇場の前で





左より、I.G. シャローエフ劇場総監督、芥川也寸志、チホン・フレンニコフ全ソ作曲家同盟第一書記の各氏

筆洗

近藤の日本音楽著作権協会の会報によれば、協会理事長、芥川也寸志さん作曲のオペラ「ヒロシマのオルフェ」が、モスクワの音楽劇場の正式レパートリーに採用された。日本人の作品が外国の大劇場の演目に入ったのは初めてのことである▼作家、大江健三郎さんの台本になるこのオペラは、昨年五月、モスクワの国際音楽祭で披露されて評判になり、この五月、ボリショイ劇場につぐスタニスラフスキー記念ダンチェンコ劇場のレパートリーに加えられた。今後六十年、ハイドンのオペラとともに「二つのオルフェ」と題して定期的に上演される▼フランスの詩人コクトーの映画で名高いオルフェは、亡くなった妻を死の国まで追ったギリシャ神話のオルフェウスを素材にし、死と生の境は鏡だった▼芥川さんの舞台にも大きな鏡が使われる。ヒロシマで被爆、絶望した青年が、死の国の使者の娘と恋になり、鏡を通してみえる未来に、ケロイドの手術を受ける決心をする——▼「ヒロシマのオルフェ」はこの夏、ダンチェンコ劇場で初演され、芥川夫妻も招かれた。第一級歌手の好演もあって、五十分の舞台が終わると、しばらくは歓声があがり、拍手がやまなかった▼この日曜日のテレビで、芥川さんが作曲家のなかにし礼さんを相手に、この時の模様を話していた。終演後、舞台にあいさつに立った芥川さんに花束が殺到する。花はすぐ両手にあふれるので、舞台下のオーケストラ席に投げる。また花に埋まって、二度、三度と投げた。劇場始まっていらいの記録だったとか▼洗練された人だけに自作初演の大成功をさらりと語って嫌味がない。世界のアクタガワになって、なお謙虚なのがいい。

東京新聞60. 9. 20

'84

●事務所、矢来町へ移転。百人町は楽器の搬入がうるさいと苦情が出た。矢来町は一階なので、10年前よりいくらか良い。

楽器運搬苦心談

新交響楽団は毎週土曜日、東京文化会館のAリハーサル室で練習しています。ところが会場の都合でAリハーサル室が使用できない時がたまにあるのです。そんな時は他の練習場に楽器を移動するわけですが、直接文化会館から楽器を出して他の練習場に持って行けないので、ひとまず事務所に置いておかなければなりません。つまり一度、Aリハーサル室以外の所で練習すると4回の楽器運搬という仕事が出来る計算になります。

事務所は、新宿区須賀町の大湊ビルの4階にあります。ここは4階建てのエレベータがないので、楽器を運び上げるのが大変です。また楽器の運搬費も1回五千円でかなり大きな出費となっています。『神様！今月もAリハーサル室がとれますように』楽器係と楽器運搬人は、心の中で日夜祈りつづけているのです。 ('79)

〈楽器運搬キャンペーン〉
担当：今尾、行川、下山
Aリハにもどるまで
1人1回の楽器運搬を！ ('86)

●7月15日、第一回アマチュア・オーケストラ・シンポジウム開催

アマチュアの音楽は、自分の楽しみのためにやるのであって、音楽が好きだから、その楽しみを求めるというのが基本です。ひとりで自分の部屋で楽しむ、あるいは何人かが集まってアンサンブルを楽しむ、それも楽しみ方のひとつですが、オーケストラとなると運営も大変だし、練習はもっと大変だし、その大変なものにみあうだけの、それを上まわるだけのよろこびを得なければつまらない。その意味から新響では8年前から日本人の作品だけで演奏会をやっているわけですが、最近では日本人の作品は非常に多く演奏されるようになりましたが8年前はかなり状況が違っていたと思います。プロのオーケストラはお客さんの集まらない演奏会はなかなかやれませんから邦人作品はなかなか演奏されなかった。

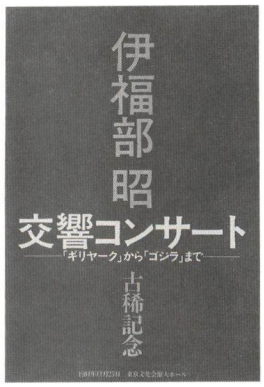
私たちはこの企画と演奏によってサントリー音楽賞をもらいましたが、アマチュアでもプロのオーケストラには出来ない大きな社会的貢献が出来ることを実証したと思っています。

ひたむきにプレイすることでさわやかな感動を生み出すという点で、私はアマチュアの方が、プロに比べてはるかに大きな可能性を持っていると思いますし、アマチュア・オーケストラは、この世に存在する最も素晴しいものの一つだと思います。

芥川(談)東京文化会館月報より



'84



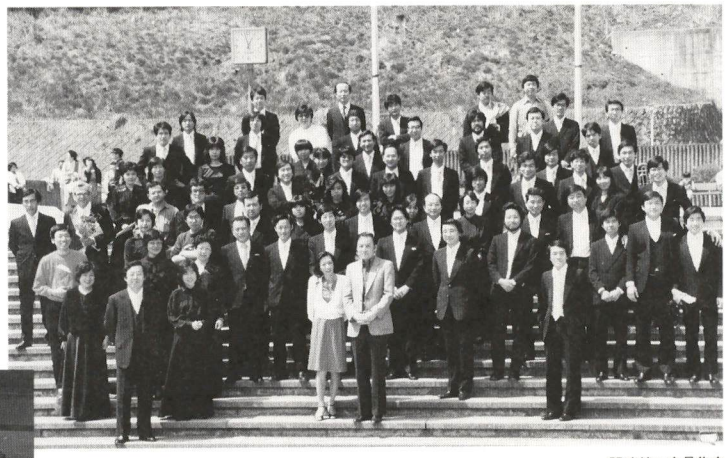


「日本の太鼓」では、伊福部先生のお弟子さん8名が太鼓パートを受け持たれた。

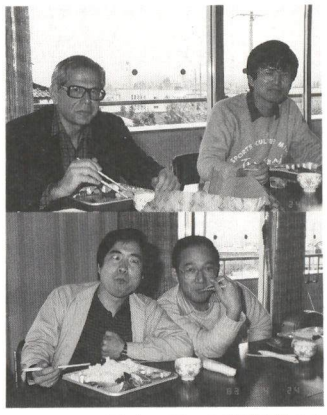
前列左から芥川也寸志、ゴジラ、伊福部昭、石井真木、真鍋理一郎
後列左から三木稔、池野成、原田甫、今井重幸、松村禎三、永富正之の各氏



音楽についての対談がTBSブリタニカより刊行



開演前に全員集合



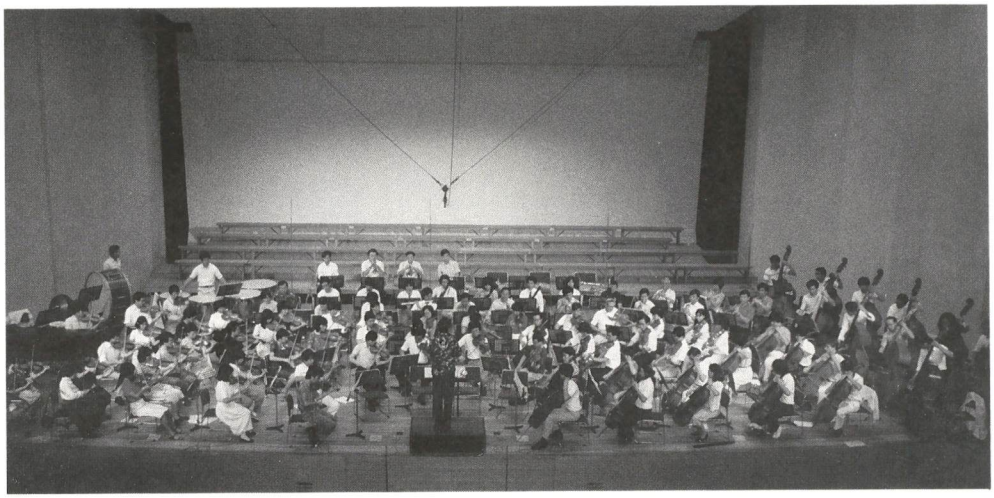
何をおいても、まずは腹ごしらえ

●第二回モスクワ音楽祭で、芥川也寸志作曲、オペラ「ヒロシマのオルフェ」が上演される

'83







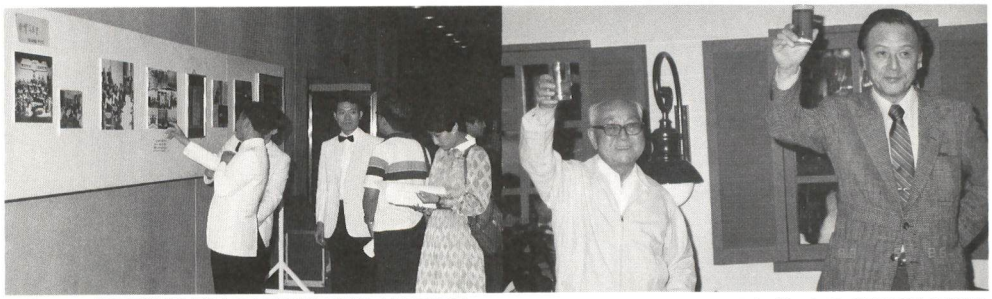
新響を始めて27年、そのあいだ新響は、ただの一度も私の心から離れていこうとはしなかった。彼等は演奏するよろこびを生きがいに、練習を積み重ね、積み重ね、一つ一つの演奏会に精魂を使い果しつつ、それはついに100回を迎えた。

音楽はみんなのもの——アマチュアこそ音楽の本道であることへの確信は、27年前も今も少しも変りはない。

新響はこれからも、ずっと生き続けるであろう。この世に、音楽のよろこびある限り——。

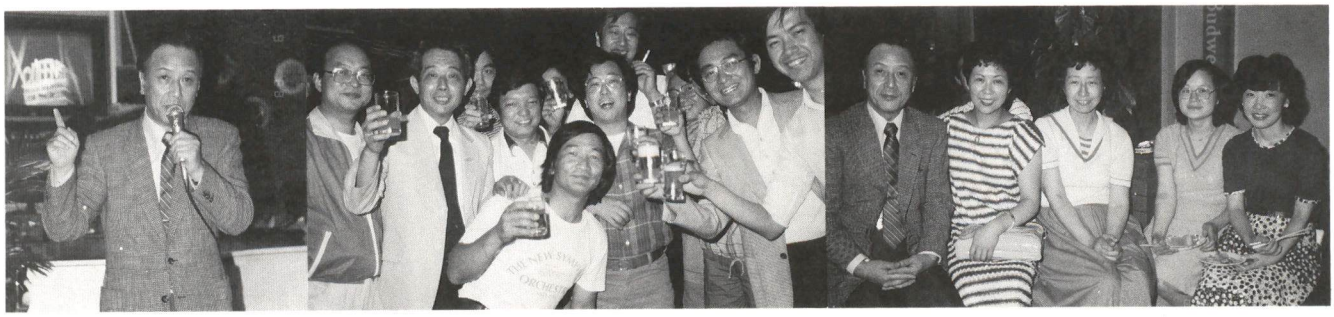
芥川也寸志

Jun. 1983

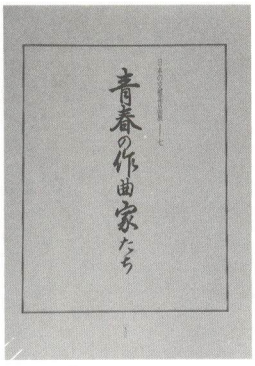


ロビーでは、第100回演奏会を迎えるまでの活動を記録した写真を展示

レセプションで、乾杯は団友の平岩氏

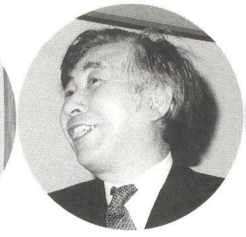


'83




小倉　朗氏


渡辺浦人氏


別宮貞雄氏


戸田邦雄氏


松平頼則氏



芥川さん　おめでとう

渡辺　浦人

私は7月20日、芥川也寸志さん指揮の新交響楽団の、ショスタコーヴィチの交響曲第4番をききました。

日本初演です。あの壮大な曲をよくやりました。墳火口に煮えたぎるマグマの中にいるような興奮の渦にまきこまれてしまいました。

然し私たち日本の作曲家にとって一番うれしいことは日本人の作曲を次々と演奏してくれることです。

日本人の曲をこんなに多く演奏してくれる交響楽団は、プロ・アマチュアを通して他にありません。

日本に交響楽が生れた初期のものから、戦前、戦中、戦後にわたって作曲されたものをいくつとりあげてくれたでしょうか。大木正夫、清瀬保二、伊福部昭さんから私までででも20人ぐらいの曲を演奏してくれたと思います。

芥川さんは自分の曲はあまり演奏しなかったのですが、今度皆さんの要望によって、芥川也寸志作曲だけの演奏会を開くことになって、ほんとうにうれしく思います。

私たちはここに初めて芥川さんの曲をまとめてきくことが出来ます。

芥川さんは私たち作曲家全員が属している日本音楽著作権協会の理事長をつとめています。

私も評議員として協力していますが、芥川さんが過労にならないかと、いつも心配しています。

体に気をつけて、ますますの活躍を、お願い致します。

（作曲家）

'82




林光氏にはピアノ演奏を、佐藤敏直氏には、新響にとっては初めての委嘱作品をお願いした。


演奏会の企画・構成をお願いした小宮多美江氏

哀歌のこと

佐藤敏直

清瀬先生の危篤を知って馳け参じたとき、既に先生は幽明界を異にされたほんの数分あとであった。もうひっそりとしておられたが、まだ手には温もりを残しておられた。

だが、限りなく優しい眼は閉じられていて、やはりもう再びお目にかかることはなかった。

年が改まったある日、たった一本の旋律が湧りだす。反復し続けるそれは、ついに私の悲しいお別れの御挨拶になってしまった。


前列左から木之下、林、芥川、小宮、芥川夫人
後列左から寺原、武満、佐藤の各氏




1982年以来恒例となった、清真学園（千葉県鹿島、合宿所の近く）での音楽教室

"音楽家たち"からの呼びかけ

いま人類は大量の核兵器と同居しています。もしこれが使用されれば、人類の幸福はもとより、生存さえ危ぶまれることは、すでに戦争や実験で被爆の惨禍をつぶさに知る私たちの明確に認識するところです。

にもかかわらず、いま核兵器は以前にもましてはるかに強力化し、多種にわたって開発され蓄積され、しかも限定核戦争の可能性があからさまに宣言されるに至りました。

限定の名目のもとにせよ、いったん核兵器が働くならば、世界が全面核戦争にまでひろがり、人類が滅亡の危険にさらされるのは疑う余地のないところです。

私たちは、人間としての良心と義務感とにもとづき、あらゆる思想や立場をこえて、内外の指導者・責任者に対して、核兵器の廃絶と核兵器の開発蓄積を誘う軍拡競争の停止と軍縮とを要求します。

平和と幸福を希求する世界の人びとにむかってこの目標を達成するため、私たちの運動を理解し、協力されるよう訴え、核兵器廃絶まで、私たち音楽家の手によりこの運動を続けていくことを宣言します。

1982年3月20日

"反核・日本の音楽家たち"

反核運動、音楽家も立つ

政治的な立場超え 芥川氏ら呼びかけ



世界初の核爆発国の音楽家として、今後音楽活動を通じ核兵器開発反対の行動に立ちあがろう――わが国の代表的な作曲家、邦楽界の音楽家約百人が呼びかけ人となって、近く「反核・日本の音楽家たち」（仮称）と名付けた運動を始めることが十五日、明らかになった。これまで核開発に多数の音楽家たちが、政治的な立場の相違を超えて結集するのは初めて。すでに発起人は、文学者約三百人が「核戦争の危機を訴える声明」を発表しているが、今回の音楽界の動きで、核兵器開発に一層強い歯止めを求める国内世論の広がりは、さらに一段とはずみがつくことになりそう。

呼びかけの中心となっているのは作曲家の芥川也寸志、黛敏郎、武満徹、湯浅譲二、中田喜直の各氏、音楽評論家の吉田秀和、遠山一行、石井真木、いずみたく、三宅一郎、石井歓、野口久光の両氏ら。

芥川氏の話によると、レーガン米大統領が昨年八月、中性子爆弾の製造開発を発表したのがきっかけで、同年九月ごろから音楽仲間十五、六人で「何かわれわれなりにできる行動を」と話し合ってきたという。この論議をもとに、とりあえず発起人による人名の公開声明を求める文書をクラシック、ポピュラー、邦楽界の音楽家に発送した。

文書を送ったのは、欧米の次谷の子、五十嵐喜芳、小椋佳、小笠原美治、ペギー葉山、由紀さおり、作曲家の芥川也寸志、黛敏郎、武満徹、古関裕而、小林亜星、遠藤実、團伊玖磨、指揮者の朝比奈隆、岩城宏之、小沢征爾、外山雄三、バイオリニストの佐藤陽、辻久子、アルトサックス奏者の渡辺貞夫の各氏ら約九十人。すでに「大賛同」した音楽家には、三宅一郎氏（東大教授）、「いかなる兵器も核戦争は二度と許さない」（作曲家の團伊玖磨氏）、「音楽家が求めるのは平和」（指揮者の朝比奈隆氏）、「私も戦争体験者として」（ペギー葉山さん）などの回答が続々寄せられている。

発送された文書は、まず、「フューチャー・ヒロシマ・ナガサキ」の出版に流れる核軍縮の動向に心からの怒りを感じます。この時代に音楽家として、なにもできないことを悲しく、さらに、さまざまな音楽家の手によりこの運動を続けていくことを宣言します。」と述べ、政治的な立場の違いを超えて、核兵器廃絶まで、音楽家が全面的な運動を進めるよう訴えている。

芥川氏らは今月二十二日、東京・新宿の日本青年館で、呼びかけ人による準備会を開く予定。この席で今後の運動の具体的な中身などを話し合い、三月末に正式な会の発足にこぎつけたい、としている。なお、ことし八月には、広島市内で、海外の音楽家も招いた大規模な「反核・平和音楽会」の開催も検討している。

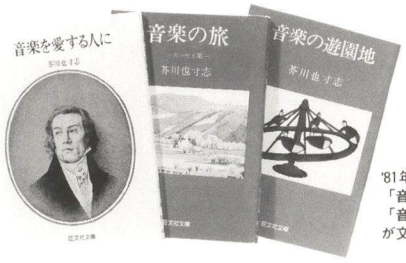
ずっと考えていた

芥川也寸志氏の話　私自身は以前から、この運動にかかわっていたのだろうか、何か自分たち音楽家にもできることがあるのではないか、と考え続けてきました。剛開にも、同じような気持ちを持つ音楽家がたくさんいることがわかりましたので、そこでさまざまな音楽家の賛同をえて、なろう、と今回呼びかけ人になった次第です。

●ＮＨＫ交響楽団は尾高賞30周年を記念し、３月の定期演奏会プログラムを全て日本人作品で構成することにし、60曲を選出した中から希望曲５曲を定期会員にアンケート調査した。この結果、芥川也寸志作品「チェロとオーケストラのためのコンチェルト・オスティナート」が第三位に選ばれ３月10日11日に提剛独奏、外山雄三指揮で演奏された。



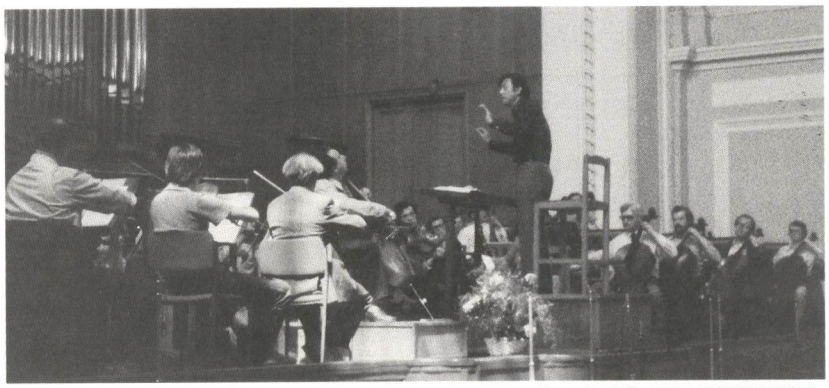
●芥川也寸志作曲、音楽と舞踏による映像絵巻「月」がイタリア賞、及びエミー賞を受賞



'81年から'82年にかけて、旺文社より「音楽を愛する人に」「音楽の旅」「音楽の遊園地」（芥川也寸志・著）が文庫版で刊行。



1981年、日本音楽著作権協会理事長に就任。執務風景。



リハーサル風景、モスクワ音楽院大講堂で。

●第一回モスクワ国際音楽祭で、「チェロとオーケストラのためのコンチェルト・オスティナート」が演奏された。



芥川、フェドセイエフ、チェロ独奏者、寺原の各氏

バッサカリアのこと　　菅原明朗

今年の春、新交響楽団がわたくしの作品の演奏をして下さったそのお礼に、この曲を編曲しました。

バッサカリアの管弦楽の為の編曲は、先達の何人かが、手を着け、それが演奏されているのにかかわらず、わたくしが敢えてこの仕事に手を着けたのは、次の２つの理由によります。

1．この曲の演奏から受ける感銘は、ゴシックの聖堂の内部に入った時の様な壮大なものです。ところが、オルガンの名手だったバッハが、この仕事の時に弾いていたオルガンは、それ程大きくない、むしろ小さなオルガンでした。表現の手段と、その結果を混同して、先達等は全部、三管、四管の大編成の管弦楽に編作しています。

2．バッハは、この曲を原則的に四声のポリフォニーで作り上げているのです。ところが、その響きの豊かさから先達等は、響きの濃淡を和声的に附加しています。

わたくしはこの２つの誤りを先輩達に指南されて、敢えてこの仕事に手を着けたのです。

この仕事は、新交響楽団の楽員方に理解されました。わたくしの喜びが、また一つふえた訳です。

チェンバロの為のゴールドベルヒ、ヴァイオリンの為のシャコンヌ、そうしてオルガンの為のバッサカリア、この３つはバッハの生涯の３大変奏曲であります。次の世代の変奏曲の手法に、一番関連のあるのはシャコンヌですが、わたくしが一番興味を持つのはバッサカリアでした。20の変奏曲：最後のフーガの一連との対照には、興趣のつきないものがあります。スゥィング、ポリトナリティー、ポリトミー、現在の作曲家　使う全手法が使われていますが、声部を重視しないかぎりこの魅力は表現出来ないのです。



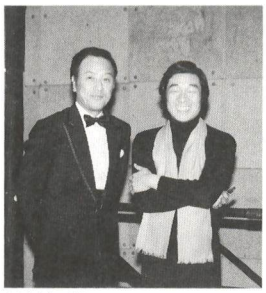


「菅原明朗」個展（４月５日）アンコールの「ファンタジア」は作曲者指揮で。丁度御誕生日が練習日と重なったので、休憩時間にささやかなお祝いを。御礼に、バッハのバッサカリアをオーケストレーションして頂いた。又、演奏会は後日、FM東京で放送された。

'81



福生市でのコンサートは、指揮者が解説しながら



河池良智氏と

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA SINCE 1956

'81年よりステッカー、Tシャツ、
トレーナーのデザインが決まる。



ファゴット　チェロ　ホルン　ビオラ

'80

伊福部昭







私の人生で、一人の人物から、こんなに短い時間に、こんなにも大きな影響を受けたことは、かつてない。それまでに、あの魅力的な伊福部作品を多少とも知っていた、ということを差し引いても、人の一生の中には、こうした節のような、そこから人生が変わっていってしまう、運命的な人とのめぐりあいというものが存在するということを感じない訳にはいかない。

伊福部先生は1914年、釧路に生まれ、終戦まで北海道で、道庁や大学演習林、帝室林野局などに職を得ながら作曲活動を続けられた方で、その作品にはいずれも、北海道の風土が色濃く投影されている。戦後、音楽生活への転向を決意され、北海道を離れて一時、日光に居を移された（終戦直後の社会的事情から、東京都への転入が許されなかったと聞いている）。

何回目かの聴講のあと、私はもっと長くお話がうかがいたくて矢も楯もたまらず、学校の帰りに日光のお宅へうかがう決心をした。

今でこそ、東京と日光は簡単に行き来出来るが、当時は大変だった。

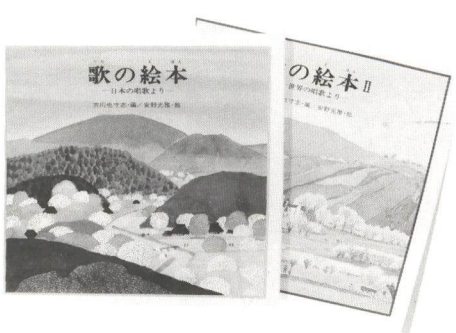
それはもう、初冬の季節だったが、東武線が浅草を離れた頃は、日は沈んであたりは真っ暗、電車は窓ガラスがことごとく割れていて、窓には板が打ちつけてあり、車内は電灯が欠乏していてほとんどまわりは見えず、おまけにすしづめの超満員、さらに念が入っていて、途中から降り出した雪が窓の板の間から吹き込むという有様——。

真夜中に日光に着き、電灯のない山道を辿って先生のお宅をさぐり当て、食料の不自由な時代だというのに、三日三晩御厄介になってしまった。いつ叩き出されても文句はいえないという全くお話にもならぬ厚かましい話であった。

「伊福部昭先生のこと」芥川也寸志、毎日新聞・1980年4月

●1980年、日本作曲家協議会会長に就任。

●芥川也寸志・編「歌の絵本」('77)
「歌の絵本II」('79)講談社より刊行。



新響によるマーラー「第6」

アマチュア・オーケストラの「新響」（音楽監督・芥川也寸志）が、山田一雄の指揮でマーラーの「第6交響曲」を上演するというので、何はともあれ、ききに行った（11月20日、日比谷公会堂）。

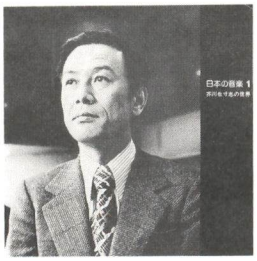
さて、その夜の山田一雄の指揮は、往年のブリングスハイムによる「第8」日本初演をほうふつとさせる熱気あふれるもので、いわば決定的瞬間の連発によって奏者の音楽的感興を絶えず誘発し、自他ともに音楽的興奮の坩堝と化す、といった趣の演奏であった。すでに実社会のさまざまなポストにいるメンバー諸氏も、この音楽のずっしりした手ごたえを、その手ごわさとともに十二分に味い尽した、といった趣の演奏だった。ステージにわりと近い所できいたお陰で、メンバーの人たちのアマチュアらしい体あたり的な打ち込み方が、その弾きぶりや表情からよく判った。

そう言えば、3年ほど前に東大オケが同じマーラーの「第6」をやった時にも、わたくしはこの欄に何か書いたのを思い出した。彼らの演奏は、技術的には今回の新響よりも洗練された、破綻のない、あえて言うならプロもはだしの上手なものだった。だがそれはいかにも、エリート集団がある管理機構の下で能率的にソツなく、一糸乱れず行動している、といった趣の音楽で、一体何のために仲間と一緒に音楽しているのか、それを問いたい思いがした。当時、その旨を書いたところ、彼らにはそれが通じなくて、ただ単純に褒められたと受けとられたフシがあり、こちらは二度びっくりした。新響の人たちに、何のために仲間と音楽をやるのかを問う必要はないだろう。おそらくプロ以上に、音楽と生活が密着している人たちの集団といえるかも知れない。音楽に多少の雑音が混っているのは、おそらくはそのためであろう。

「聴く歓び」柴田南雄、新潮社より

'79

●1979年1月18日／山形交響楽団第13回定期演奏会



伊福部　昭　交響譚詩
芥川也寸志　交響三章
　　トリプティーク
交響管弦楽の為の音楽



SELECT 5+1

アマチュア楽団 ◎オーケストラ

山田一雄（指揮者）

オーケストラでは、「新交響楽団」と、「東北大学交響楽団」。前者はアマチュア・オケであることを誇りとし、何にも縛られない自由と英知がみなぎっています。彼らのこの体質は、私に演奏というものの本来的意味を教えてくれます。後者は、常にいい演奏を聴かせてくれます。「純真なこと、勇気あること」という人間の大切な生き方が、伝統的にこのオーケストラにはあるように思います。

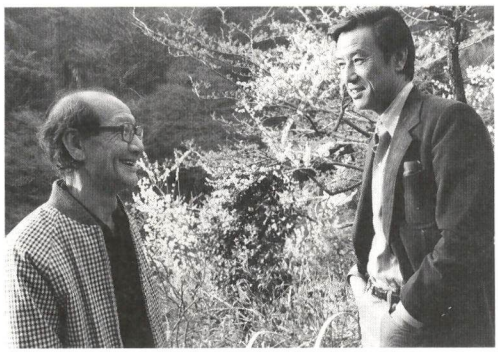
“家庭画報”85年9月号より

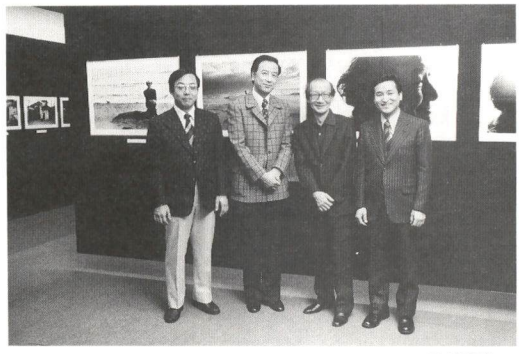


新交響楽団が、今年は早坂文雄の戦前・戦後の代表作から4曲をとりあげた。ことにそのうちの1曲≪管弦楽のための変容≫1953は、最近発見され、今回が初演であった。
芥川也寸志は早坂文雄というひとりの個性的な作曲家の代表作を一夜纏めて演奏することによって、かれの作曲家としての存在を、あらためて明確にうかびあがらせ、あらためて今日の視点から再評価してみる意味を考えたのだろう。

“音楽芸術”79年7月号より







作品展の一環として「小倉朗写真展」（木之下晃氏撮影）をニコンギャラリーで開催

芥川也寸志のもう一つの天性

小倉　朗

芥川也寸志は、楽才のほかにもう一つの才をもっているようにみえる。いうならそれは、音を扱うのと同じように、目的にむかってみずからと人とをおのずからにして動かしていくといった天性である。だが、彼はそれについて語らない。もともと生れつきの素質は、当の本人にとってごくあたりまえのものということだろうが、そういう天性から生れてくる言葉はしばしば印象的である。

その一例——。彼はあるとき僕の初期のオーケストラ曲を上演しようと考えた。そのとき僕は、「あんまり昔のものを出したくない」とお断りした。普通なら話はそれっきりおしまいになるだろう。が、彼はやがて僕のオーケストラ曲を全部、二夜にわたって上演するから、その中にこの曲を入れたい、と、そういうプランを立てて、結局、初志貫徹するのである。

この計画に僕は驚嘆し、彼に感謝し、かつ実行力に舌を巻くのだが、さてそういうように話が進んでいったあるとき、彼は僕にいったものである。すなわち、「誰それさんや誰それさんもそうだけど、あなたもまた、自分を中心にして地球がまわっていると思っている人ですね。」

これにはまったくギャフンであった。そして、以後改めようと考えるのだが、なかなかなおらない——。だがそれはともあれ、そういう僕から見ると、彼は「まわっている地球」を、思い通りに動かすことの出来る天分をもっているということになる。そして、それゆえ、彼は永年にわたって新交響楽団を盛り立て、日本のオーケストラ作品の上演をはじめとし、ほか、他のオーケストラではとても考えられないような運動を展開し、あるいは作曲家協議会、さらには著作権協会などにおける彼の指導的力量の発揮が約束されるのだ、と、考えるのである。

（作曲家）



レセプションで、井上太郎、芥川也寸志、小倉朗の各氏



ステージリハーサルを聴く小倉朗氏



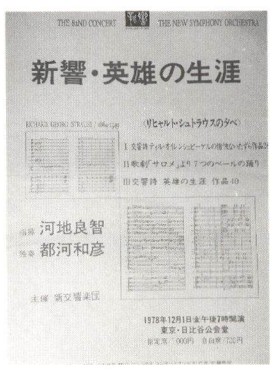


バイオリン協奏曲は団員が独奏

◆都河和彦（ヴァイオリン）43.2

自ら“どんなうまいものを食ってもうまそうな顔をしないことが特技だ”と言うが、忙がしい仕事に追われているにもかかわらず、休暇日には日帰りでスキーに行くためかいつも食物の味もわからぬであろうほど疲労困憊という顔をしている。それでもヴァイオリンを持つ腕は玄人跣。東大オケ渡欧の際のヴァイオリンソロはウィーンの楽団から勧誘の口がかかったほど。目下、生活に密着した真の音楽を謙虚に表現できる楽団でありたいという意気に燃えつつ、コンサートマスターとして活躍している。自宅は渋谷区上原。

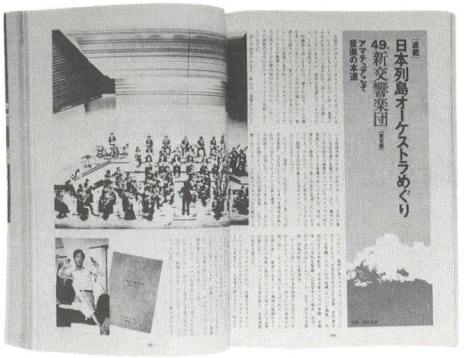
第19回演奏会プログラム
団員プロフィールより('70)



'78

'77

'76



「音楽の友」'78年8月号より

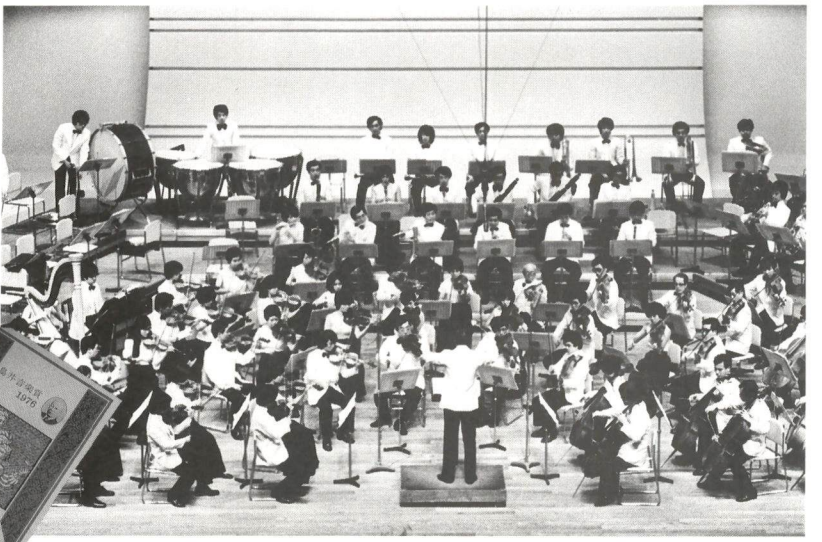


芥川也寸志・著「人はさまざま、歩く道もさまざま」（正・続）が芸術現代社より刊行



●第一回日本アカデミー賞音楽賞受賞







鳥井音楽賞コンサート、東京と大阪で

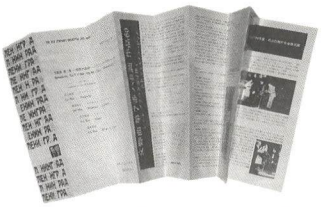
私たちは、日本人のクラシックに
冷たすぎはしなかったか？

芥川也寸志と新交響楽団
日本の交響作品展

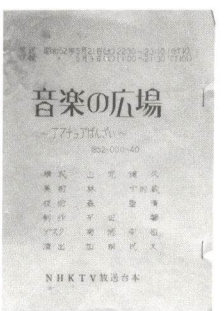
鳥井音楽賞コンサート



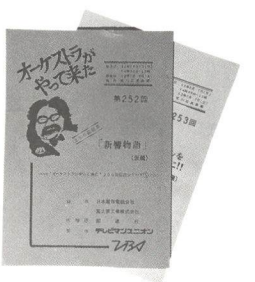


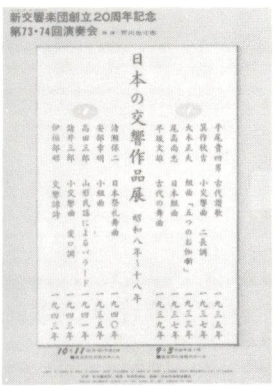


ユニークなじゃばら折りのプログラム



ユニークなポスター







新交響楽団の演奏。指揮は芥川也寸志
—東京・上野の東京文化会館で

1976年（昭和51年）10月13日 水曜日 朝日新聞（夕刊）

自在な芥川の指揮 楽員も敏感に反応

新響創立記念演奏会

芥川也寸志指揮・新交響楽団の創立二十周年記念「日本の交響作品展」（昭和五十一年）の第一回、現存の五人の作曲家による作品をきく、十二日、東京文化会館）

前回（昨年四月五日）とちがって、平均年齢も若く、五年若くなっただけなのに、この顔ぶれの作曲家の技術、内容の変貌ぶり。入念な音出しから、芥川の指揮チェアに富む指揮ぶりとアマチュアに近い新響の演奏ぶりまで、すべてが新鮮な感覚にあふれていた。

芥川也寸志（一九一八）の「交響三章」（一九四二）は戦前すでに初演されていた作品。民謡（子守歌）の旋律はオーボエ、フルート、クラリネットが、第一ヴァイオリンが提示した情感に、第二ヴァイオリンが応じ、ヴィオラ、チェロ、コントラバスが支えるというように、ソロ楽器がほとんど入れ替わりながら歌われる。ソロ楽器がどの方位にあるかによって、音響も変わるように配慮されたオーケストレーションは、成熟した作曲家だけがもつ自信にみちた音楽だが、それがコンパクトな形式に再現されず、全体の感じが散漫になったのは惜しまれる。

諸井三郎（一九〇三）の第三交響曲（一九四三）では、第一楽章アレグロ・ヴィヴァーチッシマにみられる、ティンパニの強打をともなう激しいリズムの交錯が、この作品の特徴をなしている。

諸井誠（一九三八）の「管弦楽のための音楽」（一九六五）は、現代音楽の技法を駆使した、純粋レント・アレグロ・レント・アレグロ形式の作品。新しい響きの探求が、この作曲家の主要な関心事であることがよくわかる。

伊福部昭（一九一四）の「交響譚詩」（一九四三）の音楽は、この日の圧巻。作曲家と演奏家との緊密な一体感が、音楽に生命を与えた。

（出田 善雄・作曲家）

1976年（昭和51年）9月11日 土曜日 朝日新聞（夕刊）

戦前曲再現に成功

新交響楽団の創立20周年記念演奏会

実結んだ練習積み上げ

新交響楽団の創立二十周年記念演奏会（十一日、東京文化会館）は、戦前の日本のオーケストラ曲の再現をめざしたユニークな企画だった。

芥川也寸志指揮の新交響楽団は、昭和初期から十二年までの間に作曲された日本の交響曲のうち、三曲の作品を、ほぼ作曲順に演奏した。

第一曲は、山田耕筰の「交響曲ニ長調」（一九二四）。山田耕筰は、日本の交響曲の草分けとして、また、日本語のアクセントを生かした歌曲の作曲家としても知られる。

この曲は、山田耕筰が、ベルリンに留学中に作曲したもので、当時の日本の作曲家としては、ずばぬけた大規模な作品だった。

第二曲は、山田耕筰の「交響曲イ短調」（一九二七）。この曲は、日本人の作曲家の作品としては、はじめて、ベルリンフィルハーモニーホールで演奏されたことで有名な作品。

第三曲は、諸井三郎の「交響曲第三番」（一九四三）。

この三曲の演奏順序は、作曲年代順ではなく、逆順になっていた。

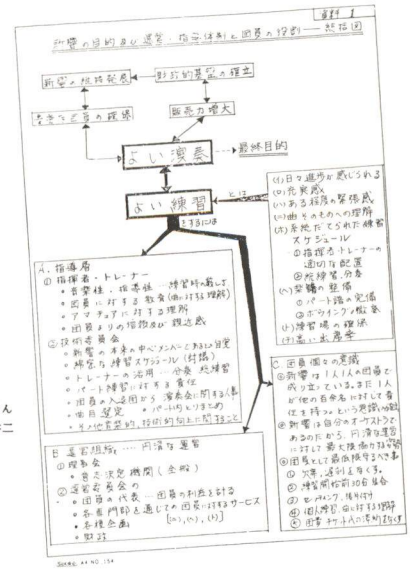
まるがかっている。少数のプロ奏者のほかは、ほとんどがアマチュアのメンバーの集まりだが、プロ顔負けの熱演ぶりだった。

（出田 善雄・作曲家）



'76年８月、創立20年を記念し、私学会館で新旧団員交歓会が催された。

●創立20周年を迎えるにあたり、団の活動をどう進めて行くかが、幾日も幾晩も話し合われた。



●「芥川也寸志と新交響楽団」第８回鳥井音楽賞を受賞

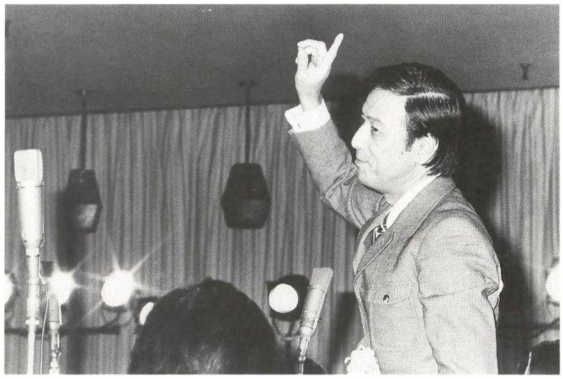
推せん理由

1976年９月３日と10月11日の２日間にわたり、東京文化会館大ホールでおこなわれた芥川也寸志指揮による「新交響楽団」の〈日本の交響作品展〉（昭和８年～18年）と名づけた演奏会は、殆ど名声のみで実質的には埋もれていた同時期における代表的な日本のオーケストラ作品を発掘・再現した企画と、個々の作品の特質を適確に把握したきわめてすぐれた演奏内容により、1976年内におけるもっとも傑出した音楽会であり、わが国の創作・演奏両面にわたり、すくなからぬ示唆と刺激をもたらし、音楽全般に寄与・貢献するところが絶大であった。





鳥井音楽賞贈呈式



贈呈式でトリプティークを演奏



佐治敬三、芥川也寸志の各氏

新響のマーク決定……芥川先生が平尾貴四男さんの奥様、妙子さんにお願いして書いて頂いた篆書二巻の始皇帝の頃の書体



平尾妙子

このたびの新交響楽団創立30周年と芥川也寸志さんの作品展をお祝い申し上げます。

一口に30年と言いましても、その間のご健闘とご努力は並大抵のことではなかったと拝察いたします。

私には、芥川さんのお名前が懐かしく思い出されることがございます。それは、お兄様の比呂志さんが付属小学校にお通いのころ、私の妹と同じクラスで、私の実家にも遊びに来られたことがおありだからです。

その弟の也寸志さんが、新響20周年記念の演奏会で、私の亡き夫平尾貴四男の管弦楽曲『古代讃歌』を演奏してくださいました。この曲は平尾がパリに留学中の27歳の折り、日本の雅楽に郷愁を感じて作曲したものです。その演奏は、指揮者の指先から妖しい絹糸でも手繰り出すように幽幻の世界が描き出され、亡き作曲者の息吹まで感じられる思いがいたしました。

この演奏会の打ち合わせのために芥川さんが私の家にいらしたころ、私は書道と篆刻に熱中しておりました。篆刻と申しますのは漢字を印章に刻むことですが、私は小さな枠の中に古代の漢字を図案化して自由に表現出来る楽しさにとりつかれていたのです。私の部屋にありましたつくりかけのそういった印章に目をとめられた芥川さんは、新響のシンボルマークをこの篆刻で作って欲しいとおっしゃられたのです。

今まで自分一人の楽しみのためにしていたことですので、公の印章を彫る自信などないとおことわりをしたのですが、たってのご依頼に、ない知恵をふりしぼり、ようやくできたのが、ただ今ご使用いただいているご紋章です。自慢できることは、世界にたったひとつのデザインだということと、作者が平尾貴四男夫人であると言うことです。

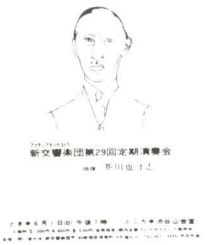
（作曲家　平尾貴四男　夫人）

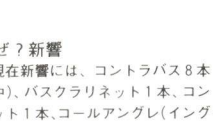


アムステルダムのストリートオルガンの製作工場で、自作を演奏中

'75

ストラビンスキー3部作



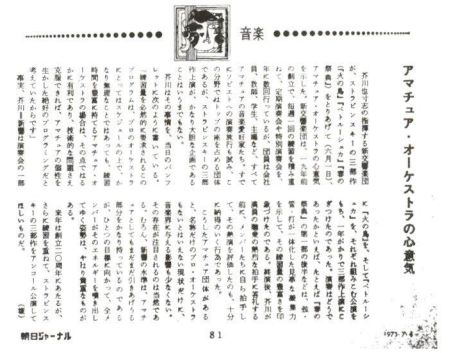


ストラヴィンスキー三部作も、実は数年前からの一つの夢でした。練習量を必然的に要求されるこのプログラムは、プロのオーケストラにとってはスケジュールの上で、かなり無理なことではあっても、練習時間を豊富に持てるアマチュア・オーケストラの場合は、その点ではるかに有利であり、技術的な問題さえ克服できれば、アマチュアの個性を生かした絶好のプログラミングだと考えていたからです。

まず“火の鳥”をプロの一部とするコンサートをやり、その次に“ペトルーシュカ”を経験し、それから“春の祭典”に集中する——したがって、これも一年がかりとなりました。

何をやるにも手間ひまがかかり、また、その手間ひまを厭わず、手を抜かずに正直にやっていくのがアマチュアというものです。

芥川也寸志・ストラヴィンスキー３部作のプログラムより('75)


音楽

アマチュア・オーケストラの心意気

朝日ジャーナル

81

1975.7.4

なぜ？新響

現在新響には、コントラバス８本（１本修理中）、バスクラリネット１本、コントラファゴット１本、コールアングレ（イングリッシュホルン）１本、ティンパニー２対、大太鼓、チューバ、譜面台80本、シンバル、その他打楽器の小物、等の楽器があります。

これらは創立以来の演奏活動の収益や芥川先生のご協力等でそろえたものばかりです。またこの他に、楽譜も相当揃っていますが、これもやはり楽器と同じようにして揃えたものです。

よく社会の人に“オーケストラにはいってやっている”って言うと、“月々どのくらいもらうんだ”なんてきかれます。

みなさんご存知のように、我々はアマチュアのオーケストラですから、個人個人がお金をもらうなんていうことは絶対にありません。収益となったお金は、楽器、楽譜、譜面台、活動費にと化けてしまうのです。正直なところ、もらってるというよりも、お金は出し、事務活動、労役も進んで行なう、というのが現状なのです。またこの現状がどのアマチュアオーケストラでも、このとうりであると私は思います。少ないひまと、さびしいふところをおしみなく提供できる人、このように特殊な人でないとオーケストラ活動をささえること、積極的に行なうことはできません。

今舞台にすわっているのは、こんな現状をみつめながら、音楽をやりたくて、やりたくて、やっている新響の団員たちです。また次の演奏会にも、団員がチケットを買って下さいとみなさんの所へ伺うと思いますが、そのときはどうぞよろしくお願いします。

本日は久しぶりの客演で行なう演奏会で団員は、いつになくはりきっております。最後までご静聴下さい。

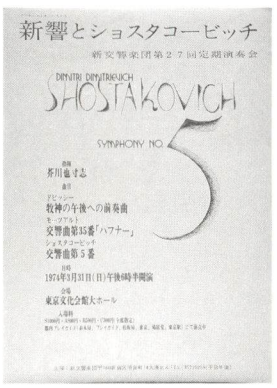
本日はご来聴ありがとうございます。

（森田）

新響十戒

一、新響はアマチュアの演奏団体であることを意識すべし
二、練習に遅刻・欠席するなかれ
三、個人練習を怠るなかれ
四、セッティング・後かたづけを積極的に行うべし
五、楽譜を大事に扱うべし
六、団費を滞納するなかれ
七、チケット・ノルマを売り残すなかれ
八、住所・電話変更などの届出を忘れるなかれ
九、新響ニュースは精読・保存すべし
十、委員・トップとの連絡を怠るなかれ

'74
'73











● 芥川也寸志・著「音楽の遊園地」がれんが書房社より刊行

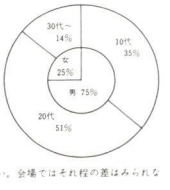


特集 新響の聴衆 ——登録会員へのアンケート結果から——

本年１月に行った新響の登録会員1300名へのアンケートを集計したところ、面白い結果がでたのでご紹介しよう。

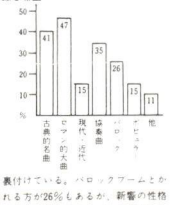
I 20代以下で86%、男性が75%

回答総数は丁度 300であるので、ある程度新響の会員全体を代表していると見てよいだろう。それによれば年令別では、ある程度うなずけるが男女別の結果は意外だった。しいて分析すれば、男性が２枚申込んで女性をさそって聴きに来るということがあるのかもしれない。会場ではそれ程の差はみられないから。



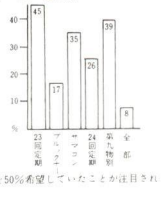
II 演奏曲目は名曲路線を希望

聴衆が若い年令層が圧倒的であることからすれば当然の結果であるとも言えよう。事実、マーラーやショスタコビッチを演奏した時の売れゆきは極端によくなく、プレイガイドでも同様な結果となっていることがこれを裏付けている。バロックフームとかでバロックを希望される方が26%もあるが、新響の性格上（演奏会数が少く、しかも沢山のメンバーを出演させねばならない）難しいことをご理解頂きたい。



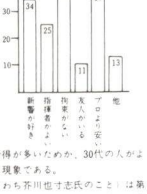
III 第九とサマーコンサートが一番人気

今回の23回に来聴希望が１番多いのは回答者中、百名様ご招待としたため、結果は日からも推測できるが第九の根強い人気はアマチュア団体とて音楽界と同じ状況である。ここには表わせないが30代の男性が、第九を50%希望していたことが注目される。



VI 拘束がない、プロより安い……会員の動機

まず、グラフに表われていない統計的事実を述べると、拘束がないが20代では44%、30代では46%、プロより安いからが30代で46%とそれぞれ平均より10%近く多いことが注目される。若い人や学生の方が可処分所得が多いためか、30代の人がより現実的なのか、面白い現象である。



「指揮者がよい」（すなわち芥川也寸志氏のこと）は第４位でアンケート結果では低くなっているが、数少い客演指揮者にお願いした時の経験から言うとプレイガイド等の売れ行きは目に見えて少い。このことから考え、また団員がチケットを売る時、“芥川也寸志が指揮しているオーケストラです。”と言うのが一番通りがよいことを考えると、実は芥川氏の著名度が一番きいていることは動かしがたい事実なのだと言えよう。

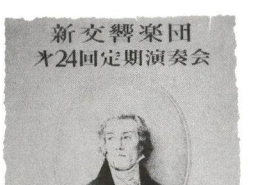
それはさておき、新響が嫌いで聞きに来て下さる方はいるはずもないので“拘束がない”“プロより安い”が1, 2位である結果を、会員の方々の現実的な理由と冷静に受けとめれば、それは逆に新響がプロと比較しても、値段と演奏の質の相対価値からみて商品になり得る、又なっていると解釈することもできる訳である。だとすれば新響の社会的、音楽的な役割は重大で、別のことから、新響の聴衆は、外国のオケやN響を聴きに行く自称高級な人達とは一致しない独特な層であることがわかっており、この人達の要望に応える必要があると言える。

V その他の意見、希望

●アマチュアの域を越えた演奏を期待する●毎月定期演奏会を●家族と一緒に安くてよい演奏かきけ●勉強になるから●全員に活気があるから。あまりよくないプロは活気がないようだ●舞台の上と下の関係が非常にやわらかく愛着を感じる●アマチュアの趣味以外の何物でもないこの感じが気にいった●芥川さんの中学の４年先輩のファンです●プロよりおもしろい●忙しいサラリーマン生活の中で音楽が生甲斐●45年暮の第九を初めて聞いて以来演奏会毎に上手になってゆくのが楽しい●アマでは一番まとまっている●早かと賞状有難う。見直しました。皆様一生懸命の演奏、和やかな雰囲気、心躍る音楽会です。今年も素晴しい演奏をきかせてください。

'72

初めてマーラーに挑戦



第23回演奏会プログラムより('72)



●芥川也寸志・著「音楽の基礎」
（岩波新書）が岩波書店より刊行



'71サマーコンサート・R. コルサコフ＝交響組曲「シェラザード」では思いおもいの服装で

外山雄三氏にきく……

芥川音楽監督の骨折りによって、外部の良い指揮者によって刺激されたいという団員の希望が実現することになった。練習の終ったある晩、外山先生を囲んでオケ談義に花が咲く。以下はその再現である。

指揮棒に敏感な新響（？）……

◇練習でお感じになったことを。

――言ったことがすぐなおるということです。芥川さんの指揮に大変慣れているんで、指揮者がちがうとまるで初見同様になってめちゃくちゃになってしまうと、おどかされてたんだけど……そんなことは全然なくて(笑)

正直いって僕がこう思っているということがわりと、というより大変敏感に伝わるんでびっくりしました。

◇アインザッツ（音の出）が悪くて出おくれるとよく言われるのですが。

――出おくれるというよりは、今日は特に弦楽器が、espressivo でひこうと思うと突然テンポがかわるくらい遅くなる。だから espressivo にはひいているけど、結果としては一つ一つていねいにひいておもくなっている。

◇ *pp* を強調されますがアマチュアオーケストラは *pp* をひくのが下手なのですが。

――というよりダイナミックの差がないとつまらないからで、できあがってからここは大きく、小さくというのは僕は反対です。いろんなことが全部ひけてから表情が出てくるというのは嘘だと思う。たとえば、ピアノの基礎を習う時、無味乾燥でもなんでもコッチン、コッチン、指さえ丈夫になればよいという教育をうけるとねえ、ちがっちゃうでしょう。だから始めから、特にオーケストラの場合は楽譜に *p* とかいてあったら反射的に *p* でひくくせを身につけるべきだと思います。

まだひけないんだからという、それは程度問題で、たしかにはっきり譜面もよみきれないし、どう弾いたらよいかわからない時はいろんなことをやってもしょうがないということはあるけれど、一方、ちゃんとひけるまで何も考えないでよいということは反対です。

アマチュアゆえの妥協は論外……

◇プロのオケだったらこうやるんだけどアマチュアだからこうやろうというようなことは。

――そのようなアマチュアだからというような前提がなければならないんだったら僕は引き受けたくない。それはもちろん技術的に完全なオーケストラ、あるいはそれに近いオーケストラというのと、そうでないオーケストラとの違いは意識しなくても自然に出てくるかもしれないけれども、指揮者の立場としては、皆さんがアマチュアだから、俺は本当はこれくらいのテンポでやりたいんだけど、これくらいで妥協しようという気は、たとえテンポのことだけでもそういう気はないです。

一生懸命やってもやってもできない所はあるでしょうけれどもはじめから手加減するなど論外です。

第20回演奏会プログラムより('70)

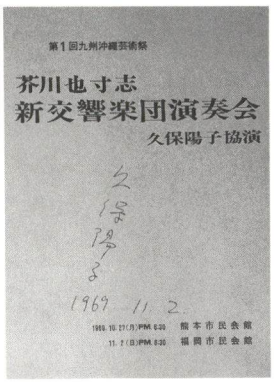
'70



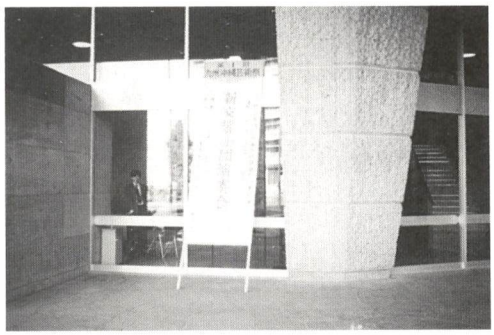


外山雄三氏客演

'69

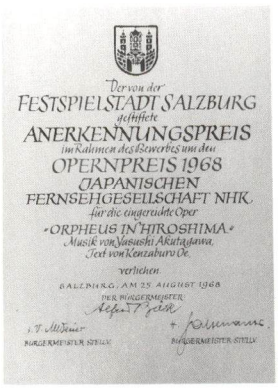


返還前の沖縄、九州に演奏旅行
J. シュトラウス＝こうもり序曲
チャイコフスキー＝ヴァイオリン協奏曲
（独奏：久保陽子）
ドヴォルザーク＝交響曲第９番“新世界より”





'68



芥川也寸志作曲、オペラ「ヒロシマのオルフェ」がザルツブルグ・オペラコンクール第一席に入賞



初めて客演指揮者を迎える。近衛秀麿氏

◆モスクワ

モスクワでの２回目の演奏会は、モスクワ大学の大講堂で、ステージ正面にはでっかいレーニンの肖像がぶら下っていた。

舞台稽古をしていたときは、さほど気にならなかったのに、本番が始まると、いやに気になり出した。舞台は横に長く、奥は比較的浅いので、でっかいレーニンに始めから終りまでにらまれて通しである。

それでも始めのうちは、よく禿げたなあなどと思いながら棒を振る余裕があったのに、そのうちにだんだんおかしくなってきた。ヘラヘラと笑ったような気がしたりウィンクしたような気がしたり、やたらに気味がわるくなり出した。畜生この野郎めが、と思えば思うほどますますいけなくなる。そこで私はカラヤン流に眼をつぶることにした。ところが、そのとたん、わが新響の演奏は断然光彩をはなち出したのである。

モスクワの演奏会での私の印象は、〈やっぱりレーニンは偉いんだなあ〉である。

芥川也寸志・第15回演奏会プログラムより('67)



そもそもこのソ連への親善演奏旅行は、新交響楽団が独自の企画で行うものではなく、日本とソヴィエト青年間の交流団体である日ソ青年友情委員会と全ソ青年団体委員会との文化交流協定にもとづいて実現されるのです。両委員会は日ソ両国青年間の文化、芸術、スポーツなどあらゆる分野の交流をし、両国青年の親善と相互理解を深める為に活動しており、毎年いろいろな多くの代表団が行ったり来たりしております。

以上のような意義のもとに訪ソするのですから一般的な楽団の演奏旅行とは少し性格が異なります。ソ連の青年組織の招きによって行くのですから演奏会も青年を対象として開かれ、一切無料のコンサートです。私がこの五月に日ソ青年友情委員会から青年芸術団の一員として派遣された折、モスクワで打合せをして参りましたが、その際、全ソ青年団体委員会の係員は、ソヴィエトへ外国からのアマチュアオーケストラの来演は今迄になく、新響が始めてであり大変関心を持っており今から楽しみにしていること、又お互いの友情を深める為に少しでも多くの人に聞いてもらえるようにと、すべての演奏会を全ソ青年団体委員会の責任において無料のコンサートにすることになりました。（戸田）

訪ソ記念演奏会プログラムより('67)


11年目に夢果たす新響

振りそで姿で親善も

喜びいっぱいの芥川氏

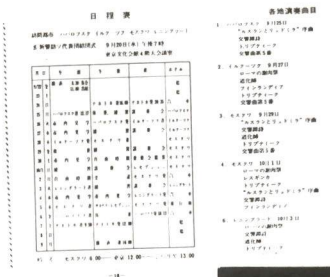
モスクワでテレビで録画され、新響の演奏はソ連全土に放送された。

















●芥川也寸志・著「音楽を愛する人に」が筑摩書房より刊行

'66



新響をはじめてから、今年で10年になるそうです。十年一昔とはいうものの、こと新響に関するかぎり、10年の想い出は、なお昨日の如く鮮明です。

悲しい呼び声に似た響きをあげていた初練習、今はもうなくなってしまった日本青年館の大ホールでなんとか<運命>をやった第1回演奏会、モーツァルトばかりで開いた第2回演奏会、会津若松での最初の地方公演、<新世界>とチャイコフスキーの5番を持って駆けずりまわった連続演奏会、北海道の演奏旅行、へとへとになったベートーヴェンの9番、四国一周の旅、新交響楽協会の誕生、みんなみんな、想い出の壺に生けられた花のように、古きも新しきも、それぞれほろ苦い香りを放ちながら、今なお、私の心の中で咲き誇っております。

今、10年をふり返ってみて、どうしてこんな苦労をしてきたのか、どうしてこんなにたくさんの時間を新響のために費してきたのか、正直のところ、自分でもよくわかりません。しかしそうかといって、ただなんとなく、私の30代を新響と一緒に過してきてしまった、というのでもありません。強いていえば、何か駆り立てられるような気持が、いつも私と新響とをつないできたように思います。

ベートーベンチクルスプログラムより('66)

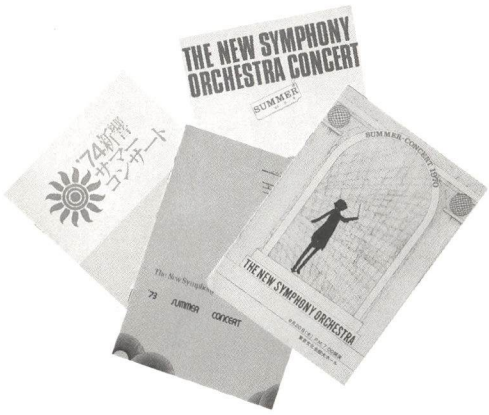
●1965年暮からそれまでバックアップを受けていた東京労音と意見が対立、種々討議が重ねられたが遂に合意に達せなかった。1966年3月、東京労音から独立し、新交響楽協会を設立。団名を新交響楽団とした。

'65



初めてのレコード録音

'64



'64年、軽いプログラミングのサマーコンサートが初めて開かれ、以後9回を重ねる。



新響よ、さらに躍進して下さい　　桜井武雄

もう5、6年まえのことになるでしょう。渋谷にあった練習所からの帰りみち、これからの「新響」のあり方について、芥川さんは驚ろくばかりの真剣さで、その悩みと抱負を語りつづけました。悩みながら、眼を輝やかせて語る、ほんとうに素晴しいことです。

やがて第2、第3オーケストラの誕生、そして昨年の第9への道……。ほんとうに素晴しいことです。交通地獄の中を大きな楽器をかかえて集まってくる団員の皆さん。また、それに挑戦するかのように、多忙な時間をさいて駈けつける新響指揮者芥川也寸志さん。

そのどちらを欠いても今日の「新響」はあり得なかったでしょうし、また未来の新響を考えることはできません。

「アマチュアだから……」に甘えないで、プロのまねごとなんかに終らないで、しかもプロに迫って、わが新響は前進をつづけることでしょう。

新響のみなさん、あなた方のなさっていることがどんなに素晴しいことか、また新響指揮者として、芥川さんがどんなにかけがえのない人か、遠く離れて眺めているぼくにはいっそうよくわかるような気がするのです。

芥川さんはいうでしょう「Over だよ」……。でも、ほんとうにそうなのです。おめでとう！　新響のみなさん。おめでとう！　芥川さん。新響らしい、素敵なブラームスを聞かせて下さい。(団友　京都市立音楽短大教授)

'63



ベートーヴェンの交響曲第九番に初めて取り組む

<第9交響曲>のソロを歌って　　ソプラノ　**常森寿子**

とても寒い12月の夜、私は新響とのオケ合せのために、練習場（あれはどこの小学校でしたっけ）に行きました。

小使い室のストーブにあたりながら待っていると、係の人が呼びにいらっしゃり、後について行くと、全く火の気のない、だだっ広い講堂が、その日の練習場でした。

今まで東混の団員として、種々な楽団と仕事をしましたが、暖房、冷房のよく効いた所なのに、練習時間が少しでも長びくと、みんなブツブツ大変な騒ぎです。

所が、芥川さん始め新響の人達は、上着すら脱いで、汗を拭きながらの練習なのです。そこだけはあたりと違い、熱気の<うず>が巻き、寒さ等はどこ吹く風と言った様子でした。私は一瞬、感動してしまいました。

その<うず>こそ、アマチュア精神と言える物なのかも知れません。

新響の人達だけでなく、合唱団の方々にも感心しました。と言うのは、木枯しの吹く校庭で3楽章が済むまで、全員整列して、しかも校庭ですので座る所もなく立ったままで待っているのです。その上、ただ待っているだけでなくそのうち自然に、各パート別の自主練習が始まったではありませんか。

良い音楽に接っする喜び、そして良い音楽を創りあげてゆこうとする努力、その音楽の喜びをより多くの人々に分けようとする情熱、ただそれだけが、あの大勢の人達をして、寒空の下で幾時間も立たせ、火の気のない講堂で汗をかかせ、<うず>を巻き起すのだと思いました。

音楽に接する時、最も大切なのは、そういう純粋な情熱なのでしょうが、その純粋な情熱を持ち続ける事の困難さをよく知っている者として、それを目の前に見せられた時は、やはり身の引き締まる思いがしました。

又、芥川さんも私達東混の仕事でご一緒する時とは、全く違っていらっしゃいました。音程の揃わない第4楽章のチェロのテーマを、“しょうがねえな”と言いながら、幾度も繰り返して練習なさる様子は、まるで自分の子供達に教えている様でした。又、チェロの人達もいくら怒鳴られても一生懸命なのです。そこには他人にはわからない気持の通じ合いがあるのでしょう。そんな所へ入っていった私達4人は、全く他所者と言った感じでした。

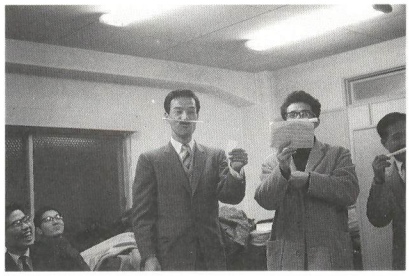
種々の事を考えると、こんなに大勢の人達が、これ程の情熱をうち込んでいる仕事のお手伝いは、並大抵の気持ではついて行けないぞ、と思ったのです。

第九演奏会プログラムより('68)

'62



●芥川也寸志・著「音楽の現場」が音楽之友社より刊行



男性は鼻にストローをはさんで……



女性は顎にリンゴをはさんで……



——新年会で——



練習場が東京文化会館に変わる

「だれでも入れるオーケストラ」という方針のもとで、新響は、第二オケ、第三オケ、ブラスバンドを作った。また、この頃の第一オケ（現新響）は全国各地の労音例会の為に、多数の演奏旅行を重ねた。

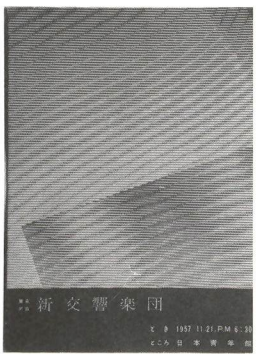


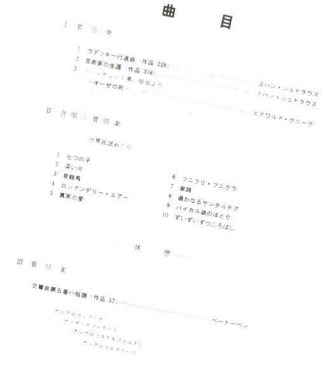






●芥川也寸志・著「私の音楽談議」が音楽之友社より刊行





音楽の鑑賞団体である労音の会員の中から、自分達の手で演奏したいという呼びかけた許に集まったのが、新響の前身である「労音アンサンブル」である。その２年後、指揮者に芥川也寸志氏を迎えて「東京労音新交響楽団」が発足、1957年日本青年館で、記念すべき第一回演奏会が行われた。



みなさん有難う！

芥川也寸志

この演奏会を聴きに来て下さった方々、本当に有難うございました。みなさんの温い声援や、批判や、励ましによって、いま産声をあげようとしているこのオーケストラは、限りない成長を続けることが出来るのです。本当によく聴に来て下さいました。

このオーケストラを構成しているメンバーは、みんな職場や学校で、働らいたり学んだりしている人たちばかりです。毎日の生活を、オーケストラに加わって演奏することによって少しでも楽しく、明るく、美しくしようとしている人たちばかりです。もとよりうまく弾いたり、上手に吹いたりすることは出来ないのですが、それでも一生懸命に演奏すれば、その中から必ず価値のあるものを生み出すことが出来るという自覚を持っている人たちばかりです。彼等は技術の大切なことを痛切に識ってはいるけれども、如何にうまくとも無感動な演奏のあることも、同時に識っています。ですからいつでも一生懸命です。一生懸命すぎるくらい一生懸命です。私たちのオーケストラには入団試験はありません。どなたでもオーケストラを楽しみたいと思う方はすぐにお入りになれます。つまり全く無制限なわけですが、これこそ私達にとって一番大切な原則だと思っています。ベートーベンの交響曲に五本も六本ものフルートは不必要ですし、技術を全く持っていたい方はすぐみんなと一緒に合奏を楽しむわけにはゆきませんが、その時には第二軍を、必要とあらば第三軍を編成するつもりでいます。とにかく無制限主義であります。このようにしていくつかのオーケストラが生れ、そしてやがては日本のどこの街にもいくつかのアマチュア交響楽団の演奏が聴かれるようになるというのが私たちの夢であり、またそのさきがけとしてのささやかなる自負の心でもあるのです。私たちの演奏は決してうまくはありません。けれども、どこまでも向上してゆこうとするファイトと情熱はいつも燃やし続けてきましたし、それだけは誰にも恥じることはないと思っています。今日聴きに来て下さったすべての方々が、その私たちの気持を受けとめて下さったら、私たちはどれ程うれしく、またどれ程励まされることでしょう。私たちのオーケストラがこれから育ってゆく唯一の道は、みなさんによって見まもられ、そして少しでも愛されるようになることなのですから今日聴きに来て下さった全部の方々に心からお礼申しあげます。

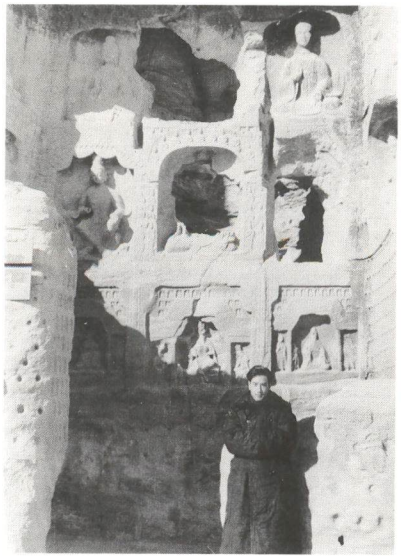
みなさん、有難う！

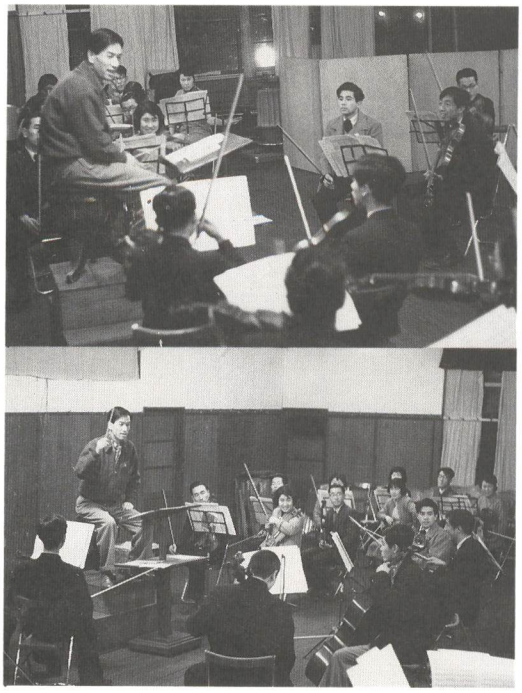
よく聴きに来て下さいました。

'56

'55

芥川也寸志氏、インドへ旅行。
エローラで強烈な印象を受けた。





＜一度でいいから演奏を聞いて下さい＞といわれて、私は気軽な気持で＜東京労音アンサンブル＞の練習場へ行ってみました。

集まっていたのは、12、3人ほどで、間もなくはじまった演奏は、スマートな名前に似合わず、それはひどいものでした。

ヴァイオリンはキーキーといななき、クラリネットはスースーとうめき、チェロは牛の鳴き声そっくりの音を出し、まるで動物園にいるようなものでした。今から9年も前のことです。

はじめのうちは、これはたまらぬとばかり閉口しきっていたのですが、そのひどい音を我慢して聞いているうちに、いつの間にか私は彼等の音楽に好意を持ちはじめました。たとえどんなに技術が劣ろうとも、生真面目な真剣な姿は、人に魅力を与えるものです。そして私は知らず知らず＜もっと弱く！もっと強く！もっと柔らかく！もっと短かく！＞などと、一生懸命叫んでいました。

ひと通り練習が終わると、彼等はこういいました。＜毎週練習に来て下さい。毎週教えてください。毎週ぼくたちを怒鳴ってください＞みんなは、とても真剣でした。よしやってやろう、と私も思いました。

第7回演奏会プログラムから('65)

'54

●芥川也寸志氏、ハンガリー
ソヴィエト、中国へ旅行

今までのたくさんの旅の中で、最も印象が強く、したがって鮮明な記憶となって残っているのは、何といっても最初の外国旅行、それも今にして思えばまったく滅茶苦茶な、心臓の強い冒険旅行であった。

それは戦後間もなく、昭和20年代の終り近く、戦争中も高水準を維持したソビエトの音楽界にあこがれて、オール借金で求めたヨーロッパまでの片道切符を手にしての、出国であった。

当時は日ソ間に国交はなく、まともに考えれば無理な話であったが、そこは若さの特権で、行けばなんとかなるだろうと、馬鹿に呑気なことを考えていた。ただ、親兄弟にも共産国を目指していることだけは言わずに発った。まだその頃の日本国内には、そんな政治的雰囲気が満ちてた。

自伝抄より



ショスタコーヴィチ氏と



モスクワ作曲家同盟にて

日本国駐在中華人民共和国大使館

祝辞

新交響楽団の創立三十周年に当たり、心よりお祝いを申し上げます。

芥川也寸志先生とは今から三十二年前に北京で初めて出逢いました。当時中国と日本との間に国交がまだ回復されていないにも拘らず、先生はヨーロッパの国を訪れた後に、モスクワを経由して中国へ訪れて下さいました。そのとき、中国の音楽界の方々と触れ合い、上海で先生の作品と中国の作品の演奏と指揮され、中国の聴衆者の心を深く感動させ、高い評価を得ました。先生のお若い頃のご練達ですばらしい人柄と作品創作の意欲ぶりが私に最も深い印象を残して下さいました。

これまで長い間、先生は中国と日本の音楽交流において多大なご尽力をつくして頂いていることに、心より敬意と感謝の意を表する次第であります。

このたび、新交響楽団が芥川也寸志先生の作品の演奏会を催されたことに、心より喜ぶと同時に、演奏の大成功を祈ります。

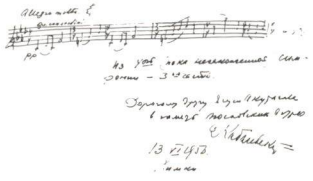
中国文化館文化参事官
王達祥
1986年11月

私の親愛な優れた作曲家芥川也寸志が、
みごとで善良な自己の才能を、平和と人生の美に捧げられていることに対し、心から敬意を表し、挨拶を送ります。
1986.11.
ドミトリー・カバレフスキー

JASUSI AKUTAGAVA
SERDECHNO PRIVETSTVUYU MOEGO DOROGOGO DRUGA
VYDAIUSCEGOSIA KOMPOZITORA POSVIATIVSCEGO SVOI
PREKRASNYI DOBRYI TALANT BORBE ZA MIR ZA
KRASOTU JIZNI
DMITRI KABALEVSKY



カバレフスキー氏と



カバレフスキー氏のサイン



自作を上海交響楽団で演奏

'54

●1954年「３人の会」第一回演奏会



左より團伊玖磨、黛敏郎、芥川也寸志の各氏

三人が京都で顔を合わせたのは、全くの偶然だったのである。音楽学校で１年先輩、軍楽隊も一緒だった團伊玖磨さん、学校では２年後輩の黛敏郎さん、それに私、当時は映画会社が各社とも、かなりの数の映画を京都撮影所で作っていたので、３人とも映画音楽の仕事で、京都に来合わせたのである。

加茂川沿い、木屋町五条の宿屋で、何となく話が始まった。

〝三人で共同して作品発表会をやれば、プログラムも面白くなるし、第一、経費が三分の一で済む。３人で会でも作ろうか……〟。

偶然顔を合わせ、何となく始まった話は、たちまち会の結成から、〈３人の会〉という名前をきめるところまでいった。

第１回の演奏会は昭和29年１月、日比谷公会堂で東京交響楽団を使って３人がそれぞれ指揮した。

私はなけなしの金をはたいて、その日のために燕尾服を新調した。そのころ、洋服にしろ、ワイシャツにしろ、とにかく新しいものを初めて身につけた日には、どういう訳か必ず雨が降ったが、新調の燕尾服を着た発表会の当日は、日比谷公会堂も埋まるのではないかと思うほどの、大雪となってしまった。

自伝抄より

'50

●1950年、日本交響楽団第320回定期演奏会で戦後初の邦人作品として、芥川也寸志作曲「交響三章」が演奏された

伊福部　昭

芥川也寸志君と初めて会ったのは、終戦の翌年の秋、私が芸大で講座をもった最初の授業の時であった。その折、次回は、何んでもよいから各自、作品を持参するようにと約した。

当日になって、Ａの字で始まる芥川君が最初にピアノを弾くこととなった。

それは、見事なものであったが、口の悪い私は、演奏もなかなか巧く勝れた感性が認められるが、何かが不足しているように思われる、作者の心の中には恐らく明確な何か旋律線のようなものがあるらしいが、その訴えが作品からは読みとり難いように思うと云った。

彼は、ニコニコしながら、これは歌曲の伴奏部なのですと答え、教室が大笑となった。

このことがあってから、学生とか教師とか云う隔たりのようなものが全く無くなり、爾来、今日に至っている。

当時、私は日光の奥の小さな一軒屋に住んでいた。彼は態々、そんな所に作品を携えて来られ、幾日か逗留され、夜を徹して音楽について語り合ったりしたが、その探究心の強さと、感性の豊かさには、流石に血統はあらそえぬものだと思った。

以後、優れた数々の作品が発表され、又、楽会のみでなく八面六臂の活躍をされていることは、今更、茲に述べる必要もないであろう。中でも、新交響楽団の創立と、今日まで30年に亘る持続は特筆す可きものの一つであると思う。

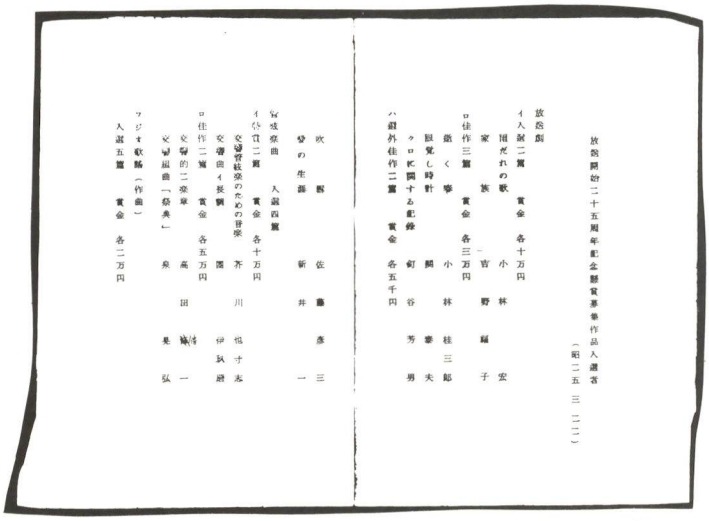
又、聞けば、今日まで楽員の要望にもかかわらず自作品の演奏を許さなかったと云う。

これは見事なことである。自作の発表に対して一種の含羞みをもつと云うことは、芸術家として必須の資質だからである。これは、彼が優れた芸術家であることを物語るものに他ならない。

ラ・ロシュフーコーは、『反省』の中で『しばしば、吾々は、吾々の最も美しい行為をも恥ずかしく思うであろう』と述べている。

今回、芥川君の作品が、続けて聴けることは真に楽しみであり、演奏会の成功を心から祈って止みません。

（作曲家）



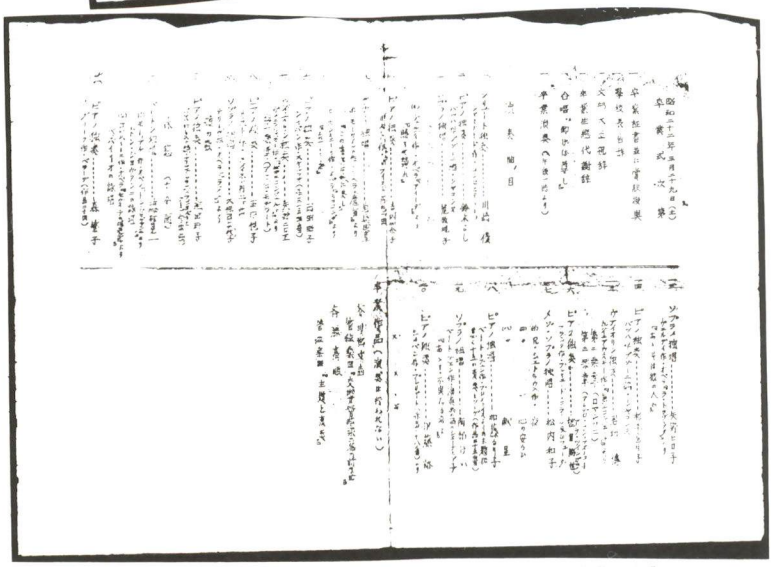
●1950年、ＮＨＫ放送25周年管弦楽懸賞で、芥川也寸志作品「交響管絃楽のための音楽」が特賞に入賞

'49



●1949年、東京音楽学校研究科修了

'47



●1947年、東京音楽学校作曲部卒業

'44

●陸軍戸山学校に入隊

二十年の四月の十三日、この日は金曜日だった。その夜、空襲のために戸山学校は全焼した。そして、焼け跡生活の中で、僕達は生徒期間を了えて上等兵に任命された。二百五十人の生徒の中での成績最優秀者は芥川也寸志だった。軍隊の生徒としての成績は学業の成績だけではない。内務と言われる清潔、整頓、素行、日常の起居動作、みな厳格に見られるのである。二百五十人中で一番になるなどとは並大抵の男の出来る事ではないのである。僕にしても一所懸命に努めたのが、洗濯が厭で厭で殆どしなかったために虱をわかせ、そのために減点されて四番までしか行かなかった。芥川という男は、優れた、不気味な男であると今でも思う。

團伊玖磨・著「エスカルゴの歌」より

'43

●東京音楽学校作曲部入学

私が音楽を正式に勉強するチャンスが来たのは、中学四年生になって、高校の入試のためにクラス全員が、文科志望か理科志望かを答えさせられた時に、つい音楽志望と言ってしまった時からであった。

学校から連絡があり、母もやっと私を音楽家にする決心をしたようである。遠いうてを頼って、東京音楽学校の作曲科主任教授をされていた、橋本国彦先生のお宅に伺った。

〝作曲の勉強はしたことがあるの？〟

〝いいえ〟

〝ピアノは弾けるの？〟

〝いいえ〟

〝……？〟

〝いいえ〟

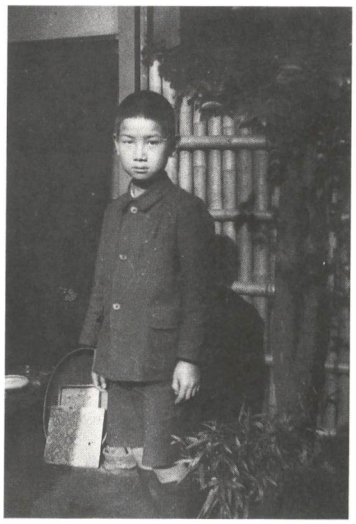
とにかく、答えは全部〝いいえ〟であった。橋本先生は呆れた顔をされたが、それでもすぐピアノの井口基成先生を紹介して下さり、当時ピアニストとして最も高名であったこの大先生に、何とバイエルから教えて頂いたのである。

私は夢中になって勉強を始め、とうとう体をこわしてしまった。昭和十六年十二月八日、太平洋戦争勃発のニュースは、肋膜炎の病床で聞いたのである。

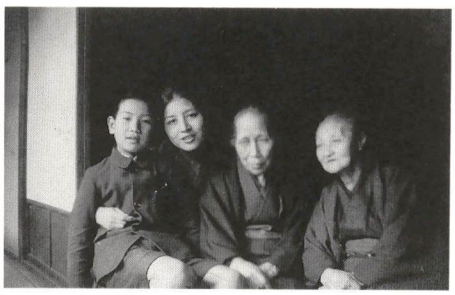
早朝のラジオから、けたたましいコールサインが流れ、太平洋上で戦争状態に入ったという短いニュースのあと、ベートーヴェンの〝運命〟が響き渡った。

私は今までの生涯の中で、この時に聞いた〝運命〟ほど、強烈な印象を与えられた音楽は、ほかにはない。

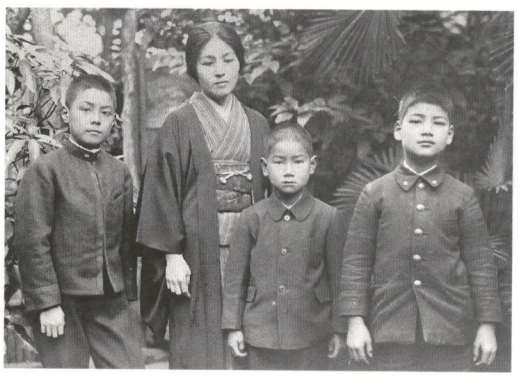
自伝抄より



小学校六年生になった時に



小五、御母堂様、大叔母様方と

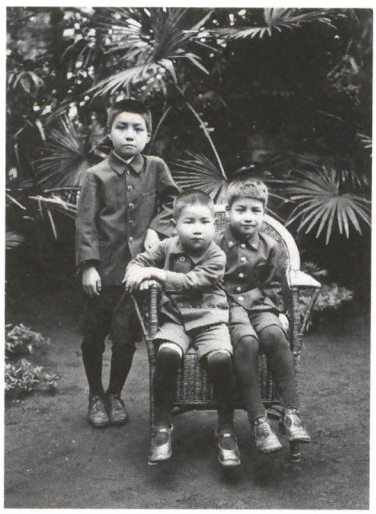


小学校入学記念

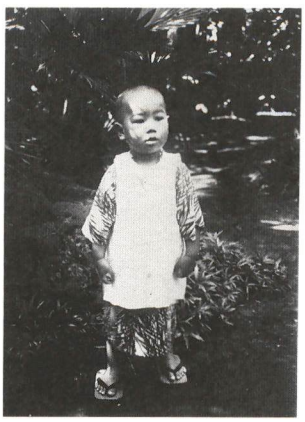
もちろん、小さな子どもたちにストラヴィンスキーとか、ペトルウシュカなどという難しい人の名前や曲の名前が分かっていた訳ではない。とにかく昭和初期におけるストラヴィンスキーといえば、超現代音楽だっただろうが、毎日毎日聞いていたのだから、すっかり覚えてしまった。

幼稚園に行くようになったころの遊びで、アマゾンごっこというのをよく兄としていたのを記憶している。一人がアマゾン河の探検隊員になって、一人が凶暴な野生動物になって探検隊を襲う遊びだが、この時は必ずストラヴィンスキーの〝火の鳥〟の初めのところをかけるのである。この遊びは、多分、ストラヴィンスキーのレコードと、キングコングかなにかの映画に触発されて作った、兄の発明だったのだろう。

自伝抄より



幼稚園の頃



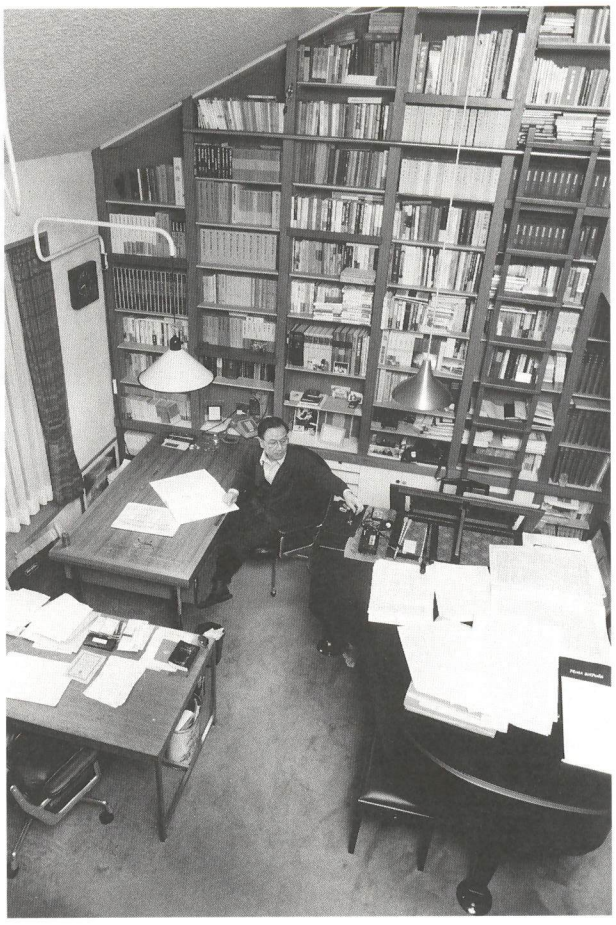
3歳頃



御両親と

心温い、配慮の持主

木之下　晃



芥川さんの部屋を写そうと御邪魔する時、彼は口癖のように「木之下さんは部屋を片付けると、怒るから……」とおっしゃる。

芸術家の部屋はその人の性格を反映して、実に興味深い。写真を写す者として、野次馬根性の覗き見で、出来るだけ、その人のありのままの姿を写したいと願う。部屋をきちんと整理整頓している人、其処彼処かまわず散らかし放しの人、人様々、色々である。写真を写しに伺う段になると後者の方々も、それなりに片付けて、他所行きの顔をなさる。どうもそれはその人らしさが何か欠けてしまうので、そのままに、絶対に片付けないでとお願いをする。

以前、小倉朗さんの写真を写していた時、傍にいらした芥川さんが、私の口癖を覚えられて、私を見ると前記のようにからかわれる。

芥川さんの部屋は「片付けるな」と云っても、それは無理で、最初からきちんとしていて綺麗である。

芥川さんの自筆の楽譜を見ると、そのことが明瞭に判る。繊細に、まるで印刷したみたいに美しく書かれている。私が知る限り、日本の作曲家で芥川さん程に丹念に綺麗に書く人を他に知らない。

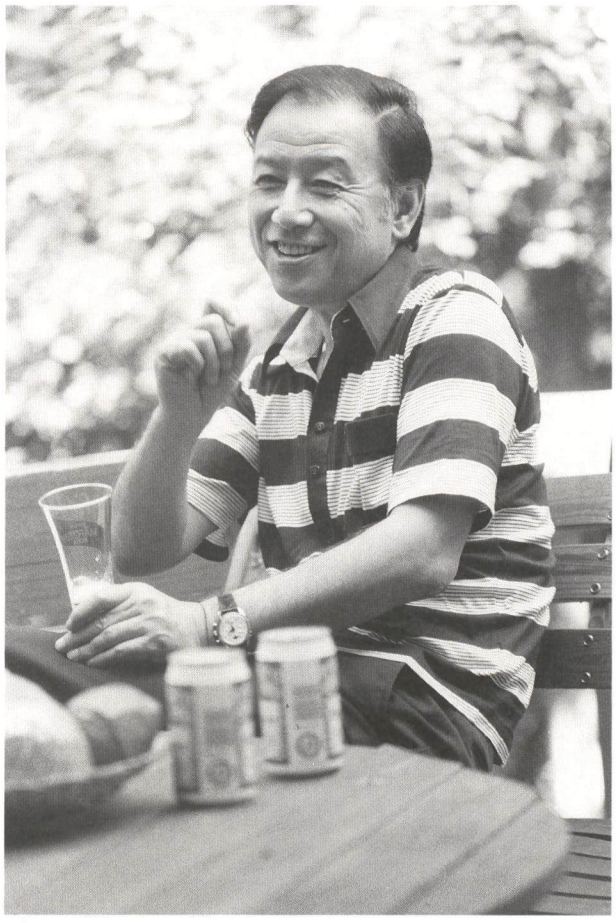
芥川さんの他人に対する心温かさ、心憎い程に細かく行き届いた配慮。それらのこと全てが、そのままに芥川さんのアトリエであり、そこで書かれる楽譜であり、音楽である。

そして年齢を捨象させる風貌は清眸が素敵で、温かな眼差しは写し手の心を和ませてくれる。

（写真家）









交響曲第一番

作曲年代　1955年
初　　演　1955年12月8日
上田国仁指揮
東京交響楽団
日比谷公会堂
演奏時間　28分

楽器編成　3管
Picc., 2 Fl., 2 Ob., Cor Ing., 2 Cl., Bass Cl., 2 Fag., Contra Fg., 6 Hr.,3 Tp., 3 Tb., Tuba, Hp., Tim., 大太鼓, 小太鼓, シンバル, タムタム, 木琴

芥川也寸志の音楽語法について
——交響曲第一番を中心にして——

毛利蔵人

芥川さんと私とは25歳の年齢差がある。ほぼ一世代の違ひといへよう。私たちの世代の作曲家、つまり戦後生まれの作曲家たちは、外国の作曲家から多くを学ぶと同時に、いや、もしかしたらそれ以上に我国の先輩の作曲家に負ふ所が多いのではないかと思ふ。少くとも私自身はさうだ。私事に触れることをお赦し願ひたいが、音楽の専門教育を全く受けたことのない私にとって、同じ時代に生きる日本の作曲家の作品を聴くことが何よりも刺激となり、滋養となった。芥川さんの音楽は、その様にして私が身近に感じた幾人かの日本の作曲家のひとりの作品として私の前に表はれた。後輩の作曲家が先達の作品をどの様に聴くかを語ることは、結局は私的な想ひを述べることでしかないが、そのことによって、芥川さんの音楽を愛聴する人がより一層ふえることにつながるかも知れないと考へ、新響からの御依頼を受け、拙稿を綴る次第となった。

芥川さんの音楽は明快で解り易い。これは驚くべきことだ。一般に「現代音楽」は難解だと思はれてゐる。これには幾らでも反論できるのだが、ここはそれをする場ではないので省略するが、多くの人が私たちの音楽をむづかしいと、実際に思ってゐる中で、芥川さんの音楽をむづかしいと感じる人はまづゐないだらう。ただ、この点が最も重要なことなのだが、むづかしい音楽を書くのは、ある意味では容易だが、解り易い音楽を書くのはむづかしいことであって、並の能力の人にできることではないのだ。

芥川さんの音楽の特徴を具体的に挙げてみよう。

一．旋律が明瞭で美しい。

一．リズムがはっきりしてゐる。特にテンポの速い曲では、オスティナートに乗ったシンコペーションが著しい。

一．和声構造が明確である。

一．楽曲構成の起承転結がはっきりしてゐる。

一．それぞれの楽器の機能が充分に発揮できる様に書かれてゐる。

まだ他にもあるかも知れないが、これらが個々に独立して存在するのではなく、有機的関連性を保ちつつ音楽が構成されてゐることは改めていふまでもないだらう。

次にこれらについて今日の最後に演奏される大曲、交響曲第一番から実例を挙げて見て行かう。

第1楽章の冒頭、四六の短三和音のクロマティック下降と、ひとつの共通音をもつ短三和音の下降に支えられて、クラリネットのソロに始る旋律が上行する。ここでの短三和音は機能和声としては働いてゐないので、基本位置か転回型のいづれかは、さ程重要ではない。しかし、平行進行であることと、クロマティック下降であること、及び上声部と下声部が反進行することが、この壮大なシンフォニーを支へてゐる最も重要な柱のひとつであることは次第に意識されてくるだらう。（譜例①）

やがて同じ旋律がオクターヴ上で第1ヴァイオリンによって歌はれるとき、副次的な対旋律が加はり、冒頭と同じ和声進行の中で、低音の縮小型による、より重要な対旋律が聞こえる（譜例②）。そして、それらの絡み合ひのうちに、*ff* でA音に達するとリズム動機が表はれ、（譜例③）、そこまでが、その動機を導くための長いアナクルーズであったことに気づくと同時に、A音への指向性を強く感じる。そのリズム動機は、短三和音の響きの中で声部をふやしつつくりかへされ、やがて低音のA、Eのドミナント進行に支へられた短三和音の平行に *ff* のテュッティで到達し、はっきりとした姿を見せる（譜例④）。このモチーフは後の楽章でもしばしば聞かれる。さらに、このリズム動機から導かれた絃楽合奏のシンコペーションに乗って、木管楽器に新しい旋律が表はれる。その旋律はオクターヴ上行が特徴で、付点リズムと三連音も新たに加わる。内声部にはクロマティック上行が聞こえる（譜例⑤）。順次声部をふやしつつテュッティで *ff* に達した後に冒頭の旋律が長二度上で、やはりクラリネットによって弱く奏された後に、コントラバスをのぞく絃楽合奏で、また新しい旋律が表はれる（譜例⑥）。しかしこの旋律は、よく聴くと冒頭のそれと良く似てをり、他の様々なモチーフと組み合はされて展開して行く。

第2楽章は軽快なスケルツォだ。芥川さんはテンポの速い音楽を得意とする数少ない作曲家のひとりだ。絃楽器によって提示されたモチーフ（譜例⑦）を木管楽器が受け、絃がさらにひきついで金管群に渡す、といふ様に主として各楽器群間の音色の運動性の面白さを聞くことができる。せまい音域内の限られた音の組み合せを、リズム、フレージング、アーティキュレーションの変化によって様々に変容させる手法は、つとに芥川流といへよう（譜例⑧）。しかも、この例の場合に顕著である様に、伴奏音型はひたすら同じパターンをくりかへすので、少しづつ変化する主声部との対照が、より一層はっきりとする。やがて譜例⑨のリズムが絃のユニゾンに始り、木管、金管と少しづつ加はってテュッティに至るが、このときオーケストラの各楽器は最も良く鳴る音域で自然に最強音に達することができる様に周到な配慮が施されてゐる。譜例⑩に、テュッティに至った際の各楽器の配置を示さう。

第3楽章はコラール。ここでは長短両三和音の組み合せと、上声、下声の反行が著しい（譜例⑪）。絃の弱音に始るコラールは、次第に他の楽器も加はって、重層的にぬり重ねながら *ff* へ向ふ。次に、うすくオーケストレーションされた対位法的部分が、コラールと対照的に置かれ（譜例⑫）、第1楽章のリズム動機が復帰する（譜例⑬）。その後はコラールの再現である。

終楽章はアレグロ・モルト。最初のテーマは、例によって楽しいリズムの遊びが、規則正しい刻みに乗ってくりひろげられる（譜例⑭）。ここでも短三和音が圧倒的に優位を占めるが、長三和音に乗った副次的モチーフによるブリッジが、その後にすぐ続く短三和音のクロマティック下降との鮮やかなコントラストを見せる（譜例⑮）。やがて木管と絃の増三和音が響き渡る中で、ホルンとトロンボーンの楽句が朗々と鳴る（譜例⑯）。増三和音の出現は初めてなので、極めて新

鮮に聞こえる。さらに第１楽章のモチーフに基く金管の強奏を経て、バスのＤ音の持続上に例のリズム動機がまた聞こえてくる。(譜例⑰)

以上、交響曲第１番について特徴を幾つか述べたが、この大曲で集大成されたともいへる書法は、今日演奏されるそれ以前のふたつの作品、「交響管絃楽のための音楽」と、「絃楽のための三章」に於てもすでに試みられてをり、さらに今年、1986年の作品である「アレグロ・オスティナート」に至るまでも一貫してゐる。

最後に、昨年の６月にガンのため、46歳で逝った作曲家八村義夫が芥川さんについて書き残した文章の一節を引用して拙稿を終へることとしたい。

……実に異常なリアリティと切れ味の鋭い才能を持っている人だ。(中略) 才能というものはおそらく外的には最も目だたない個所においてつかわれ、その堆積が最大限の効力を発揮するようにしておくのが、才能の、いわば基本的な使い方なのだ……

〔八村義夫著「ラ・フォリア」草思社刊より〕

(作曲家)

譜例－①



譜例－②



譜例－③



譜例－④



譜例－⑤



譜例－⑥



譜例－⑦



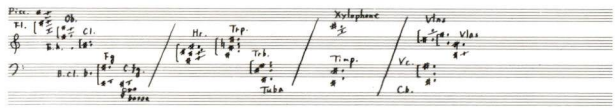
譜例－⑧



譜例－⑨



譜例－⑩



譜例－⑪



譜例－⑫



譜例－⑬



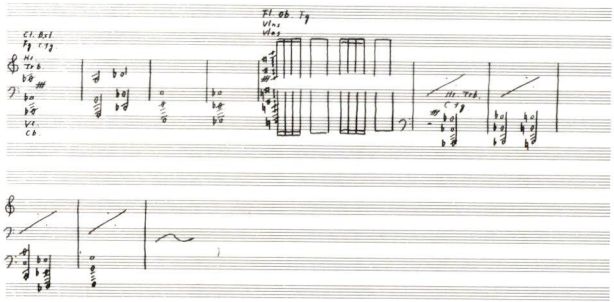
譜例－⑭



譜例－⑮



譜例－⑯



譜例－⑰



エローラ交響曲

作曲年代　1957～1958年　　楽器編成　3管
初　演　1958年4月2日
作曲者指揮
ＮＨＫ交響楽団
新宿コマ劇場
演奏時間　17分
Picc., Contralto-Fl., 2 Fl., 2 Ob., Cor Ing., 2 Cl., Bass Cl., 2 Fag., Contra Fg., 6 Hr., 3 Tp., 3 Tb., Tuba, Hp., Pf., Cele., Tim., 大太鼓, シンバル, タムタム, ボンゴ, コンガ, ウッドブロック, 鈴, マリムバ

芥川也寸志（1925～）は、1957年に欧州各地を旅行した時、帰りに立ち寄ったインドの古代石窟寺院で彼はふしぎな感動を受けた。巨大な岩山に彫られたこの寺院とその彫刻に、彼は圧倒されると同時に、そこに魔術的魅力を感ぜずにはいられなかった。彼はこの偉大な迫力は何んだろうと考えた。そして、これは西洋とは異なった別の世界の力であることに気づいた。その空間は、巨大なピラミッドの積み重ねでつくられた空間、加算の概念の上に出来上がっている構成とはまったく違った、東洋独自の構成法であると強く感じた。これを音楽の上でも追求出来ると彼は考え、西欧の音楽構成法におけるプラス空間とは逆のマイナス空間と言う異質構成法を試み始めることになった。この考え方は、一言で言えば、主題を定め、それを積み重ねたり発展させたりするソナタ形式などの音楽形式の踏襲を捨て、東洋独自の構成法を自分達の手でつくろうとする試みだと言ってよいだろう。

芥川自身は「ここに新しい音構成への足掛りがあると考えます。いわばこの交響曲は、その手さぐりの始まりです」と言っている。

こうして、彼は新しい構成への暗示と、知的な現代の芸術に失なわれている強烈な生命力とその表現力をあらためて考え直すきっかけをつくった。忘れがたいこの原始的な東洋の石窟寺院の名をとって、この作品を**エローラ**（Ellora）**交響曲**と名づけた。帰国後1958年3月に完成し、同年4月2日に行なわれた第三回〈3人の会〉発表会に、作曲者指揮、ＮＨＫ交響楽団の演奏によって初演され、内外を問わず大好評を博した。

全楽章は20楽章だが、いずれも短く、レント・アダジオのゆっくりした性格の楽章とアレグロの速い楽章との二つの性格を対比している。

①レント（I）、②レント（II）、③レントーアダジオ（III＋IV）、④アレグロ（V）、⑤レント（VI）、⑥アレグロ（VII）、⑦アレグロ（IX）、⑧アレグロ（X）、⑨レント（XI）、⑩アダジオ（XII）、⑪アレグロ（XIII）、⑫アレグロ（XVII）、⑬アレグロ（XVIII）、⑭アレグロ（XIX）、⑮アレグローアダジオ

ここでは、III と IV をひとつの楽章とし、VIII、XIV、XV、XVI の四つの楽章が省略されて、全15楽章で演奏されている。

全曲の特徴としては、①のレント楽章にも見られる様に、大太鼓の静かなソロに始まり、弦、管が長く音を引きながら加わっていき、静的な空間の緊張をつくり上げるスタティックな空間と、②のレントで、管楽器群が低音から高音へ向かって和音を堆積するパターンに見られる様な動的なエネルギーとを強烈に対比させていることだろう。この特徴はひとつの楽章の中にも見られ、例えば、この動的な和音堆積のパターンは他の楽章でも現われるが、フォルティッシモで奏されると、その中からソロ楽器が残って静的な空間を生みだし、また動的空間に移ると言った様に、こうした動と静、強と弱の対比から、新しい音響空間のエネルギーを構成することを試みているのである。

③のアダジオの部分でソロのバス・クラリネットとファゴットの奏する南方的な郷愁をもった旋律や、⑦の細かく刻む近東的な匂いをもった躍動的なリズム、⑩のアフリカへの郷愁を感じさせる本能的なリズムには、この曲でエローラ石窟のプリミティブな魔力に惹かれた作曲者自身の祈りと、祭礼の響を感じる。

こうした要素で最も興味深いのは、⑭のアレグロだろう。ここでは各楽器のパートはそれぞれ異なる速さで奏され、それが重なり合って、混沌としたプリミティブな力をもつ詩的な複合イメージが見られる。最後の⑮はそれが次第に静かになっていって、アダジオのスタティックな空間に移り、やがて沈黙の無限の宇宙につながるように消えていく。

この交響曲の構成法と楽器法には、いろいろの試みが見られるが、西欧的な形式の世界が残っていないとも言えない。しかしマイナス空間と言う彼のユニークな方法が確立されるのも、そんなに遠くはないだろう。新しい楽器法と音響の表現によって、まったく西欧とは異質の音のエネルギーを強烈に爆発させる手掛かりを、彼はこの作品で摑んだ筈だからである。

（秋山邦晴・レコードジャケット解説より）

エローラ音楽試論　　芥川也寸志

デッカイナア！　とまずはじめに思いました。とにかく、とてつもなく大きくて、どれくらいといったらいいのか、全く見当がつきかねる。まるで、無限のひろがり。

得体の知れぬ巨大な怪物にでもめぐり会ったような不気味さと、その前に立った自分がどんどん小さくなってゆくような不思議な気持を味わいながら、これはいったいどうしたことだ？　と自問せずにはいられなくなりました。

インドのエローラ石窟院を訪れたときのことです。正確にいえば、エローラ石窟院の第16窟、シヴァ神に捧げられたカイラーサナータ寺院に足を踏み入れたときのことです。

このヒンドゥー教の寺院は、他の石窟と並んで巨大な岩山に彫られているものですが、その特徴の一つは、殆んど周囲が絶壁でかこまれていることです。つまり石窟という言葉はやや不適当なわけで、ヒンドゥー教徒たちは、恐らく大変な労力を費して、丁度、地下室を作るような格構に、岳陵を上の方から（建物の部分だけを残して）彫り下げていったわけです。そして更に、建物のために残された岩塊を彫り込み、その中の礼拝堂を作り、多くの僧房をくりぬき、壁面には数しれぬレリーフを彫って、地下の大寺院を刻み出したのです。（ですからこの場合、建物という言葉も不適当なのです。）

つまり、普通の建築物が土台から積み重ね、組み合せて作られるのに対して、これは全然アベコベの構成です。けずって作られた空間です。必要なものを加えてゆくことによって作られるのではなく、不必要なものをのぞいてゆくやり方です。建物の周囲の絶壁との間のひろがりは、莫大な労力によって彫りとられたものなのです。

このアベコベシステムが、まず私をびっくりさせたらしい。（もっとも、この寺院のうす暗い一番奥の室に入って、これが御神体です、とインド人に説明され、ふたかかえもあろうと思われる石の塊に、顔をくっつけるようにして眺めていたとき、また何やらいわれ、やがてその意味が男根であることがわかったときは、正に腰の抜ける寸前でありました。）

ピラミッドを見たときも、ヴァチカンやヴェルサイユを見たときも、やはりデッカイナアと思いましたが、エローラはまたこれとは違うデッカイナアでありました。ピラミッドの場合は、いわば積み重ねてある一塊の石と、自分の肉体との比較の上に立った大きさであり、たとえどんなに大きく感じたとしても、その極限までの大きさしか感じない。

ところがエローラは、一体相手がどこまで続いているのか見わけることも出来ない。そこに作られている空間は大地に続き、空にひろがり、宇宙につながっている、といった無限のひろがりを持っているように思えたのです。それは私にとって、正にショッキングな出来事でありました。

それ以来、これは一体どうしたわけだ？　という自問を今も尚繰返し続けているのですが、少くとも、今迄の積み重ねて作る空間、建築的な空間、音を横に加え、縦に加えて作る時間的空間の裏側に、けずりとって作る空間があるということ、それを音楽の上でも追求することが出来るということがわかってきました。

今迄の加算の概念の上に立つ音楽に対して、これは減算による音楽といえるかもしれませんし、プラス空間に対してマイナス空間という言葉も使えるかもしれません。今迄の西洋音楽史の裏側にある、全く異質な空間構成法です。

エローラで体験したもう一つの痛切なものは、表現の生々しさ、ということです。まるで本能的衝動が爆発して出来上っているような感じに打たれたのです。ここで筆さばきのうまい人ならば、例の御神体を引合いに出して、鮮かに展開を試みることも出来るのでしょうが、私にはとても出来そうにない。（その時聞いた説明によれば、この寺院における礼拝の儀式は、信者たちが牛の乳を御神体にそそぎかけることによって始まるということです。）

ここでも、一体どうして？　が始まるわけですが、これは極く簡単に現代の音楽が、抽象に抽象を重ねてきたことによると、いってしまってはいけないでしょうか。

ほぼ18世紀の終り頃から、純音楽にあっては、楽譜に忠実に再現して演奏されることが、全く当り前の要求になったときから、即興性は殆んど失われてしまったといっていい。すべて合理的に計算され、設計され、しかも周到な準備を経て鑑賞者に提供される。

作る方も“抽象”は金科玉条であり、生活における現実的な経験からはだんだん遠ざかってしまった。

エローラの壁に刻みこまれたレリーフから発散した圧倒的な迫力や逞しさは、私にとってはまったく新しい驚異だったのです。

この時から原始芸術が私をとらえてしまいました。自然民族の音楽における様々な形式の中に、実に多くの新しい音構成への可能性が暗示されているように思えたからです。

ことに、その即興的性格、終った瞬間に開始の状態に戻っているあの独特な構成、現実生活に直接結びついた生々しさ、男性と女性の差異が直接音楽に現われ、多くのものがこの二つの性格に分けられていること、その日常的性格、それとは全く対立するアニミズムやトーテミズムの中における非日常的性格、更にそれらが同時に重なり合っている同時性と対立性、などに強く興味をかきたてられたのです。

今日ではわずかに、アフリカを母胎とするジャズ音楽のインプロヴィゼイションが“本能への回帰”を叫んでいるようにしか見えませんが、現代の音楽にとっても、これは大きな課題であるといっていいでしょう。

現代の音楽は一つの危機にさらされている——と思います。それは、何世紀にもわたって音楽家の言葉として——というよりも文字として使われてきた、平均律音組織の崩壊です。現に、具体音楽や電子音楽の登場によって、それは現実的なものとなりました。

最も原始的な形式より、中世を経て今日に至る西洋音楽の歴史は、明らかに音組織によってはっきりと区切ることが出来ます。更にその組織の基礎となる音程の体系は、4度、3度、2度、という縮小する形となって現われます。

最も普遍的に、近代音楽の創造者と見られるドビッシィの書いた長2度体系の音楽は、第2次大戦後、全く普遍化した12音音楽によって、更に短2度に縮小されました。今迄使われてきた演奏形態では、これ以上縮小された体系の音楽は演奏不可能です。短2度、即ち半音は、12平均律での最も小さな音程単位だからです。

これ以上進むためには、どうしても今迄の音組織や、大部分の演奏家や楽器を捨てざるを得ません。先駆者ハバが試みたように、半音よりも小さな音程の書ける特種な記譜法による、特種な訓練を経た、特種な演奏家による微分音音楽に行くか、具体音楽や電子音楽を始めた勇敢な作曲家達がやったように、今迄の楽器や、五線紙や、演奏家を全部捨ててしまうしかありません。つまり、壁に行きあたっている——危機といってもいいでしょう。

この危機から——敢てそういわせて頂けば——脱却するためには……というよりも、たとえそれを危機と感じようが感じまいが、重要なことは縮小型の考え方をやめてしまうということです。私が勝手ないい方をした縮小型——これは丁度、ヨーロッパの画家たちが、ガクブチを作ることによってタブローの中に構図を設定してゆく、あの求心的な構成法にあてはまります。また建築家たちが、壁を作ることによって、空間を構成してゆく方法にもあてはまります。画家の使う構図という言葉を、作曲家が使う音楽形式という意味におきかえてもいいのなら、まず楽章の数をきめ、各楽章の形式をきめ、ソナタ形式ならば2ツの主題をきめ、更にモティーフをきめてゆく方法、その考え方に他なりません。

まず、一番大きなワクを設定し、だんだんとその中に小さなワクを作ってゆくような、合理主義的な思考を超えることです。

ここに新しい音構成への足がかりがあります。東洋の空間、原始芸術の形式は、この意味でいろいろな暗示を私に投げかけてくれるのです。

しかし、これは勿論生やさしい仕事ではありません。何年手さぐりしてみても、私には到底無駄なことかもしれません。いわばこの交響曲は、その手さぐりのはじまりです。外見的には、殆ど今迄の形式を破ることが出来なかったようです。ただ、エローラで受けたあの感銘は、もう忘れられそうにありません。それが私にとって、怪物に似た恐ろしい未知の世界へ挑戦する意欲をかきたててくれるのです。

（ここで、音楽にあってはバルトークをはじめとして、メシアン、ジョリヴェ、ケージなどの仕事、最近の建築に現われている新しい様式、アンフォルメル一派の絵画などについてふれたいのですが、長くなる上にいずれ機会があったら、

まとめた文章にしてみたいと思っていますのではぶきます。）

この交響曲は、忘れ難い想い出を私自身記念するために、エローラ（ELLORA）と名づけました。

楽器編成はスタンダードな３管。８名の打楽器が加わり、絃楽器群は12のパートに別れます。

全20楽章。これらは２ツの性格に分けられています。レント、アダジォの楽章と、アレグロの楽章です。

各楽章の演奏順位は指揮者に一任され、ある楽章を割愛することも、重複することも、全く自由です。（ただし、第17楽章から第18楽章へ、第19楽章から第20楽章へは常に続けて演奏される。）

今仮に、レント楽章をｆ○　アレグロ楽章をM●　とすると、初演は次の配列で行われます。

f f f f M f f f MM f f MMM f MMM f
○○○○●○○○●●○○●●●○●●●○

（初演時プログラムより抜粋）

アレグロ・オスティナート

作曲年代　1986年　　楽器編成　２管
初　　演　1986年４月17日　　2 Fl.(2 Picc.), 2 Ob., Cor Ing., 2 Cl., Bass Cl., 2 Fag., Contra Fg., 4 Hr., 3 Tp., 3 Tb., Tuba, Timp., 小太鼓
　　作曲者指揮
　　東京都交響楽団
　　簡易保険ホール
演奏時間　４分

私は1925年７月に、東京に生まれました。今の北区ですが、戦前は滝野川区と呼ばれておりました。私の生まれた家は、山の手線の田端駅から山手に登った所にあって、左右のお隣が日本画家と鋳金家という、芸術家の多い閑静な住宅地でした。

私はその家でずっと育ち、終戦の２年前に、今の芸大、当時の東京音楽学校に入りました。終戦時は陸軍軍楽隊におりましたが、私が生まれ育った家は、空襲で焼けてしまいました。それからも、私はずっと東京に住んでおります。

また、芥川家の先祖は徳川に仕えておりましたので、多分、私は生粋の江戸っ子といえると思います。その上、東京から離れて住んだことがありませんので、私の心や身体には都会というものが染みついてしまっていると思います。

この曲は、とくに東京の何かを描写しようとしたものではありません。私のふるさとであり、これからも離れることはないであろう、わが愛する東京、そして私の心に染みついている都会というもののイメージをごく自然に画きながら、いわば“讃歌”として、また組曲の最終曲として作られたものです。

（芥川也寸志・初演時のプログラムより）

絃楽のための三楽章 ── トリプティーク

作曲年代　1953年　　楽器編成　弦楽合奏（弦５部）
初　　演　1953年12月
　　クルト・ヴェス指揮
　　ニューヨーク・フィル
　　カーネギー・ホール
演奏時間　14分

≪絃楽のための三楽章≫（トリプティーク）は、1953年にオーストリーの指揮者クルト・ヴェスの依頼により書かれたもので、≪トリプティーク≫とは三連画の意味である。初演は同年12月カーネギー・リサイタル・ホールでヴェス指揮ニューヨーク・フィルハーモニーの演奏により行われた。その２年後にはモスクワ労働組合会館で、ニコライ・アノーソフ指揮、全ソ放送交響楽団により演奏され、楽譜は1956年State Music Publishers : Moscow から出版された。

その後ヨーロッパではベルリン、ウィーンその他の主要都市で数多く演奏されている。

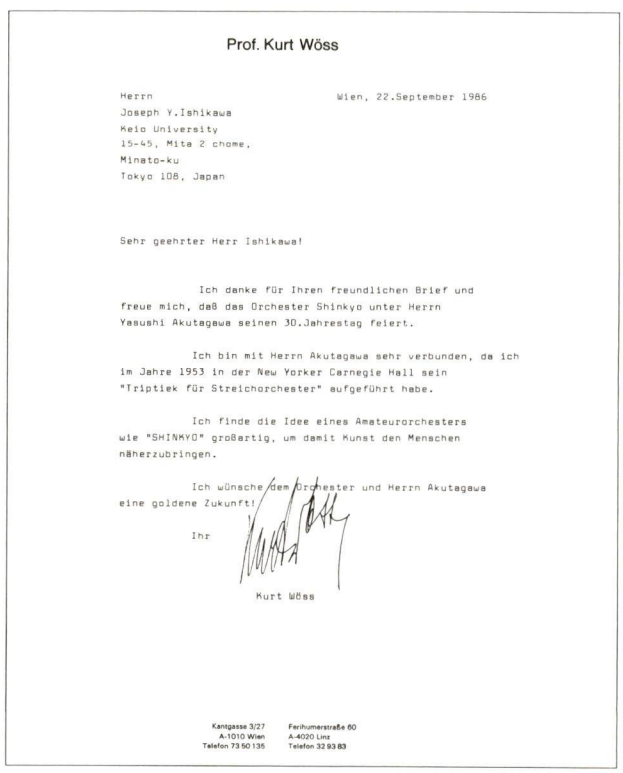
この作品は彼が弦楽オーケストラ曲に対してもなみなみならぬ力量の持ち主であることを示している。元来ヴァイオリン属は旋律楽器である為に、管楽器や打楽器を交えないで近代性を打ち出すことは困難とされていたが、作曲者は≪絃楽のための三楽章≫の中で、彼独自の語法を使いながらも、その難業を見事に克服している。どの楽章においても対位法の巧妙さは特筆に値するものである。

旋律が最も美しく歌われる第２楽章「子守歌」の中にはノック・ザ・ボディの日本的なリズムが心憎いばかりの効果をあげている。

第３楽章のモティーフには、日本の祭り太鼓のリズムが使われている。第１楽章の歯切れのよい小刻みのリズムも甚だ爽快な気分をもたらす。

芥川の音楽には滓が残らない。その小ざっぱりした味わいは、江戸時代から東京人に伝えられた芸術的気質なのである。

（富樫　康）



Prof. Kurt Wöss

Herrn　　Wien, 22.September 1986
Joseph Y.Ishikawa
Keio University
15-45, Mita 2 chome,
Minato-ku
Tokyo 108, Japan

Sehr geehrter Herr Ishikawa!

Ich danke für Ihren freundlichen Brief und freue mich, daß das Orchester Shinkyo unter Herrn Yasushi Akutagawa seinen 30.Jahrestag feiert.

Ich bin mit Herrn Akutagawa sehr verbunden, da ich im Jahre 1953 in der New Yorker Carnegie Hall sein "Triptiek für Streichorchester" aufgeführt habe.

Ich finde die Idee eines Amateurorchesters wie "SHINKYO" großartig, um damit Kunst den Menschen näherzubringen.

Ich wünsche dem Orchester und Herrn Akutagawa eine goldene Zukunft!

Ihr

Kurt Wöss

Kantgasse 3/27　Ferihumerstraße 60
A-1010 Wien　A-4020 Linz
Telefon 73 50 135　Telefon 32 93 83

ご親切なお手紙どうも有難うございました。そして芥川也寸志さんと新響が30周年を迎えられたことをとても嬉しく思います。

私と芥川さんとは、1953年にニューヨークのカーネギーホールで彼の「絃楽の為のトリプティーク」を演奏して以来、たいへん親しくしております。

私は「新響」のようなアマチュアオーケストラの精神はとてもすばらしいと思っております。それによって芸術というものは人間どうしを親しく結びつけることができるのです。

オーケストラと芥川さんの輝かしい将来をお祈りいたします。

クルト・ヴェス

交響管絃楽のための音楽

作曲年代　1950年
初　演　1950年3月21日
近衛秀麿指揮
日本交響楽団
日比谷公会堂
演奏時間　12分

楽器編成　3管
Picc., 2 Fl., 2 Ob., Cor Ing., 2 Cl., Bass Cl., 2 Fag., Contra Fg., 4 Hr., 3 Tp., 3 Tb., Tuba, Timp., 大太鼓, 小太鼓, シンバル, グロッケンシュピール, 木魚, ギロ, マラカス

芥川也寸志が幼時から、レコードを通じてストラヴィンスキーの≪ペトルーシュカ≫や≪火の鳥≫に親しんでいたということは、彼の芸術を語る上に、有力な糸口となる。

いったい日本の作曲家には、作風が目まぐるしく変わる人が多いが、芥川の作風は多少の変化はあっても、初めから一貫したものがあり、それが彼の大きな特色となっている。

それはどういうものかというと、音楽を作るにあたって、あいまいな感じのものをいっさい拒否するという態度である。このことは必然的に、ロマン的な、夢幻性、耽美性をさけることとなる。つまり、彼にとっては、複雑な対位法の網目によって生れる幽玄な趣きや、印象主義的な色彩の混合によってかもし出される、そこはかとない微妙な響きは異質なものなのである。したがって、現代音楽の一方を代表する12音の技法も、たとえそれが非情の色を帯びていようとも、それが持つ宿命的な、一種のロマン性のゆえに拒否している。

彼の作品の底に流れるものは、微細な塵の混入すら許さぬ精密機械の冷たさと、直截な原始性のもつ非情さであり、また、時として、原始の肉感にあこがれる都会人の透明な感傷である。

こういった彼の作風の形成にとって先にのべたストラヴィンスキーの影響から始まって、プロコフィエフの影響は大きかった。しかし、何よりも彼に大きな影響をおよぼしたのは、彼が傾倒してやまなかった恩師伊福部昭の影響である。この、土俗ふうと、モダニズムとの合体の上に独自な音楽を作り上げた北海道出身の作曲家に、芥川は、自分の血の中に流れているリズムと同じ脈動のうっているのを発見したからにちがいない。

芥川は、伊福部昭の影響から離れて、その後新たな作風をしだいに形成してゆくのであるが、この≪交響管絃楽のための音楽≫は、芥川の出世作であると同時に、伊福部昭から得たものがどれほど芥川自身の血肉となっているかをもっともきたんなく示した作品ということができるであろう。

この作品は、1950年、ＮＨＫ放送25周年記念管弦楽懸賞に、団伊玖磨の≪イ調の交響曲≫とともに特賞入選したもので、その後、近衛秀麿、尾高尚忠、クルト・ウェスらの指揮者、ならびに作曲者自身の手によってしばしば演奏され、おそらく、日本人の作った管弦楽曲の中では最も演奏回数の多いもののひとつではなかろうか。海外でも、ハンブルク、パリ等でも演奏された。完成の日付は、自筆スコアによると1950年2月20日となっている。

この曲は2つの楽章よりなっている。

第1楽章　アンダンティーノ　4分の4拍子。

まず、チェロと、ファゴット、および、小太鼓が、単調なリズムを刻みはじめる。調性はホ短調。そして、オーボエとクラリネットが次の主題を吹く。



それに答えて、トランペットのシンコペーションのリズムを持った副主題が出る。



ホルンと弦による第3の主題もあらわれる。



ふたたび、第1主題が今度は、フルートとピッコロにあらわれるが、次には、ホルンの3度の音にのって、弦の次の新しい主題が出る。



これらがくりかえされるが、やがてテンポが落ちて中間部に入る。

中間部は、次の土俗的な味をもつ主題によっている。楽器はイングリッシュ・ホルンで表情豊かに奏される。



この主題の背景をなすものは、ホ音のオルゲル・プンクトを奏するコントラ・バスと、チューバ、および、弱音器をつけたヴィオラだけで、簡素な中に、日本的な哀愁を出している。

この主題は、しだいにリズムの細かい対主題によって装飾される。

再現部は、ほぼ形どうりだが、少し短くなっている。

第2楽章　アレグロ。

前の楽章から切れ目なしに入る。全体に強烈なリズムで貫かれている。

まず、シンバルの強打の一撃をうけて、主要主題が、トランペットとトロンボーンで精力的に奏される。



主題提示が終ると、ティンパニが強烈なリズムを刻みだす。これに乗って、全管弦楽が、きわめて精力的に主題を奏する。

調は、ト長調から半音ずれて変ト長調となり、木管が次のおどけた主題を奏する。



調はイ長調になり、この主題が今度は弦で示される。これがくりかえされ、次に最初の主題が、今度は弦で示される。ティンパニは終始、ト音とニ音を打ちつづける。

ふたたび、全管弦楽で主題がくりかえされるが、次に変ニ長調に転じて、次の表情的な主題が弦で示される。



この展開が少しあって、おどけた第2主題が帰ってくる。次に第1主題がトロンボーンのソロで奏され、つづいて、第2ヴァイオリンとヴィオラというふうに、つぎつぎと受けわたされ、最後に、全管弦楽でクライマックスを作る。ここで注目すべきことは、4分の2拍子の主題に対し、打楽器その他が、8分の3拍子のアクセントを刻んで、ポリリズムの効果を出していることである。この部分の効果は、全曲中の圧巻である。

コーダは、第2、第3主題によって作られ、ホ長調のトニカの強烈な一撃で曲を結ぶ。

（井上太郎・最新名曲解説全集・音楽之友社より）

芥川也寸志・作品表

●主要作品年譜

曲名（テクスト作者、出典）	作曲年	ジャンル、編成	（演奏時間）	初演年・月・日（演奏者）その他	出版・レコード
交響絃楽のための前奏曲	1947	3管orch	(ca20′)	未演奏	
絃楽四重奏曲	1948	stq		放送2・5＝NHK（ラモー室内楽団）	破棄
ラ・ダンス　ピアノのための組曲	〃	Pf	(ca10′)	放送2・5＝NHK（田村宏）	音楽之友社
				ステージ1951・2・13（園田高宏）	
交響三章――トリニタ・シンフォニカ	〃	2管orch	(ca25′)	放送1949・9・16＝NHK（芥川也寸志＝東フィル）	東芝-TA7007
				ステージ1950・10・26（尾高尚忠＝日響）	JSC1016
歌曲「車塵集より」 （中国歴朝名媛詩鈔より、佐藤春夫訳）	1949	Sop.pf	(ca15′)	10・29（古谷駒子、長谷葉子）古谷独唱会	春秋社（「日本独唱曲集」） ビクター-SJX1049
交響管絃楽のための音楽	1950	3管orch	(ca12′)	3・21（近衛秀麿＝N響）NHK創立25周年記念コンサート	フィーマ音楽出版
				NHK創立25周年記念管弦楽曲懸賞特賞	東芝-TA7010, TA8029
パプア島土蛮の歌	〃	Sop.pf	(ca5′)	4（ベルトラメリ能子、宅孝二）ベルトラメリ独唱会	音楽之友社　全音楽譜出版社（「日本独唱名曲集」Ⅰ） ビクター・SJX1049
失楽園	〃	バレエ音楽 1管又は2管orch	(ca18′)	同年（芥川也寸志指揮、横山はるひ振付） 横山はるひバレエ団	
湖底の夢（富井照三作）	〃	バレエ音楽 2管orch	(ca45′)	11・6～9（山田一雄＝東フィル、高田せい子、山田五郎振付）高田せい子バレエ団 芸術祭主催創作バレエ合同公演	
ヴァイオリンとピアノのためのバラード	1951	vn.pf	(ca3′)	（大村多喜子他）	
河童	〃	バレエ音楽 2管orch	(ca25′)	同年（遠山信二＝東フィル、横山はるひ振付） 横山はるひバレエ団	
マイクロフォンのための音楽	1952	1管orch perc, hammondorg, 発振音	(ca8′)	NHK委嘱	
炎も星も（富井照三作）	1953	バレエ音楽 2管orch	(ca35′)	11・4（上田仁＝東響、高田せい子、山田五郎振付） 高田せい子バレエ団　芸術祭主催公演	
絃楽のための三楽章――トリプティーク	〃	弦楽orch	(ca14′)	12・4ニューヨーク（クルト・ウェス＝ニューヨーク・フィル） クルト・ウェス委嘱	ソヴィエト国立出版所 音楽之友社
				世界青年学生平和友好祭（ワルシャワ）3等賞	東芝-TA7010、TA8029 コロンビア-NCC8508
交響曲第１番	1954	3管orch	(ca28′)	1・26（芥川也寸志＝東響）３人の会等１回 1955改作・初演1955・12・8（上田仁＝東響）東響定期	東芝-TA7007 JSC1016 コロンビア-NCC8508
嬉遊曲	1955	2管orch	(ca20′)	6・23（芥川也寸志＝東響）３人の会第２回	破棄
子供のための交響曲「双子の星」（宮沢賢治作）	1957	orch、児童合唱、語り	(ca36′)	放送11＝文化放送（渡辺暁雄＝日本フィル、中村メイ子）	
エローラ交響曲	1958	3管orch	(ca17′)	放送3・30＝NHK（芥川也寸志＝N響）	東芝-TA7004
				ステージ4・2（芥川也寸志＝N響）３人の会第３回	JSC1004
お天道様、ねこ、プラタナス、ぼく （ナジウム・ヒクメット・「おとぎばなしのおとぎばなし」より、中本信幸・服部伸六訳）	〃	混声合唱	(ca8′)	1964・3・31（岩城宏之＝東混）東混第36回定期	ビクター-STX1067
nyambe	1959	hp・cel・Basscl・4vn 2 vn・1 cb	(ca13′)	放送・同年＝NHK国際放送（山本直純＝ラモー室内楽団）破棄	
暗い鏡（大江健三郎作）	1960	オペラ 4独唱、合唱、3管orch	(ca50′)	放送・同年＝NHK（友竹正則、奥村淑子、宮原徳子、島田恒輔、二期会合唱団、岩城宏之＝N響）NHK委嘱 ステージ3・27（中村義春、奥村淑子、宮原徳子、島田恒輔、二期会合唱団、岩城宏之＝N響）３人の会第４回	
絃のための音楽　第１番	1962	4vn, 2vn, 2vn, cb		12・18（若杉弘＝東京現代音楽祭弦楽団）	音楽之友社
絃楽オーケストラのための陰画	1966	弦楽orch	(ca10′)	放送11・3＝NHK（岩城宏之＝日本フィル＋N響）	
ヒロシマのオルフェ（「暗い鏡」の改作）	1967	テレビ・オペラ	(ca50′)	放送8・27＝NHK・TV（常森寿子、成田絵智子、平野忠彦、島田恒輔、森正＝日フィル） 1968年ザルツブルク・オペラ・コンクール第１位	
オスティナータ・シンフォニカ	〃	3管orch	(ca16′)	5・25（渡辺暁雄＝日本フィル）日本フィル委嘱シリーズ第18作	
蜘蛛の糸（芥川龍之介作）	1968	バレエ音楽 3管orch	(ca26′)	放送11・8＝NHK・TV（若杉弘＝日本フィル、振付＝庄司裕）NHK委嘱 ステージ1969・3・17（芥川也寸志＝東フィル）	

●映画音楽作品一覧

1951
- えり子とともに／豊田四郎監督

1952
- 青春会議／杉江敏男監督
- 南国の肌／本多猪四郎監督
- 若い人／市川崑監督
- 春の囁き／豊田四郎監督
- いとし子と耐えてゆかん／中川信夫監督
- いついつまでも／ポール・H・スローン監督

1953
- 吹けよ春風／谷口千吉監督
- 煙突の見える場所／五所平之助監督／第８回毎日映画音楽賞／ブルー・リボン賞
- 抱擁／マキノ雅弘監督
- 飛び出した日曜日／村田武雄監督
- 夜の終り／谷口千吉監督／ブルー・リボン賞
- 銀二郎の片腕／青柳信雄監督
- 雲流るる果てに／家城巳代治監督／ブルー・リボン賞
- 戦艦大和／阿部豊監督
- 続・思春期／本多猪四郎監督
- 広場の孤独／佐分利信監督
- 地獄門／衣笠貞之助監督

1954
- 大阪の宿／五所平之助監督
- ともしび／家城巳代治監督
- 最後の女たち／楠田清監督
- 風立ちぬ／島耕二監督

1955
- 目白三平／千葉春樹監督
- 33号車応答なし／谷口千吉監督
- たそがれ酒場／内田吐夢監督
- たけくらべ／五所平之助監督
- 自分の穴の中で／内田吐夢監督
- こころ／市川崑監督

1956
- 或る夜ふたたび／五所平之助監督
- 台風騒動記／山本薩夫監督
- 彼奴を逃すな／鈴木英夫監督
- 猫と庄造と二人のをんな／豊田四郎監督
- 雪崩／山本薩夫監督

1957
- 黄色いからす／五所平之助監督
- 糞尿譚／野村芳太郎監督
- 挽歌／五所平之助監督
- 危険な英雄／鈴木英夫監督
- 夕凪／豊田四郎監督
- 脱獄囚／鈴木英夫監督
- 穴／市川崑監督
- 米／今村正監督
- 異母兄弟／家城巳代治監督／チェコ国際映画音楽賞

1958
- 螢火／五所平之助監督
- 怒りの孤島／久松静児監督
- 欲／五所平之助監督
- 蟻の街のマリア／五所平之助監督
- 負ケラレマセン勝ツマデハ／豊田四郎監督
- 花の慕情／鈴木英夫監督
- 裸の太陽／家城巳代治監督／ブルー・リボン賞
- 新しき大地／八木保太郎監督
- 鍵／市川崑監督
- 道産子／家城巳代治監督

1959
- からたち日記／五所平之助監督
- どんと行こうぜ／野村芳太郎監督
- 男性飼育法／豊田四郎監督
- 花のれん／豊田四郎監督
- チョゴリザ／伊勢長之助監督
- 暗夜行路／豊田四郎監督
- 野火／市川崑監督

1960
- わが愛／五所平之助監督
- 白い牙／五所平之助監督
- 最後の切札／野村芳太郎監督
- 女経／吉村公三郎、市川崑、増村保造監督（オムニバス作品）
- ぼんち／市川崑監督
- 偽大学生／増村保造監督
- おとうと／市川崑監督
- 白い崖／今井正監督

曲名（テクスト作者、出典）	作曲年	ジャンル、編成	（演奏時間）	初演年・月・日（演奏者）その他	出版・レコード
チェロトオーケストラのための コンチェルト・オスティナート ……	1969	……vc. 2 管orch	(ca17′)	……12・16（岩崎洸、秋山和慶＝東響）東響定期	…… ソヴィエト国立出版所 日本作曲家協議会 モスクワ・作曲家同盟（ピアノ・スコア） 東芝-TA9670～74 CBSソニー-OOAC1432～5
オケラのうた（作詞：宮沢章二）……	1969	……無伴奏混声合唱	(ca5′)	……11・27日本合唱協会（詩と音楽の会）	
オスティナータ・シンフォニカ'70 …… （「オスティナータ・シンフォニカ」（1967）の改作）	1970	…… 3 管orch	(ca16′)	……11・25（芥川也寸志＝東響）東響定期	
オーケストラのためのラプソディ ……	1971	…… 3 管orch	(ca17′)	……10・4（森正＝N響）芸術祭主催・管弦楽の夕べ	
GXコンチェルト …… ——GXIとオーケストラのためのコンチェルト	1974	…… et. 3 管orch	(ca20′)	……6・8（沖浩一、芥川也寸志＝東響）……	ヤマハ音楽振興会
秋田地方の子守歌 ……	1977	…… vn.orch	(ca4′)	……放送・同年＝NHK（徳永二男、尾高忠明＝東フィル）NHK委嘱	
Do Re Mi Fa Sol La Si Do ！ ……	〃	…… 2 管orch	(ca4′)	……同年（尾高忠明＝東フィル）	
うたの旅Ⅰ ……	1978	……合唱,orch		……	日本放送出版協会
ここは瀬戸内（中村千栄子詩）				同年（尾高忠明＝広島響、広島女声合唱団）	
太陽の街（増永道子詩）				同年（芥川也寸志＝九州響、児童合唱団）	
Clapping Orchestra ……	〃	…… 2 管orch	(ca5′)	……同年（芥川也寸志＝東京シティ・フィル）	
ヴァイオリンとピアノのためのSASARA ……	〃	…… vn.pf	(ca4′)	……放送・同年＝NHK・TV（前橋汀子、前橋由子）	
March 1979——栄光をめざして ……	1979	…… Brass又は 2 管orch		……7・8（芥川也寸志＝コンセール・ボウ・アンサンブル……	CBSソニー-YDB10 朝日新聞創刊100年記念委嘱
うたの旅Ⅱ ……	〃	……合唱,orch		……	日本放送出版協会
雛の春（高田敏子詩）				同年（芥川也寸志＝京都市響、女声合唱団）	
大地はともだち（山川啓介詩）				同年（芥川也寸志＝札幌響、児童合唱団）	
うたいましょう　うたいましょう（江間章子詩）				同年（芥川也寸志＝大阪フィル、女声合唱団）	
南の旅へ（岩谷時子詩）				同年（芥川也寸志＝九州響、女声合唱団）	
春の気配（山上路夫詩）				同年（芥川也寸志＝宮城フィル、女声合唱団）	
24の前奏曲子供のためのピアノ曲集 ……	1980	…… pf		……	カワイ楽譜
うたの旅Ⅲ ……	〃	……合唱,orch		……	日本放送出版協会
海濱獨唱（室生犀生詩）				同年（芥川也寸志＝金沢大学管弦楽団、男声合唱団）	
音楽の好きな街（岩谷時子詩）				同年（芥川也寸志＝群馬響、児童合唱団）	
母のアルバム30年（鈴木悦夫詩）				同年（芥川也寸志＝大阪フィル、女声合唱団）	
生きている国（山川啓介詩）				同年（芥川也寸志＝熊本ユース・オーケストラ、児童合唱団）	
森の街（岩谷時子詩）				同年（芥川也寸志＝宮城フィル、児童合唱団）	
森のすきなおとなとこどもの音楽童話 …… **ポイパの川とポイパの木**（台本・岸田衿子）	〃	……語り, 3 管orch	(ca35′)	……放送5・5＝NHK・TV（黒柳徹子、芥川也寸志＝東フィル） NHK委嘱	
音楽と舞踊による映像絵巻「月」 ……	1981	…… 3 管orch	(ca40′)	……放送7・18＝NHK・TV（手塚幸紀＝東フィル）NHK委嘱、イタリア賞、エミー賞	
不動明王（作詞：藤本浩一）……	1982	……混声合唱団	(ca5′)	……8・9（詩と音楽の会）松原混声合唱団、ピアノ紅林こずえ	
雪（作詞：高田敏子）……	1983	…… メゾソプラノ独唱	(ca4′)	……7・26青山恵子、ピアノ塚田佳男（詩と音楽の会）	
あやめ（作詞：高田敏子）……	1984	…… アルト独唱	(ca4′)	……8・29内田裕子、ピアノ八十嶋洋子（詩と音楽の会）	
若木の枝のねむの花（作詞：高田敏子）……	1985	…… アルト独唱	(ca4′)	……9・25内田裕子、ピアノ八十嶋洋子（詩と音楽の会）	
コスモスの花（作詞：高田敏子）……	1986	…… アルト独唱	(ca4′)	……9・2内田裕子、ピアノ宮本あんり（詩と音楽の会）	
アレグロオスティナート ……	1986	…… 2 管orch	(ca4′)	……同年（芥川也寸志＝都響）FM東京開局15周年記念……	CBSソニー-2AC2151 委嘱作品。外山雄三、三枝成章、石井真木、芥川也寸志の四人の 共作による交響組曲「東京」の第四曲
オルガントオーケストラのための「響」 ……	〃	…… org, 2 管orch	(ca15′)	……同年（ウォルフガング・サヴァリッシュ＝N響）サントリー委嘱	

マッキンレー征服／伊勢長之助監督
1961 ゼロの焦点／野村芳太郎監督
猟銃／五所平之助監督
雲がちぎれる時／五所平之助監督
背徳のメス／野村芳太郎監督
愛情の系譜／五所平之助監督
別れて生きる時も／堀川弘通監督
東京夜話／豊田四郎監督
黒い十人の女／市川崑監督
1962 東京湾／野村芳太郎監督
かあちゃん結婚しろよ／五所平之助監督
破戒／市川崑監督
私は二歳／市川崑監督
1963 雪之丞変化／市川崑監督／八木正生との共作
拝啓天皇陛下様／野村芳太郎監督
太平洋ひとりぼっち／市川崑監督／武満徹との共作
1964 続・拝啓天皇陛下様／野村芳太郎監督
五辨の椿／野村芳太郎監督
1965 波影／豊田四郎監督
1969 地獄変／豊田四郎監督
1970 影の車／野村芳太郎監督
1974 砂の器／野村芳太郎監督／第29回毎日映画音楽賞／菅野光亮との共作
1977 八つ墓村／野村芳太郎監督／日本アカデミー賞音楽賞
八甲田山／森谷司郎監督／日本アカデミー賞音楽賞
1978 事件／野村芳太郎監督／松田昌との共作
鬼畜／野村芳太郎監督
1979 配達されない三通の手紙／野村芳太郎監督
日蓮／中村登監督
1980 わるいやつら／野村芳太郎監督／山室紘一との共作
震える舌／野村芳太郎監督／小熊達弥との共作／日本アカデミー賞音楽賞
疑惑／野村芳太郎監督／毛利蔵人との共作

「ハミング」（全音楽譜出版）掲載分に加筆、1986年11月現在

新交響楽団創立30周年、それから日本の交響作品展10周年おめでとうございます。

別宮　貞雄

オーケストラ音楽というものは、人間の発明した楽しみの中で、最も素晴らしいことのひとつだと思いますが、人間の労働価値が高く評価されるようになった近頃、つまり人間にとって幸福な時代になって、皮肉なことに、ひとの手をわづらはせて楽しむには、恐しく贅沢なものになりつつあります。プロのオーケストラの将来は、どう考えてもきびしいように私には思えます。

しかし発想を大きく変えれば、人件費が高くなることは、人々に余暇がふえることであり、その使いみちとして、自分ですることとしてオーケストラを考えると、アマのオーケストラの将来は前途洋々ということになるでしょう。

これはもう大筋としてゆるぎない真実だと思われます。芥川さんが、新響の仕事にはじめからうちこまれたのは、この大筋をはやくから認識された上のことであろうと、私は氏の先見の明に敬服致します。

大筋からみて、公理のように真実なことは、日本でオーケストラ音楽をする以上、日本人の作品を大切にすべきであること、その上にたってこそ、日本のオーケストラに将来があること、それを明確に認識して、実行にうつしたのが、「日本の交響作品展」でありましょう。

都合のゆるす限り、私はきかせていただきましたし、私の作品を演奏していただける光栄もえました。

今後ともますます、芥川さんを中心にして新響がこの方向に発展されんことを祈ってやみません。　（作曲家）

「日本の交響作品展」第10回を祝して

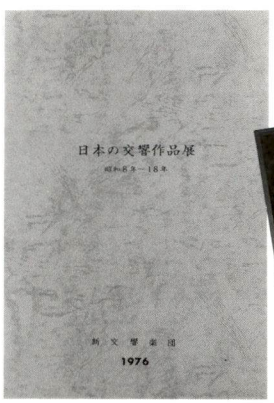
戸田　邦雄

3年余り前、「青春の作曲家たち」という面映ゆいような副題をもった「日本の交響作品展―第7回」で20歳台半ばの≪交響幻想曲「伝説」≫という旧作を熱のこもった素晴らしい演奏で上演して頂いた感激は今も忘れられません。それ以前、非職業事的音楽家たちの集団が日本の交響作品だけでプログラムを組むという破天荒の企画で新交響楽団はすでに“サントリー音楽賞”を受賞していますが、さらに小倉朗氏の作品だけの会や菅原明朗氏だけのプログラムといった企画も本当に目を見はらせるものでした。

今の日本では、プロとアマとの相違は演奏の質の上下ではなく、むしろ2～3回の練習でソツなくまとめることが出来るか、数多くの練習で入念に仕上げるかの違いだと言ったほうがよい場合がしばしばあり、アマの磨かれ・熱のこもった演奏のほうが音楽的感銘を与えることも多いということは周知の事実です。それにしてもプログラムの全部を日本の作品だけのシリーズといった企ては、職業管弦楽団のように財政運営を余り考えなくてよいアマの強みというだけでなく、芥川也寸志さんの建設的な文化政策的明察と団員の皆様の理解と熱意によってはじめて継続できたことだと思います。

全国のアマチュア演奏団体は今や非常な数に上っており、それらが新交響楽団の模範にならうことは、ひいては作曲家たちの作風にも影響を与え、また現在甚だ不充分な日本の作品の楽譜や録音の流通組織の発達をも促し、とかく一部の閉鎖系の中だけで回転しがちな現代音楽を本当に国民全部の共有財産にしてゆくのに役立つことでしょう。

今回は芥川さんの作品をまとめて一望できるのも楽しみです。そして第10回を迎えたこのシリーズの継続・発展を願うとともに、芥川也寸志氏と新交響楽団の皆様に心からの感謝と激励の拍手を贈りたいと思います。　（作曲家・1986－Ⅸ）

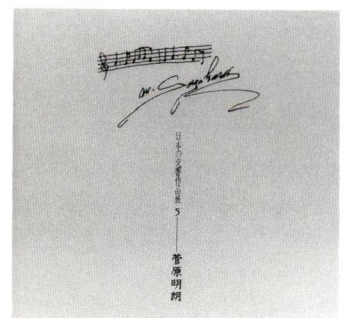












本番を待ちわびて

小山　清茂

芥川也寸志と新響といえば、先ず、邦人作品の個展を想い出す。かく云う私も其の恩恵に浴した一人だが、芥川さんご自身の個展が無かったとは不思議な気がしないでも無い。

しかし、いろいろと受賞も有ったことでは有り、それに何よりも立派な作品が相当以上にたまって居るのだから、この辺でご本人の個展をされることは当然すぎるほど当然。むしろ遅きに失した感あり、と感ずるのは百人中百人である筈。

秋晴れの様に爽やかな「芥川のオスティナート」を聴けば、食欲増進まちがい無し。本番を待ちわびて居る一人です。

（作曲家）

新交響楽団と日本の作品

富樫　康

日本の管弦楽作品は、それが初演された場合、再演或いは再々演される機会はきわめて少ない。ブルックナーやマーラーがこれほど頻繁に演奏されているのに、日本の作品がオーケストラ演奏会の曲目に登場する率は微々たる状態なのは何故なのだろうか。それは決して日本にはブルックナーやマーラに匹敵する作品がないからではなく、日本人の西洋崇拝熱によるためにほかならないのだ。音楽外でいえば西洋一流名柄の品物ならば、日本品の五六倍及至は十倍以上の出費を惜しまずに支払う。音楽においても同じで、日本人のステイタス熱は異常である。

日本の工業技術は進歩し、経済力も強くなった。そして日本の洋楽指向熱も増々高まり、その技術と供給量も高く、多くなった。それと平行して、日本の作曲家の技術も非常に向上したのである。しかし肝腎の一般音楽愛好家の、日本の作曲に対する関心度はまだまだ薄いのである。日本の音楽界が、いかに興隆したといっても、泰西名曲だけに依存して満足し、日本の作曲は不要といつたフィーバーぶりは病的であり、アンバランスで、このような状態が続く限り、日本の音楽界に、輝かしい栄光はやってこないのである。日本の演奏家が、海外で日本の作品を要求されたとき、自分の非常識、不勉強さを知って恥ずかしい思いをした例をしばしば耳にする。こうした現象は日本の音楽人の知識や意識のアンバランスを意味することにほかならないのである。

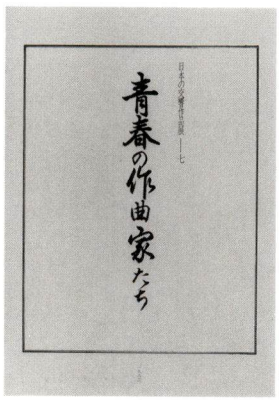
新交響楽団を統括する指揮者、芥川也寸志氏は言うまでもなく、日本の代表的な作曲家である。作曲家であることが、幸いにもこうしたアンバランス現象を、少しでも解決の道に向わせようとする気持にならせたことは確かであろう。プロフェッショナルの日本のオーケストラが、聴衆動員力の減少を懸念して、容易になしえないでいる、日本の管弦楽作品による演奏会の遂行を、アマチュアのオーケストラ（といってもストラヴィンスキーのバレー三部作を一夜に上演するまでに漕ぎつけた、高水準のアマチュアたち）の手によって実現したのは快挙であった。

その第１回目が10年前の1976年（昭和51年）の９月で、このときは戦前の代表的作曲家10人の作品を二晩に分けて上演した。このような企画は、東京に九つあるプロのオーケストラでさえ考えたことはなかった。（もちろんＮ響が日本の作品に本腰を入れた調査と演奏会を挙行し、他のオーケストラもそれぞれ独自の企画でプロを組んだ例を知っている。しかし新響の企画は、新響の独自性を打ち出していたことを言っているのである。）戦前の名作の殆どは、そのとき限りで葬り去られていたのである。現在の作曲界の発展も、こうした先人達の努力があってこそ、育ってきたのにである。幸いにしてその努力と、社会的意義は認められて、サントリー音楽賞を受賞し、翌年その中の５作品がとりあげられて、東京と大阪で再演された。その次の昭和53年には小倉朗の戦前、戦後の作品を二夜に分けて上演。翌54年は早坂文雄。55年は伊福部昭。56年菅原明朗（氏は90歳を迎える今なお作曲活動を続けておられる）。57年清瀬保二（昭和56年81歳で死去）。58年は「青春の作曲家」と題して、松平頼則、渡辺浦人、小倉朗、戸田邦雄、別宮貞雄の作品を上演。59年は「東北の作曲家」と題して現在活躍中の優れた作曲家５人（片岡良和、林芳輝、安達弘潮、佐藤俊幸、佐藤喜美）を紹介。60年は小山清茂作品。そして今年の芥川也寸志作品と継続したのである。

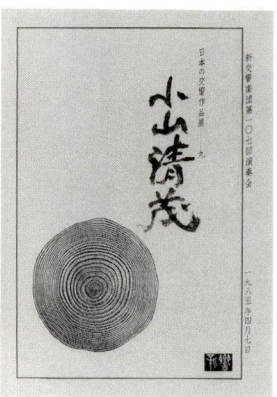
例えば、日本の戦前の文豪、詩人、或は画家の名前や業績は、一般に広く知れわたっている。だが作曲家となると、童謡の作曲家が知られている程度で、管弦楽作曲家の名や業績は殆ど知られていない淋しさである。他の芸術に比べれば、音楽、中でも器楽曲は抽象芸術であるがために、やはり解りにくい点もあるであろうが、何といっても、しばしば上演されることが、普及力を増大する最大の方法といえるのである。

（評論家）









新響・邦人作品演奏記録

曼陀羅の華(1913)	山田耕筰	第112回演奏会(山田一雄)
小交響曲ニ長調(1937)	箕作秋吉	日本の交響作品展-1
		鳥井音楽賞受賞コンサート(大阪・東京)
交響写景「明石海峡」(1939)	菅原明朗	日本の交響作品展-4
チマローザの断章による合奏協奏曲(1934/1950改作)	菅原明朗	〃
交響的幻影「イタリア」(1968)	菅原明朗	〃
アコーディオンのための協奏交響楽(1979)	菅原明朗	〃 〔初演〕 独奏：御喜美江
Fantasia (1981)	菅原明朗	〃 〔初演〕(菅原明朗)
越天楽(1931)	近衛秀麿	第106回演奏会(山岡重信)
古代に寄す(1937)	清瀬保二	日本の交響作品展-6〔改訂初演〕
エレジー　―亡き母に捧ぐ―(1937)	清瀬保二	日本の交響作品展-6〔初演〕
日本祭礼舞曲(1942)	清瀬保二	〃
		鳥井音楽賞受賞コンサート(大阪・東京)
ピアノ協奏曲(1954)	清瀬保二	日本の交響作品展-6〔改訂初演〕 独奏：林光
郷土舞踊(1669)	清瀬保二	〃 〔初演〕
組曲「五つのお伽噺」(1933)	大木正夫	日本の交響作品展-1
小交響曲変ロ調(1943)	諸井三郎	〃
古代譜歌(1935)	平尾貴四男	〃
南部子守唄を主題とするピアノとオーケストルの為の変奏曲(1939)	松平頼則	日本の交響作品展-7
交響組曲「野人」(1941)	渡辺浦人	〃
		依頼演奏会(飯田)
日本組曲(1937)	尾高尚忠	日本の交響作品展-1
小組曲(1935)	安部幸明	〃
山形民謡によるバラード(1941)	高田三郎	〃
古代の舞曲(1937)	早坂文雄	日本の交響作品展-1
		鳥井音楽賞受賞コンサート(大阪・東京)
		日本の交響作品展-3
左方の舞と右方の舞(1941)	早坂文雄	〃
		依頼演奏会(MRK)
映画音楽「羅生門」から(1950)	早坂文雄	日本の交響作品展-3
管弦楽のための変容(1953)	早坂文雄	〃 〔初演〕
日本狂詩曲(1934)	伊福部昭	第97回演奏会
交響譚詩(1943)	伊福部昭	第29回演奏会
		第35回演奏会
		訪ソ演奏旅行(ハバロフスク、イルクーツク、モスクワ、レニングラード)
		日本の交響作品展-1
		鳥井音楽賞受賞コンサート(大阪・東京)
		依頼演奏会(福生)
日本の太鼓(1951)	伊福部昭	伊福部昭古稀記念コンサート
ヴァイオリン協奏曲(1978)	伊福部昭	日本の交響作品展-4 独奏：小林武史
タプカーラ交響曲(1955/1979改訂)	伊福部昭	〃 〔改訂初演〕
		依頼演奏会(福生)
		アマチュアオーケストラフェスティバル
		伊福部昭古稀記念コンサート
		依頼演奏会(MRK)
オーケストラとマリムバのためのラウダ・コンチェルタータ(1979)	伊福部昭	日本の交響作品展-4 独奏：安倍圭子
		依頼演奏会(福生)　独奏：安倍圭子
		第102回演奏会　独奏：安倍圭子
SF交響ファンタジー第一番〔怪獣ゴジラ〕(1954)	伊福部昭	伊福部昭古稀記念コンサート
ギリヤーク族の古き吟誦歌(1946)	伊福部昭	〃 〔オーケストラ版初演〕
管弦楽のための「信濃囃子」(1946)	小山清茂	日本の交響作品展-9
		依頼演奏会(MRK)

交響組曲「能面」(1959)	小山清茂	日本の交響作品展-9
弦楽のための「アイヌの唄」(1964)	小山清茂	〃
テープを伴った管弦楽のための「鄙歌」第1番(1976)	小山清茂	〃
管弦楽のための「うぷすな」(1985)	小山清茂	〃 (委嘱作品)(独奏：渡辺達)
交響幻想曲「伝説」(1943)	戸田邦雄	日本の交響作品展-7
北園克衛の「三つの詩」(1954,1956)	柴田南雄	第101回演奏会(山田一雄) 独唱：大島洋子
交響組曲イ短調(1941)	小倉　朗	日本の交響作品展-2
		日本の交響作品展-7
オーケストラのための舞踊組曲(1953)	小倉　朗	日本の交響作品展-2
日本民謡による五楽章(1957)	小倉　朗	〃
オーケストラのためのブルレスク(1959)	小倉　朗	〃
交響曲ト調(1968)	小倉　朗	〃
ヴァイオリン協奏曲(1971)	小倉　朗	〃 独奏：都河和彦
弦楽のためのコンポジション(1972)	小倉　朗	〃
オーケストラのためのコンポジション嬰ヘ調(1975)	小倉　朗	〃
管弦楽のための「二つの祈り」(1956)	別宮貞雄	日本の交響作品展-7
交響三章(1948)	芥川也寸志	第85回演奏会
交響管絃楽のための音楽(1950)	芥川也寸志	第59回演奏会
		第100回演奏会
		日本の交響作品展-10
絃楽のための三章(1953)	芥川也寸志	第29回演奏会
		第35回演奏会
		訪ソ演奏旅行(ハバロフスク、イルクーツク、モスクワ、レニングラード)
		第66回演奏会
		日本の交響作品展-10
交響曲第一番(1955)	芥川也寸志	〃
エローラ交響曲(1958)	芥川也寸志	〃
チェロとオーケストラのためのコンチェルト・オスティナート(1969)	芥川也寸志	第92回演奏会(山岡重信) 独奏：安田謙一郎
アレグロ・オスティナート(1986)	芥川也寸志	日本の交響作品展-10
抜頭によるコンポジション(1961)	片岡良和	日本の交響作品展-8
箏と管弦楽のためのラプソディー(1983)	林　芳輝	日本の交響作品展-8 独奏：松坂尚子
語部とオーケストラのための交響的物語「遠き神々の物語」(1975/1980改訂)	安達弘潮	日本の交響作品展-8 語り：熊倉一雄
オーケストラのためのコンポジション(1982)	伊藤俊幸	日本の交響作品展-8
哀歌(1982)	佐藤敏直	日本の交響作品展-6〔委嘱作品〕
前奏曲「エメラルドの幻影」(1984)	佐藤喜美	日本の交響作品展-8〔委嘱作品〕

〔注〕 • 作曲者生年順。指揮者名が特に記載されていないものは芥川也寸志
• テレビ放送、依頼演奏会の為に抜粋、編曲等で演奏されたものは含まない。

「日本の交響作品展・10」を迎えて

新交響楽団

私たちは日本人の作曲家に冷たすぎはしなかったか——新響は音楽監督芥川也寸志と共にこの10年間、日本の交響作品展を続けてきました。

その活動を通して、名声のみで実質的には埋れていた、場合によってはパート譜さえない作品をゼロから作っていくという「創造」の素晴しさ、喜び、楽しさを数多く体験しました。また「作曲家を前にして演奏するという貴重な体験」を得て、作品とその奥にある作曲家その人との関係を垣間見ることができました。

西洋音楽を聴き、演奏して育った私達は、10年前、音楽監督から「日本の交響作品展」という提案が出された時、少なからず戸惑いや反発を感じました。しかし、どの作曲家の作品からも、そこに在る日本的な情感を発見してきました。考えてみれば、欧米各国のオーケストラは彼らの偉大な作曲家たちを誇りにし、その作品を演奏し続けてきています。私達も、私達の作曲家を大切にしなければならないことを痛感しました。また、これまで取り上げてきた作品の中には、私達が新響ならではの演奏ができると自負し、レパートリーに加えられたものもあります。

現在では、邦人作品を取り上げた演奏会は企画、技術力ともに私達をはるかに上回る個展も珍しくなくなってきました。これまでの10年間に私達が企画し、サントリー音楽賞の受賞理由ともなった「日本の交響作品展」の先駆的役割は、一応果したと考えています。

私達は、今後とも日本人の作品を演奏し続けていくでしょう。更に、日本の交響作品展を続けたこの10年間に邦人作品とのかかわりあいの中で得たかけがえのない体験を生かし、アマチュアならではの、そして新響ならではの新企画に取り組んで行きたいと、決意を新たにして居ります。

新響ディスコグラフィー



◀「早坂文雄管弦楽選集」
芥川也寸志指揮
映画「羅生門」から
古代の舞曲／
管弦楽のための変容（初演）
1979年4月6日東京文化会館ライブ
FONC-5041



伊福部　昭の世界
「伊福部　昭」
芥川也寸志指揮
タプカーラ交響曲（改訂初演）
バイオリン協奏曲第2番
1980年4月6日東京文化会館ライブ
FO-1351（プライベート盤）



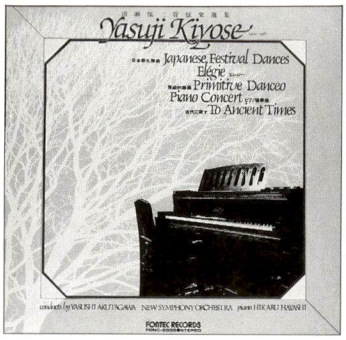
◀「伊福部　昭」
芥川也寸志指揮
タプカーラ交響曲（改訂初演）
バイオリン協奏曲第2番
1980年4月6日東京文化会館ライブ
FONC-5030



◀AKIRA　IFUKUBE
「伊福部　昭」のレコードが
テレプシコールレーベルから
ヨーロッパ圏で発売された
ものです。
TERPSICHORE 1982516



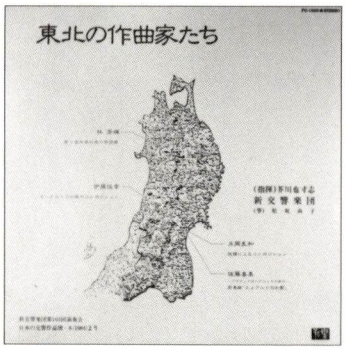
◀山岡重信指揮
芥川也寸志：
チェロとオーケストラのための
コンチェルトオスティナート
アントン・ブルックナー：
交響曲第7番（ハース版）
1981年7月29日東京文化会館
第92回演奏会ライブ
FO-1514～5（プライベート盤）



◀「清瀬保二管弦楽選集」
芥川也寸志指揮
原始的舞踊、エレジー、
ピアノ協奏曲、日本祭礼舞曲
古代に寄す
1982年4月2日東京文化会館ライブ
FONC-5039



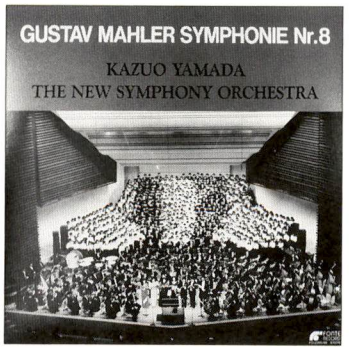
◀YASUJI　KIYOSE
「清瀬保二＝管弦楽選集」のレコ
ードがテレプシコールレーベル
からヨーロッパ圏で発売され
たものです。
TERPSICHORE 1982515



◀「東北の作曲家たち」
芥川也寸志指揮
伊藤俊幸：オーケストラの為の
コンポジション
片岡良和：
抜頭によるコンポジション
林　芳輝：
箏と管弦楽の為の狂詩曲
佐藤喜美：
前奏曲「エメラルドの幻影」
（初演）
1984年4月1日東京文化会館ライブ
FO-1995（プライベート盤）



◀「小山清茂管弦楽選集」
芥川也寸志指揮
管弦楽のための「信濃囃子」
管弦楽のための「うぶすな」
（初演）
管弦のための「アイヌの唄」
テープを伴った管弦楽のための
「鄙歌」第1番
1985年4月7日東京文化会館ライブ
FONC-5062



◀「千人の交響曲」
山田一雄指揮
グスタフ・マーラー：
交響曲第8番
1986年4月6日東京文化会館ライブ
FO-2265～2266（プライベート盤）

新響、この10年

奥平　一

新響創立30周年の年間企画を眺めた時、音楽的にも運営的にも、それがここ10年間の新響の活動を集約的に表現した企画であり、しかも新響がひとつの分岐点に差し掛っているように見えます。

10年前の76年から77年にかけて新響はサントリー音楽賞の受賞等により社会的高い評価を得ました。が、同時に、新響の演奏、企画、運営の力をめぐって団内に疑問と危機感が生まれました。オーケストラの基本的な在り方と実力向上の方策について討議が重ねられ、長期的な計画案（シリーズ制：企画、基礎練磨、名曲、挑戦）が作成されました。この計画案の適用は第82回演奏会（78年）から始まります。

しかし、新響はこの方針を必ずしもそのまま実施していくのではなく、貴重な音楽的体験を重ねるごとにその嗅いのする方へ、する方へと鼻を向けて方向性を見極めていったように思います。新響にその様な体験を残した演奏は、音楽監督芥川也寸志による第83回（79年）の早坂文雄＝「管弦楽のための変容」と第87回（80年）の「伊福部昭交響作品展」、及び、山田一雄（名誉指揮者）による第86回（79年）のマーラー＝「交響曲第５番」でした。これらはいずれも指揮者と作曲家の強い結びつきや、両者の強烈な個性を感じさせて、新響の団員に未曽有の深い感銘を与えました。

これ以降、新響は「邦人作品展」と「マーラーシリーズ」を継続させながら、長期計画の方針を念頭において、しかも新響の演奏の特色を十分に生かす企画を追求していくことになります。

こうした方向性は団に「新響らしさ」ともいうべきひとつのカラーと魅力を作り出しました。この結果、団の方針に深く理解を示してくれる固定的聴衆も増え、さらに優秀な団員の入団するところとなって運営が活性化するなどの良い結果が生まれました。そして、オーケストラの企画、演奏、運営すべての面に「新響らしさ」を発揮しようと計画された創立30周年を迎えます。一方、この「新響らしさ」がある種のマンネリズムを感じさせていることも事実であり、新たな方向性を模索しつつあります。

こうして振り返ってみた時、「邦人作品展」や「マーラーシリーズ」のように10年に近い単位で計画を継続し、自己の道を探るような粘り強さや、個人を超えた時間的感覚と意識こそ、現在最も「新響らしさ」と呼ぶに相応しいものであるのかもしれません。

（新交響楽団 Vla）

一期一会

松木　英作

私の好きな言葉に「一期一会」という言葉があります。生涯に一度まみえるといった意味ですが、新響の活動の中でそれを強く感じることがたびたびあります。特に今年は30周年を記念した企画で、４月のマーラー「千人の交響曲」、７月のショスタコービッチ「第四交響曲」の日本初演、９月のベートーヴェンの「運命」と、自分の気持ちの中でただ演奏会を「やった」という感だけではなく、それ以上に充実した感慨が心にわいてきます。団員それぞれにとって新響の百余回の定期演奏会、多くの演奏旅行と依頼演奏会すべてが「一期一会」なのです。

その新響30年の歴史の中で創立以来、団の中心にあって現在まで団を指導しつづけて下さったのは芥川先生です。これは偉大なことであり、新響の誇りにするところであります。団の創設、東京労音からの独立、10周年のベートーヴェン・チクルス、ソ連への演奏旅行、ストラビンスキー三部作、20周年の日本の交響作品展、サントリー音楽賞受賞等、節目にある活動は新響ばかりではなく広く音楽界に大きな刺激を与え続けてきました。まさに芥川先生の思想と指導がなければ、こうした発展はなかったと思います。

団員もまた新響で自分の人生を賭け、また人生を燃焼させてきました。新響の活動に自分を映し、またその活動から大きな影響を受け、それを更に新たな活動のバネにしてきました。しかし仕事の都合や人生の転期に団を去った多くの団員もいました。

今日の演奏会も、新響の30年間の活動に対する芥川先生や団員の様々な思い出や思い入れが交錯するでしょう。30周年記念ということで、やっと演奏を承諾して下さった芥川先生の作品の演奏を通し、それぞれの「一期一会」が具現できれば、と思います。

新響はこれからも単に楽しみだけの活動ではなく、より創造的な、より社会的存在意義を持ったオーケストラとして前進して行こうとしております。これからも新響を応援して下さい。

本日の御来聴を心より御礼申しあげます。本当に有難うございました。

（新交響楽団理事長）

●第114回演奏会

（サントリー音楽財団コンサート）
1987年２月１日（日）　２時　サントリーホール
指揮：芥川也寸志
平尾　貴四男・古代讃歌
早坂　文雄・左方の舞と右方の舞
小倉　朗・オーケストラのための舞踊組曲
伊福部　昭・タプカーラ交響曲

●第115回演奏会

1987年４月５日（日）　２時　東京文化会館
指揮：芥川也寸志
「中国の音楽家たち」（予定）

●第116回演奏会

1987年６月21日（日）　２時　サントリーホール
指揮：山田一雄
マーラー・シリーズ　9

新交響楽団演奏会年表

（注）新響主催（他団体との共催を含む）、新響単独出演で他団体主催の公開演奏会を同一プログラムによる一連の演奏会に１回と数える。

年月日	演奏会名	回数	曲目	指揮・独奏独唱・合唱	会場	おもな出来事・年度内その他の活動
55.						労音アンサンブル結成(2.1) 芥川也寸志氏を指揮者に迎える(11.9)
56.						新交響楽団発足(規約発効＝3.1) 正式団名決定「東京労音新交響楽団」(8.25)
57.11.21	第１回定期演奏会	1	J.シュトラウス＝ラデツキー行進曲、芸術家の生涯／グリーグ＝オーゼの死／鈴木匡編世界民謡集／ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」	指揮：芥川也寸志 合唱：東京労音会員による合唱団	日本青年館	7.27～29　合宿(鎌倉)
58.11.12	第２回定期演奏会	2	モーツァルト＝劇場支配人序曲、アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク、ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」、交響曲第41番「ジュピター」	指揮：芥川也寸志 ピアノ：石浜和子	日本青年館	8.2～4　合宿(八ケ岳山麓) 9.22　国民文化会議演奏会出演（指揮芥川也寸志於千代田公会堂、モーツァルト41番）
59. 5.17	会津労音例会	3	ベートーヴェン＝エグモント序曲／J.シトラウス＝ラデツキー行進曲／シューベルト＝交響曲第８番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」	指揮：芥川也寸志	謹教小学校（会津若松）	5.16～18　合宿(会津若松) 5.17　小学生のための音楽教室 5.18　高校生のための音楽教室 9.　世界学生平和友好祭音楽祭 10. 6　モイセーエフ舞踊団との交歓会 12.6～7　日本のうたごえ祭典
60. 1.23	上田労音例会	4	モーツァルト＝劇場支配人序曲／グルック＝アウリスのイフゲニア序曲／シューベルト＝交響曲第８番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」	指揮：芥川也寸志	上田市公民館	1.24　中学生のための音楽教室(上田)
5.15	熊谷労音例会	5	ベートーヴェン＝交響曲第１番／J.シュトラウス＝皇帝円舞曲／イワノフ＝酋長の行列／ポンセ＝エストレリータ／シューベルト＝交響曲第８番「未完成」	指揮：芥川也寸志	富士見中学（熊谷）	5.15　中学生のための音楽教室(熊谷) 新響第２オーケストラ誕生(新響臨時総会＝6.16) 8.21～23　合宿(山北) 11.23～24　合宿(八王子)
11.28	第３回定期演奏会	6	バッハ＝組曲第３番／モーツァルト＝交響曲第40番	指揮：芥川也寸志	大田区民会館	12.11・12　日本のうたごえ祭典
61. 4.25	第４回定期演奏会	7	ビゼー＝アルルの女・第２組曲／メンデルスゾーン＝バイオリンコンチェルト／シベリウス＝フィンランディア／ドヴォルザーク＝交響曲第９番「新世界より」	指揮：遠藤雅古（第２オケ） 芥川也寸志（第１オケ） ヴァイオリン：山田耕作	共立講堂	東京労音吹奏楽団誕生(1.28) 練習場所東京文化会館に移る(7.29)
11. 2	第５回定期演奏会	8	シューベルト＝交響曲第番８番「未完成」／ドヴォルザーク＝交響曲第９番「新世界より」／チャイコフスキー＝交響曲第５番	指揮：芥川也寸志	文京公会堂	8.20～21　合宿(勝浦)・(秩父) 11.19　中学、高校生のための音楽教室 11.22　中学生のための音楽教室(熱海) 11.23　埼玉大学祭(埼玉会館)
11.19	秩父労音11月例会	9	同上	指揮：芥川也寸志	秩父高校体育館	11.30　３楽団合同演奏会(日本青年館)
11.22	熱海労音11月例会	10	同上	指揮：芥川也寸志	熱海市観光会館	12.9～10　日本のうたごえ祭典
62. 4.24・26・29・30 東京労音４月例会		11	シベリウス＝フィンランディア・カレリア組曲／モーツァルト＝交響曲第40番／チャイコフスキー＝交響曲第５番	指揮：芥川也寸志	24日文京公会堂 26日厚生年金会館 29日文京公会堂 30日日比谷公会堂	1.21　埼玉県立東松山女子高校視聴覚室 6.3　伊勢崎合唱団定期演奏会と新響公演(伊勢崎市公民館) 6.28　新響第２オーケストラ第２回定期演奏会(共立講堂)
5.19・20	栃木労音５月例会	12	同上	指揮：芥川也寸志	中央公民館(栃木)	8.12～14　合宿(猪苗代) 新響第３オーケストラ誕生(8.18) 新響４楽団制発足に伴ない吹奏楽団を新響吹奏楽団と改名(9.17) 10.28　全ソ労組文化使節団公演(歓迎出演) 12.11　日本のうたごえ祭典(都体育館)
63. 3.10・16・18・19 東京労音３月例会		13	グリンカ＝「ルスランとリュドミラ」序曲／ベートーヴェン＝交響曲第７番／ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」	指揮：芥川也寸志	10日日比谷公会堂 16日東京文化会館 18日東京文化会館 19日産経ホール	2.24　新交響４楽団第１回合同会兼団内交流演奏会 4.10　中部うたごえ祭典(日比谷野外)
4.21	両毛労音４月例会	14	ウェーバー＝「魔弾の射手」序曲／J.シュトラウス＝皇帝円舞曲／シューベルト＝交響曲第８番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」	指揮：芥川也寸志	両毛小学校(足利)	5.25　土浦労音例会(中学校講堂)
6.16・17	水戸労音６月例会	15	同上	指揮：芥川也寸志	水戸市民会館	7.14～16　合宿(軽井沢)
12.16・22・25・26・27 東京労音12月例会		16	J・S・バッハ～ストコフスキー＝トッカータとフーガ二短調／ベートーヴェン＝交響曲第９番「合唱付」	指揮：芥川也寸志 S嶺貞子A成田絵智子 T板橋勝B川村英司、小田清 合唱：東京労音合唱団、同会員	16日東京文化会館 22～27日厚生年金会館	
64. 4.25	函館労音例会	17	グリンカ＝「ルスランとリュドミラ」序曲／シューベルト＝交響曲第８番「未完成」／ブラームス＝交響曲第１番	指揮：芥川也寸志	ＨＢＣホール	2.23　新交響４楽団第２回合同総会兼団内交流演奏会
4.26	江差労音例会				江差高校講堂	
4.27	室蘭労音例会				室蘭市民会館	
4.28	浦河労音例会				浦河中学講堂	
4.29	土別労音例会				土別市民会館	
4.30	名寄労音例会				名寄高校講堂	

年月日	演奏会名	回数	曲目	指揮・独奏・独唱・合唱	会場	おもな出来事・年度内その他の活動
64. 5.25	第6回定期演奏会	18	シャブリエ＝狂詩曲スペイン／ラフマニノフ＝ピアノ協奏曲第2番／ブラームス＝交響曲第1番	指揮：芥川也寸志 独奏：井内澄子	日比谷公会堂	7.5～7　合宿(軽井沢)
8.31	サマー・コンサート	19	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲 皇帝円舞曲／チャイコフスキー＝「白鳥の湖」より／レーウェ＝「マイ・フェア・レディ」より／ロジャース＝「回転木馬」より・「南太平洋」より	指揮：芥川也寸志 合唱：東京プリマヴォークス	東京文化会館	
10.19	東京労音(八王子)例会	20	J.シュトラス＝「こうもり」序曲／シューベルト＝交響音第8番「未完成」／チャイコフスキー＝交響曲第6番「悲愴」	指揮：芥川也寸志	八王子市民会館	12.12　日本のうたごえ祭典(都体育館)
65. 2. 3	第7回定期演奏会	21	スメダナ＝「売られた花嫁」序曲／ハイドン＝交響曲第94番「驚愕」／チャイコフスキー＝交響曲第6番「悲愴」	指揮：芥川也寸志		2.14　レコード録音(世田ケ谷区民会館) チャイコフスキー＝交響曲第6番「悲愴」
3.28	東京労音(千葉) 3月例会	22	スメダナ＝「売られた花嫁」序曲／ハイドン＝交響曲第94番「驚愕」／ベートーヴェン＝交響曲第3番「英雄」	指揮：芥川也寸志	新宿小学校講堂(千葉)	
4.10・14・18	東京労音4月例会	23	同上	指揮：芥川也寸志	10日東京文化会館 14日共立講堂 18日渋谷公会堂	
4.22・23・24・25・26・27・28	(愛媛、宇和島、新居浜、高知、中村、徳島、高松)労音4月例会	24	同上	指揮：芥川也寸志	22日松山女子商講堂 23日宇和島市公会堂 24日新居浜市民文化センター 25日高知中央公民館 26日中村高校講堂 27日徳島市民会館 28日高松市民会館	
7.24・25	浜松労音7月例会	25	ウェバー＝「魔弾の射手」序曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ベートヴェン＝交響曲第6番「田園」	指揮：芥川也寸志	浜松市民会館	7.9～11　合宿(軽井沢)
8.23	サマー・コンサート	26	ウェーバー＝魔弾の射手」序曲／ベートーヴェン＝交響曲第6番「田園」／ベルリオーズ＝ハンガリー行進曲／ドヴォルザーク＝スラブ舞曲第10番・第1番／ラヴェル＝ボレロ	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	
9.26	日立労音9月例会	27	ワグナー＝「ローエングリン」第3幕への前奏曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	指揮：芥川也寸志	日立市民会館	
12. 6	第8回定期演奏会	28	ワグナー「ローエングリン」第3幕への前奏曲／ベートーヴェン＝交響曲第8番／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」	指揮：芥川也寸志	日比谷公会堂	10.11　新響第2合同演奏会(日比谷公会堂)ベーヴェン＝交響曲第5番「運命」
66. 4. 4	第9回定期演奏会	29	ボロディン＝中央アジアの草原にて／伊福部昭＝交響譚詩／芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／シベリウス＝交響曲第2番	指揮：芥川也寸志	日比谷公会堂	新響4楽団合同総会(2.20) 東京労音より独立し、新交響楽協会設立(3.15)各団の呼称は、新交響楽団、新日本交響楽団、新交響吹奏楽団に決まる
9. 5	新響創立10周年記念ベートーヴェン・チクルス(第1回)	30	ベートーヴェン＝交響曲第1番・交響曲第2番・交響曲第3番「英雄」	指揮：芥川也寸志	虎ノ門ホール	7.14　日ソ合同大音楽祭(渋谷)英雄 8. 1　新交響楽協会第1回合同演奏会(東京文化会館)田園
10. 2	同上　(第2回)	31	ベートーヴェン＝「レオノーレ」序曲第3番・交響曲第4番・交響曲第5番「運命」	指揮：芥川也寸志	虎ノ門ホール	8.6～8　合宿(猪苗代) 8.13　平和音楽会(日音協主催)
11. 7	同上　(第3回)	32	ベートーヴェン「エグモント」序曲・交響曲第6番「田園」・交響曲第7番	指揮：芥川也寸志	虎ノ門ホール	
12.19	同上　(第4回)	33	ベートーヴェン＝交響曲第8・交響曲第9番「合唱付」	指揮：芥川也寸志 S常森寿子 A福島久貴子 T金谷良三 B常森闘志 合唱：日本合唱団・東京プリマヴォークス	虎ノ門ホール	
67. 4.17	第14回定期演奏会	34	ベルリオーズ＝序曲ローマの謝肉祭／ハチャトリアン＝ガヤーネ第1番／レスピーギ＝リュートのための古風な舞曲とアリア第3番／ブラームス＝交響曲第4第	指揮：芥川也寸志	日比谷公会堂	
8.17	訪ソ記念特別演奏会	35	伊福部昭＝交響譚詩／カバレフスキー＝組曲「道化師」より／芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／チャイコフスキー＝交響曲第5番	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	9. 3　TBS録画 9.17　日音協依頼録音(KRC)
9.25 27 29 30 10. 3	ハバロフスク演奏会 イルクーツク演奏会 モスクワ演奏会 モスクワ演奏会 レニングラード演奏会	36	グリンカ＝ルスランとリュドミラ序曲／ベルリオーズ＝ローマの謝肉祭序曲／カジラエフ＝レスギンカ／ガバレフスキー＝組曲「道化師」より／シベリウス＝フィンランディア／伊福部昭＝交響譚詩／芥川也寸志＝絃楽のための三楽章／チャイコフスキー＝交響曲第5番	指揮：芥川也寸志		9.22～10.9　訪ソ親善演奏旅行 10.21　はたらく者の音楽祭(大田体育館)道化師／フィンランディア 1022　日音協演奏会(共立講堂)チャイコフスキー交響曲第5番 10.25　コンサート・コンサート録画(TBS)チャイコ5番(東響と合同)
12.14	第15回定期演奏会	37	コレルリ＝合奏協奏曲ハ長調Op.6-10／ドビッシー＝小組曲／ブラームス＝交響曲第2番	指揮：芥川也寸志	日比谷公会堂	

年月日	演奏会名	回数	曲目	指揮・独奏・独唱・合唱	会場	おもな出来事・年度内その他の活動
68. 4. 8	第16回定期演奏会	38	ブラームス＝大学祝典序曲／メンデルスゾーン＝ヴァイオリン協奏曲ホ短調／ベルリオーズ＝幻想交響曲	指揮：芥川也寸志 ヴァイオリン：徳永二男	厚生年金会館	4.21　美濃部知事革新都政一周年の集い（文京公会堂） 5.31　日音協依頼録音（KRC） 7.22　日ソ青年友好祭レセプション出演
10.14	第17回定期演奏会	39	モーツァルト特集＝「魔笛」序曲・交響曲第40番・モテット「おどれ、喜べ、なんじ幸なる鬼よ」・交響曲第41番「ジュピター」	指揮：近衛秀麿 ソプラノ：常森寿子	虎ノ門ホール	7.28　第5回サークル交流会（玉川区民会館） 8. 8　東響・新響合同演奏会（東京文化会館） トッカータとフーガ／チャイコフスキー＝ロミオとジュリエット・1812年／芥川＝絃楽のための三楽章／レスピーギ＝ローマの松
12.23・26	第九特別演奏会	40	バッハ・ストコフスキー＝小フーガト短調／ベートーヴェン交響曲第9番「合唱付」	指揮：芥川也寸志 S常森寿子 A子安順子 T金谷良三 B蔵田裕行 合唱：合唱団“鯨”	日比谷公会堂	8.17～19　合宿（猪苗代） 12.20　日音協依頼録画
69. 2. 2	特別演奏会（石岡）	41	C.バッハ＝シンフォニア変ロ長調／モーツァルト＝交響曲第40番／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	指揮：芥川也寸志	石岡市民会館	1.15　港区成人の日のつどい出演運命（日比谷公会堂） 1.19　TBS録画（第九の4楽章、東響、合唱団鯨と合同）
4. 1	第18回定期演奏会	42	C.バッハ＝シンフォニア変ロ長調／ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第1番／ショスタコーヴィチ＝交響曲第5番	指揮：芥川也寸志 ピアノ：岡村梨影	東京文化会館	5. 5　子供のための演奏会（水戸） 子供のうた、ラデッキー行進曲他
8. 4	サマーコンサート	43	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲・ウィーンの森の物語／チャイコフスキー＝眠りの森の美女／グロフェ＝組曲ミシシッピー／ロジャース＝南太平洋／ポーター＝カン・カン／レーウェ＝マイフェア・レディ	指揮：芥川也寸志 合唱：東京混声合唱団	東京文化会館	7.17　合唱団鯨演奏会賛助 眠りの森の美女、アイーダ大行進曲他 7.27　新交響楽協会3楽団合同演奏会ミシシッピー他（東京文化会館）
10.26・29・30 11. 1・2・3・4	新交響楽団演奏会（那覇、佐賀、長崎、大分、小倉、都城、鹿児島）	44	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲／シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」	指揮：芥川也寸志	26日琉球大学ホール 29日佐賀市民会館 30日長崎市民会館 1日大分文化会館 2日北九州市小倉市民会館 3日都城市民会館 4日鹿児島文化センター	定期練習日変更（土→木、8月～） 10.26～11.4 第1回九州沖縄芸術祭参加演奏旅行
10.27 11. 2	新交響楽団演奏会（熊本、福岡）	45	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲／チャイコフスキー＝ヴァイオリン協奏曲二長調／ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」	指揮：芥川也寸志 ヴァイオリン：久保陽子	27日熊本市民会館 2日福岡市民会館	
12.21	鯨・新響特別演奏会“メサイア”	46	ベンデル＝オラトリオ「メサイア」	指揮：芥川也寸志 S安枝雅子 A武藤道子 T金谷良三 B松尾篤興 合唱：合唱団“鯨”	厚生年金会館	事務所移転（神田全電通会館日音協内を連絡事務所としていたが、新宿区須賀町大湊ビルの東京混声合唱団の一室を合唱団鯨と共同で借り、初めて自前の事務所となる。10月～）
70. 4.13	第19回定期演奏会	47	リスト＝交響詩「前奏曲」／ハイドン＝交響曲第101番「時計」／ムソルグスキー・ラヴェル＝組曲「展覧会の絵」	指揮：芥川也寸志	日比谷公会堂	新交響楽協会解散（6.9） 7. 1　合唱団鯨演奏会賛助（渋谷公会堂） ハイドン＝天地創造（指揮：芥川）
8.20	サマーコンサート	48	スッペ＝「軽騎兵」序曲／オッフェン・バッハ＝「天国と地獄」序曲／ニコライ＝「ウィンザーの陽気な女房たち」序曲／リスト＝ハンガリー狂詩曲第2番／ベンデル＝組曲「水上の音楽」／グロフェ＝組曲「大峡谷」	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	8.～10　合宿（福島県二本松） 8.17　スリーMクラブチャリティコンサート（サマコン曲目と同じ、日比谷公会堂） 東京都アマチュアオーケストラ連盟設立加盟（10.5）
11. 4	第20回定期演奏会	49	モーツァルト＝「後宮よりの誘拐」序曲／シューベルト＝交響曲第5番／チャイコフスキー＝交響曲第4番	指揮：外山雄三	共立講堂	
12.21・23	第九特別演奏会	50	バーバー＝弦楽のためのアダージォ／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	指揮：芥川也寸志 S佐野順子 A菊池洋子 T金谷良三 B田島好一 合唱：合唱団“鯨”	共立講堂	
71. 4.18・22	第21回定期演奏会	51	バッハ＝管弦楽組曲第3番／ベートーヴェン＝ヴァイオリン協奏曲／ブラームス＝交響曲第3番	指揮：芥川也寸志 ヴァイオリン：徳永二男	18日千葉文化会館 22日虎ノ門ホール	1.15　足立区成人式祝典演奏会 運命、未完成（足立区文化会館）
8.10	サマーコンサート	52	タイケ＝旧友／メンデルスゾーン＝結婚行進曲／チャイコフスキー＝くるみ割り人形から行進曲／エルガー＝威風堂々／ブリテン＝青少年のための管弦楽入門／R.コルサコフ＝交響組曲「シェヘラザード」	指揮：芥川也寸志 小林研一郎（ブリテンのみ）	東京文化会館	4.25　ブラームス3番録音（日本電子工学院ホール） 6. 1　合唱団鯨演奏会賛助（渋谷公会堂） 武満＝弦楽のためのレクイエム／フォーレ＝レクイエム／モーツァルト＝レクイエム（指揮：芥川、小林）
10.28	第22回定期演奏会	53	芥川也寸志＝交響管弦楽のための音楽／モーツァルト＝フルート協奏曲第2番／マーラー＝交響曲第1番	指揮：芥川也寸志 フルート：澄川千津	厚生年金会館	8.20　スリーMクラブサマコン（郵貯ホール）新響サマコン曲目ブリテンの代りに未完成 9.23～26　合宿（鎌倉）
12.15・17	新響・鯨特別演奏会”第九”	54	バッハ・ストコフスキー＝パッサカリアと小フーガ短調／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	指揮：芥川也寸志 S大川隆子 A秋葉京子 T金谷良三 B田島好一 合唱：合唱団“鯨”	日比谷公会堂	11. 7　東日本薬学生合唱連盟演奏会賛助 ベートーヴェン第九、指揮：小林研一郎（郵貯ホール）
72. 2. 7	新響新春特別演奏会（総合文化社主催）	55	バッハ・ストコフスキー＝パッサカリアと小フーガ／メンデルスゾーン＝ヴァイオリン協奏曲／マーラー＝交響曲第1番	指揮：芥川也寸志 ヴァイオリン：黒沼ユリ子	日比谷公会堂	定期練習日を土曜に変更（4月～）
4. 2	第23回定期演奏会	56	モーツァルト＝交響曲第36番「リンツ」／ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第3番／ベルリオーズ＝幻想交響曲	指揮：小林研一郎 ピアノ：遠藤郁子	東京文化会館	6. 6　合唱団鯨演奏会賛助（日比谷） ブルックナー＝テデウム・ミサ第3番（指揮：小林研一郎） 8.23　東響・新響合同演奏会（交化大） はげ山の一夜／スラブ行進曲／展覧会の絵（指揮：小林、秋山和慶）

年月日	演奏会名	回数	曲目	指揮・独奏・独唱・合唱	会場	おもな出来事・年度内その他の活動
72.11.12	第24回定期演奏会	57	ベルリオーズ＝「ファウストの劫罰」より／モーツァルト＝2台のピアノのための協奏曲K.365／ベートーヴェン＝交響曲第7番	指揮：芥川也寸志 ピアノ：池場文美 中井正子	東京文化会館	9.15～17　合宿(軽井沢) 11.23　FM東京「おはようコンサート」録音(東京スタジオセンター)
12.15･17	新響鯨第九特別演奏会	58	バッハ・ストコフスキー＝トッカータとフーガ／ベートーヴェン交響曲第9番「合唱付」	指揮：小林研一郎 S常森寿子A志村年子 T金谷良三B原田茂生 合唱：合唱団“鯨”	日比谷公会堂	
73. 3.24･25	第25回定期演奏会	59	チャイコフスキーの夕べ＝イタリア奇想曲 Vn. CON 交響曲第6番「悲愴」	指揮：芥川也寸志 ヴァイオリン： 徳永二男	24日東京文化大 25日神奈川県立	4. 1　FM東京録音(東京スタジオセンタ) イタリア奇想曲／悲愴／アンダンテカンタービレ　(指揮：芥川)
8.18	サマーコンサート	60	ベートーヴェン＝交響曲第6番「田園」／プロコフィエフ＝ピーターと狼／ガーシュウィン＝パリのアメリカ人	指揮：芥川也寸志 小林研一郎 語り：浪花千栄子	東京文化会館	5.27　東京六大学合唱連盟定期賛助 さまよえるオランダ人「水夫の合唱」
11. 5	第26回定期演奏会	61	メンデルスゾーン交響曲第4番「イタリア」ピアノ協奏曲第26番「戴冠式」／ストラビンスキー＝舞踊組曲「火の鳥」	指揮：芥川也寸志 ピアノ：小栗　豊	サンプラザホール	8.25　アマチュア音楽の祭典出演(普門館)スラブ行進曲／パリのアメリカ人他 9.14～16　合宿(軽井沢)
12.19･21	新響第九特別演奏会	62	ワーグナー＝トリスタンとイゾルデより「前奏曲と愛の死」／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	指揮：芥川也寸志 S常森寿子、小池容子 A秋葉京子T金谷良三B平野忠彦 合唱：合唱団“鯨” ノインテコール他	サンプラザホール	12.1･2　早大グリークラブ定期賛助 (渋谷公会堂、厚生年金会館) グノー＝ミサソレムニス (指揮：小林) 12.25　フラウエンコール　第九演奏会賛助 (指揮：小林、サンプラザホール)
74. 3.31	新響とショスタコービッチ(第27回定期演奏会)	63	モーツァルト＝交響曲第35番「ハフナー」／ドビッシー＝牧神の午後への前奏曲／ショスタコーヴィチ＝交響曲第5番	指揮：芥川也寸志 フルート：古田土勝市	東京文化会館	3.21～24　合宿(千葉県岩井)
5.17	芥川也寸志と弘中孝(新響名曲コンサート)	64	ベルリオーズ＝ローマの謝肉祭序曲／ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第4番／ドヴォルザーク＝交響曲第8番	指揮：芥川也寸志 ピアノ：弘中孝	杉並公会堂	6. 2　東京六大学混声合唱連盟定期賛助(東京文化会館)ヴェルディ＝レクイエムより　(指揮：小林研一郎)
8.10･25	サマーコンサート	65	ハチャトリアン＝ガイーヌより第1組曲・第1組曲A／ビゼー＝カルメン第1組曲・ファランドール／チャイコルスキー＝「白鳥の湖」より	指揮：芥川也寸志 白鳥の湖おはなし (東京)黒柳徹子 (横浜)芥川也寸志	10日東京文化会館 25日神奈川県立音楽堂 東京文化会館	9.20～23　合宿(北軽井沢) 10.14　合唱団鯨演奏会賛助(東京文化会館)メンデルスゾーン＝クリストス／ヴェルディ＝テデウム他(指揮：中村健)
12.15	ペトルーシュカ(第28回定期演奏会)	66	ベートーヴェン＝交響曲第8番／芥川也寸志＝弦楽のための三楽章／ストラビンスキー＝舞踊組曲「ペトルーシュカ」	指揮：芥川也寸志 ピアノ：渡辺達		
75. 4.23	新響鯨特別演奏会	67	シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／モーツァルト＝レクイエム	指揮：芥川也寸志 S常森寿子A志村年子 T金谷良三B高橋大海 合唱：合唱団“鯨”	文京公会堂	5.2～5　合宿(白樺湖)
6. 1	ストラビンスキー3部作(第29回定期演奏会)	68	ストラビンスキー＝舞踊組曲「火の鳥」・舞踊組曲「ペトルーシュカ」・舞踊組曲「春の祭典」	指揮：芥川也寸志 ピアノ：渡辺達	渋谷公会堂	
8. 9	サマーコンサート	69	J.シュトラウス＝「こうもり」序曲・狩・ウィーンの森の物語・トリッチトラッチポルカ／グールド＝ラテンアメリカシンフォニエッタ／ムソルグスキー・ラヴェル＝展覧会の絵	指揮：芥川也寸志 ツィター：河野保人 吹奏楽：瑞穂青少年吹奏楽団	東京文化会館	8.17　吾穂青少年吹奏楽団演奏会賛助(立川市民会館)こうもり・トリッチトラッチポルカ・ウィーンの森の物語／展覧会の絵 10.10～12　合宿(茨城県鹿島)
10.19	新響・山岡・ブルックナー(第30回定期演奏会)	70	ブラームス＝大学祝典序曲／モーツァルト＝ファゴット協奏曲／ブルックナー交響曲第4番「ロマンティク」	指揮：山岡重信 ファゴット：前田信吉	日比谷公会堂	
12. 8. 9	第九特別演奏会	71	シベリウス＝フィンランディア／ベートーヴェン＝交響曲第9番「合唱付」	指揮：芥川也寸志 S太田真己子A遠藤久江 T小林久仁夫B阿部正芳 (以上合唱団員) 合唱：中央合唱団・第九合唱団	郵便貯金ホール	
76. 3.29	第31回定期演奏会	72	シャブリエ＝スペイン狂詩曲／プロコフィエフ＝キージェ中尉／シベリウス＝交響曲第2番	指揮：芥川也寸志	郵便貯金ホール	3.19～21　合宿(茨城県鹿島) 3.23　東京音楽アカデミー依頼録音
9. 3	日本の交響作品展　昭和8年～18年(第1日)(第73回演奏会)	73	平尾貴四男＝古代讃歌／箕作秋吉＝小交響曲二長調／大木正夫＝組曲「五つのお伽噺」／尾高尚忠＝日本組曲／早坂文雄＝古代の舞曲	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	4.23　合唱団鯨演奏会賛助(文京公会堂)フォーレ＝レクイエム／シューベルト＝ミサ第6番 (指揮：中村、ボルン)
10.11	日本の交響作品展　昭和8～18年(第2日)(第74回定演奏会)	74	清瀬保二＝日本祭礼舞曲／安部幸明＝小組曲／高田三郎＝山形民謡によるバラード／諸井三郎＝小交響曲変ロ調／伊福部昭＝交響譚詩	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	5. 4　東京六大学混声合唱団連盟定期賛助(東京文化会館)ブルックナー＝テデウム(指揮：山岡重信) 5.30　浦和混声合唱団演奏会賛助(埼玉会館)フォーレ＝レクイエム(指揮：久山恵子) 5.31　東京音楽アカデミー依頼録音 事務所移転 大久保駅前オグラビル(6.5) 7. 6　東京音楽アカデミー依頼録音 8. 8　創立20周年記念新旧団員交歓会 8.23　東京音楽アカデミー依頼録音 8.27～29　合宿(鹿島) 9.24～26　合宿(鹿島)

年月日	演奏会名	曲目	指揮・独奏・独唱・合唱	会場	おもな出来事・年度内その他の活動
77. 2. 1	第75回演奏会	プーランク＝牡鹿／バルトーク＝弦楽の為のディベルディメント／ブラームス＝交響曲第２番	指揮：堤俊作	虎ノ門ホール	1.15～16　合宿(鹿島) 3. 5　第8回鳥井音楽賞授賞式 3.26～27　合宿(九十九里)
4. 4	第76回演奏会	ショスタコーヴィチ＝交響曲第７番「レニングラード」	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	5. 3　NHK「音楽の広場」収録(5.21放送) 7. 2　TBS「オーケストラがやってきた」収録(7.31放送)
8. 4	第77回演奏会	清瀬保二＝日本祭礼舞曲／箕作秋吉＝小交響曲ニ長調／尾高尚忠＝日本組曲／早坂文雄＝古代の舞曲／伊福部昭＝交響譚詩	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	10.8～10　合宿(鹿島)
8	鳥井賞受賞記念コンサート			大阪フェスティバルホール	11.30　合唱団鯨演奏会(日比谷公会堂) カール・オルフ＝カルミナ三部作
10.30 11. 6	第78回演奏会	ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」／交響曲第３番「英雄」	指揮：河地良智	神奈川県民ホール 渋谷公会堂	12.18　福生市演奏会(福生市民ホール) ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」ほか
78. 4. 1	第79回演奏会 小倉朗交響作品展 第１夜	小倉朗＝交響組曲イ短調／日本民謡のよる５楽章／オーケストラのためのブルレスク／交響曲ト調	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	2.11～12　合宿(鹿島)
4.26	第80回演奏会 小倉朗交響作品展 第２夜	小倉朗＝オーケストラのための舞踊組曲／ヴァイオリン協奏曲／弦楽合奏のためのコンポジション／オーケストラのためのコンポジション	指揮：芥川也寸志 ヴァイオリン： 都河和彦	日比谷公会堂	7. 2　レコード録音 (東京音楽アカデミー)
8. 4	第81回演奏会 サマーコンサート	ドヴォルザーク＝交響曲第９番「新世界より」／ロッシーニ＝「どろぼうかささぎ」序曲／レオンカバルロ＝「道化師」間奏曲／ヴェルディ＝「椿姫」前奏曲／「運命の力」序曲	指揮：尾高忠明	郵便貯金ホール	11. 3～5　合宿(鹿島)
12. 1	第82回演奏会 リヒャルト・シュトラウスの夕べ	R.シュトラウス＝交響詩「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」／楽劇「サロメ」より７つのベールの踊り／交響詩「英雄の生涯」	指揮：河地良智	日比谷公会堂	12.17　レコード録音 (東京音楽アカデミー)
79. 4. 6	第83回演奏会 日本の交響作品展３ 「早坂文雄」	早坂文雄＝映画音楽「羅生門」より／古代の舞曲／左方の舞と右方の舞／管弦楽のための変容	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	4.28～30　合宿(鹿島)
6. 2	第84回演奏会	ヒンデミット＝ウェーバーの主題による交響的変容／シューベルト＝交響曲第９番「グレート」	指揮：河地良智	日比谷公会堂	
8. 4	第85回演奏会	芥川也寸志＝交響三章／チャイコフスキー＝交響曲第６番「悲愴」			11.23～25　合宿(鹿島)
12. 1	第86回演奏会 マーラーの夕べ	マーラー＝「花の章」／交響曲第５番	指揮：山田一雄	東京文化会館	12.15　沼津合唱団演奏会(沼津公会堂)ヘンデル＝メサイア
80. 4. 6	第87回演奏会 日本の交響作品展４ 「伊福部昭」	伊福部昭＝オーケストラとマリムバのためのラウダ・コンチェルタータ／Vn協奏曲第２番／タプカーラ交響曲	指揮：芥川也寸志 マリムバ：安倍圭子 ヴァイオリン： 小林武史	東京文化会館	1.15　NHK「音楽の広場」収録(3.15放送) 5. 3～5　合宿(鹿島)
6.15	第88回演奏会	プロコフィエフ＝「ロミオとジュリエット」より／ベートーヴェン＝交響曲第７番	指揮：河地良智	東京文化会館	
9. 6	第89回演奏会	ストラヴィンスキー＝バレエ音楽「春の祭典」／ブラームス＝交響曲第１番	指揮：山岡重信	東京文化会館	11. 1～3　合宿(山中湖)
11.20	第90回演奏会 マーラーシリーズ２	モーツァルト＝コンチェルト・ロンドニ長調／マーラー＝交響曲第６番	指揮：山田一雄 ピアノ：渡辺達	日比谷公会堂	12.13　沼津合唱団演奏会(沼津公会堂)ヘンデル＝メサイア
81. 4. 5	第91回演奏会 日本の交響作品展５ 「菅原明朗」	菅原明朗＝交響写景「明石海狭」／チマローザの断章による合奏協奏曲／アコーディオンのための交響曲／交響的幻影イタリア／ファンタジア	指揮：芥川也寸志 アコーディオン： 御喜美江	東京文化会館	1.18　福生市演奏会(福生市民ホール)伊福部昭＝タプカーラ交響曲他 5. 2～4　合宿(鹿島)
7.29	第92回演奏会	芥川也寸志＝チェロとオーケストラのためのコンチェルトオスティナート／ブルックナー＝交響曲第７番	指揮：山岡重信 チェロ：安田謙一郎	東京文化会館	
9.19	第93回演奏会 マーラーシリーズ３	マーラー＝交響曲第７番	指揮：山田一雄	新宿文化センター	11.21～23　合宿(岩井)
11.29	第94回演奏会	バッハー菅原明朗編曲＝パッサカリア／ショスタコーヴィチ＝交響曲第11番「1905年」	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	12.19　沼津合唱団演奏会(沼津公会堂)ヘンデル＝メサイア

年月日	演奏会名	曲目	指揮・独奏・独唱・合唱	会場	おもな出来事・年度内その他の活動
82. 4. 2	第95回演奏会 日本の交響作品展6 「清瀬保二」	佐藤敏直＝哀歌／清瀬保二＝郷土舞踊／エレジー―亡き母に捧ぐ／古代に寄す(改訂版)／ピアノ協奏曲(改訂版)／日本祭礼舞曲	指揮：芥川也寸志 ピアノ：林　光 構成：小宮多美江	東京文化会館	5. 1～3　合宿(岩井)
82. 7. 3	第96回演奏会	ベートーヴェン＝交響曲第6番「田園」／バルトーク＝管弦楽のための協奏曲	指揮：山岡重信	簡易保険ホール	
82. 9.15	第97回演奏会	ショスタコーヴィチ＝祝典序曲／伊福部昭＝日本狂詩曲／チャイコフスキー＝交響曲第5番	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	10. 9　清真学園音楽教室　チャイコフスキー＝交響曲第5番他 10.9～11　合宿(鹿島)
83. 1.23	第98回演奏会 マーラーシリーズ4	モーツァルト＝交響曲第35番「ハフナー」／マーラー＝交響曲第9番	指揮：山田一雄	簡易保険ホール	
83. 4. 3	第99回演奏会 日本の交響作品展7 「青春の作曲家たち」	小倉　朗＝交響組曲イ短調／松平頼則＝南部子守歌を主題とするピアノとオルケストルの為の変奏曲／戸田邦雄＝交響幻想曲「伝説」／渡辺浦人＝交響組曲「野人」／別宮貞雄＝管弦楽のための「二つの祈り」	指揮：芥川也寸志 ピアノ：土屋律子	東京文化会館	4.23～24　飯田市演奏会旅行(飯田市文化会館)チャイコフスキー＝交響曲第5番他 4.29～5.1　合宿(鹿島)
83. 6.26	第100回演奏会	芥川也寸志＝交響管絃楽のための音楽／ベートーヴェン＝交響曲第9番	指揮：芥川也寸志 S常森寿子A伊原直子 T林　誠B栗林義信 合唱：湘南市民コール 松原混声合唱団	新宿文化センター	9.23　NHK「音楽の広場」出演(生放送) 10. 8　清真学園演奏会　マーラー＝交響曲第2番より他
83.11. 1	第101回演奏会 マーラーシリーズ5	紫田南雄＝北園克衛の「三つの詩」／マーラー＝交響曲第2番「復活」	指揮：山田一雄 独唱：S大島洋子 A木村宏子 合唱：新星日響合唱団	東京文化会館	10. 8～10　合宿(鹿島)
84. 1.29	第102回演奏会	モーツァルト＝交響曲第40番／伊福部昭＝オーケストラとマリムバの為のラウダ・コンチェルタータ／ショスタコーヴィチ＝交響曲第5番	指揮：芥川也寸志 マリムバ：安倍圭子	新宿文化センター	1.22　福生市演奏会(福生市民ホール)ショスタコーヴィチ＝交響曲第5番他 3.17　事務所移転 大久保→矢来町
84. 4. 1	第103回演奏会 日本の交響作品展8 「東北の作曲家たち」	伊藤俊幸＝オーケストラのためのコンポジション／佐藤喜美＝前奏曲「エメラルドの幻影」／林芳輝＝箏と管弦楽のためのラプソディ／安達弘潮＝語部とオーケストラの為の交響的物語「遠き神々の物語」／片岡良和＝抜頭によるコンポジション	指揮：芥川也寸志 箏　：松坂尚子 語り：熊倉一雄	東京文化会館	4.28～4.30　合宿(鹿島)
84. 6.24	第104回演奏会	ベートーヴェン＝交響曲第3番「英雄」／ワーグナー＝楽劇「ニーベルングの指環」第3夜「神々の黄昏」より	指揮：山田一雄	新宿文化センター	7.15　東京都アマチュアオーケストラ連盟シンポジュウム参加 9.22　清真学園音楽教室　ベートーヴェン＝交響曲第3番他 9.22～24　合宿(鹿島)
84. 9.26	第105回演奏会 マーラーシリーズ6	マーラー交響曲第3番	指揮：山田一雄 独唱：伊原直子 合唱：晋友会、藤沢ジュニアコーラス	昭和女子大学人見記念講堂	10.28　第1回アマチュアオーケストラフェスティバル出演(東京文化)伊福部昭＝タプカーラ交響曲 11.23　伊福部昭古稀記念交響コンサート出演(東京文化)タプカーラ交響曲、日本の太鼓他 11. 3　アマチュア室内楽演奏会出演(東京文化小)
85. 1.27	第106回演奏会	近衛秀麿＝越天楽／ブラームス＝交響曲第3番／ホルスト＝組曲「惑星」	指揮：山岡重信	新宿文化センター	2. 8　アマチュア室内楽フェスティバル出演
85. 4. 7	第107回演奏会 日本交響作品展9 「小山清茂」	小山清茂＝管弦楽のための「信濃囃子」／弦楽のための「アイヌの唄」／テープを伴った管弦楽のための「鄙歌」第1番／管弦楽のための「うぶすな」／交響組曲「能面」	指揮：芥川也寸志 構成：小宮多美江 ピアノ：渡辺達	東京文化会館	4.20　三田レコード鑑賞会演奏会「日本の民族楽派の古典」伊福部昭＝タプカーラ交響曲他 4.27～29　合宿(鹿島)
85. 7.20	第108回演奏会 マーラーシリーズ7	シューベルト交響曲第8番「未完成」／マーラー＝交響曲「大地の歌」	指揮：山田一雄 独唱：A辻　宥子 T伊達英二	新宿文化センター	9.14～16　合宿(神栖) 9.16　清真学園演奏会(神栖文化センター)チャイコフスキー＝交響曲第4番他 10. 6　東京都アマチュアオーケストラ連盟シンポジウム参加 10.27　羽生文化会館演奏会　第109回と同内容
85.11. 3	第109回演奏会	ベルリオーズ＝序曲「ローマの謝肉祭」／ベートーヴェン＝ピアノ協奏曲第5番「皇帝」／チャイコフスキー＝交響曲第4番	指揮：芥川也寸志 ピアノ：須田真美子	東京文化会館	11. 7　芥川也寸志先生の還暦をお祝いする会(国際文化会館) 12.22　三多摩合唱団第九演奏会(立川市民会館)ベートーヴェン＝交響曲第9番
〈新響30周年企画シリーズ＝110～113回〉					
86. 4. 6	第110回演奏会 マーラーシリーズ8	マーラー交響曲第8番「一千人の交響曲」	指揮：山田一雄 独唱：S豊田喜代美・大倉由紀枝・岩崎由紀子A辻宥子・春日成子T林誠 Bar勝部太 Bas岡村喬生 合唱：新響30周年祝祭合唱団 武蔵野合唱団、荒川少年少女合唱隊 台東区立金竜小学校音楽部 藤沢ジュニアコーラス 多摩ファミリーシンガース	東京文化会館	5. 3～5　合宿(鹿島) 9.13～15　合宿(鹿島) 9.15　清真学園演奏会　ベートーヴェン第5番
86. 7.20	第111回演奏会	モーツァルト＝交響曲第39番／ショスタコーヴィチ＝交響曲第4番(日本初演)	指揮：芥川也寸志	新宿文化センター	10.26　第3回アマチュタオーケストラフェスティバル出演(東京文化)芥川也寸志＝交響管弦楽のための音楽他
86. 9.23	第112回演奏会	山田耕筰＝音「曼羅陀の華」／ストラヴィンスキー＝バレエ組曲「火の鳥」(1919年版)／ベートーヴェン＝交響曲第5番	指揮：芥川也寸志	新宿文化センター	
86.11.30	第113回演奏会 日本の交響作品展10	芥川也寸志＝アレグロ・オスティナート／管弦楽のための三楽章／交響管弦楽のための音楽／エローラ交響曲／交響曲第1番	指揮：芥川也寸志	東京文化会館	11.24　大和市JC演奏会(大和市中央会館)芥川也寸志



いま、風のデュオが聞こえています。

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　芥川也寸志

地球が、私のデスクです。



多機能ワークステーションJ Star Ⅱを中核とするネットワークシステムが、ローカルエリアをこえていまや、海外にまでもひろがっています。アメリカのファイルを開けて必要な書類をさがし、ディスプレイにひろげてみる。そして必要なら、プリントする。ワークステーション同士が、海をこえてメッセージを送りあうなど、自在。国際化時代にふさわしい、地球的規模のネットワークシステムといえます。

オフィスワークを「ドキュメント」の流れとしてとらえ創造的で、しかも効率的な情報処理環境を提供するXINS(ジンズ)。その優れたアーキテクチャーは先ごろ相互接続公開実験※に成功した「異機種間の国際電子メール=MHS」でも、大きな役割を果しています。よりひらかれた、より自由なネットワークシステムによって、オフィスのあたらしい情報処理環境をひらく富士ゼロックスにご注目ください。

XEROX

富士ゼロックス株式会社
〒107 東京都港区赤坂3-3-5
電話03(585)3211 XEROXは登録商標です。

※NTTおよび当社はかコンピューターメーカー8社との共同で、'86・7・17各社システム相互間の接続実験に成功したものです。

オフィス環境の新しいカタチ

XINS

XEROX INFORMATION NETWORK SYSTEM



あなたを想う、ギフト・ギャラリー。

この冬、松坂屋はあなたの〝ギフト・ギャラリー〟になります。

冷たい北風が吹く冬のある日。
暖炉に揺らめく炎を見つめながら、
あなたのことを想いました。
この一年、ほんとうにお世話になりました。
心をなごませてくれる絵画のように
言葉ではつくせない感謝の気持ちを、
暖かな贈り物に託します。

カトレヤにまごころをつんで

お歳暮はマツザカヤ

歳暮総合ギフトセンター　本館6階
食品ギフトセンター　地下1階

上野 松坂屋
電話(03)832-1111（大代表）

SONY



録画・再生一体タイプ
ハンディ・ズーム
フルオート機構
高画質2時間録画
ハイファイ録音

一度きりの時間です。

何気ない一日にも、かけがえのないホームドラマが生まれています。
だから、美しい映像と音で、いつまでも残したい。
ハンディカムの高品質が応援します。

Handycam（ハンディカム）
カメラー体型8ミリビデオ CCD-V30
新発売 ¥198,000



小さくて高品質の8ミリビデオテープは、
世界127社の統一規格です。

品質を、手にしてください。
ソニー8ミリビデオ

■録画・再生について●このビデオは8ミリビデオ方式のビデオです。●8ミリビデオ方式のビデオカセットテープをご使用下さい。●このビデオで標準（SPモード）録画したテープは8ミリビデオ方式を採用している全社のビデオと互換性があります。●あなたが実演や興行、展示物などを撮影したものは、個人として楽しむなどのほかは、著作権法上、権利者に無断では使用できません。なお、実演、興行、展示物などのうちには、これらの主催者（管理者）が、会場等の管理権に基づき、個人として楽しむなどの目的の撮影であっても、制限している場合がありますのでご注意ください。●カタログ送呈＝住所、氏名、年令、職業、電話番号、機種名を明記の上、〒108 東京都高輪局区内ソニー㈱カタログ係へハガキでお申し込みください。

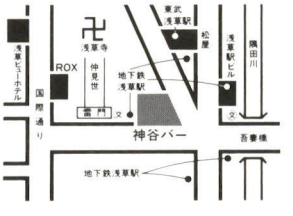


明治生まれの粋なカクテル
『デンキブラン』
甘い香りのハーモニーを、お聴きください。

創業明治13年——デンキブラン

神谷バー

1階神谷バー 2階レストラン 3階和風割烹 浅草1丁目1番1号
☎03(841)5400 ご宴会・ご商談にもご利用ください。(火曜定休)

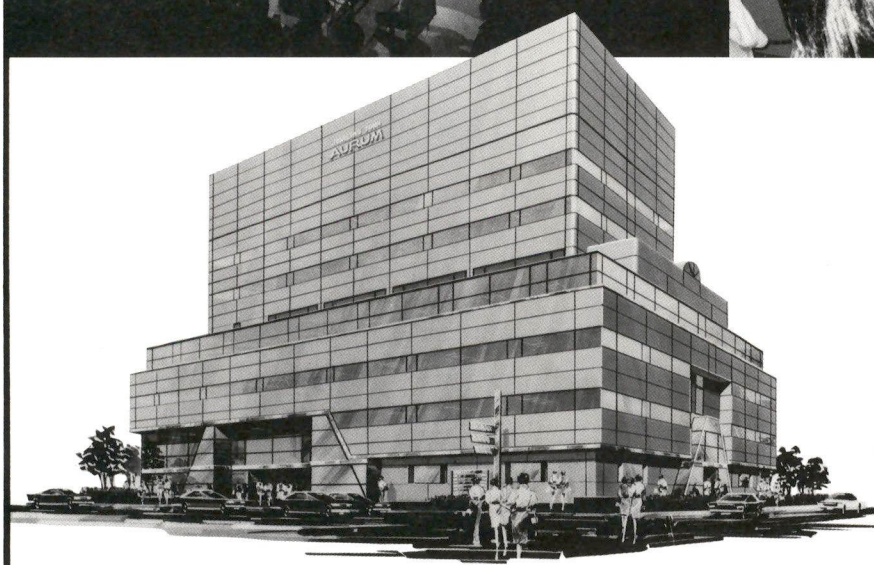


オーラムに来ると新しい話題に出逢います。

上野を宝石の街にしたいと思っております。
ジュエラーズタウン・オーラムに大いに期待しております。







有力メーカー・卸・その他50数社が集う
宝飾品の情報基地

ジュエラーズタウン・オーラム

AURUM

〒110 東京都台東区東上野1-26-2 TEL.03(833)4291/4292
●地下鉄・仲御徒町徒歩8分、稲荷町徒歩5分
●国電・御徒町徒歩12分
営業日・営業時間
●日曜～土曜(但し第2・3土曜日、および祝祭日は休業)
●営業時間は午前10時から午後5時30分まで。

東京都知事免許
(3)第35653号

株式会社 ヒラコ地所

〒110 東京都台東区東上野4-1-18 ヒラコビル2-2F
☎03—842—2081

上野浅草フィルハーモニー管弦楽団

（台東区社会教育団体）

練習日：毎週土曜夜

団員募集中……特に弦楽器

入団希望者は下記宛郵送して下さい。

〒111 東京都台東区浅草1-37-6 ライオンズマンション 502

上野浅草フィルハーモニー管弦楽団宛

浅草・伝法院通り

大黒家天麩羅



844-1111・2222

家庭用電気製品・ミシン・販売修理

桜井ミシン電気商会

TEL 429-3761

〒154 世田谷区豪徳寺１－45－３（小田急豪徳寺駅前・世田谷線 山下駅前）

orchestre
de
takadanobaba

森山　崇　高田馬場管絃楽団

ROSSINI　STRAUSS　BEETHOVEN

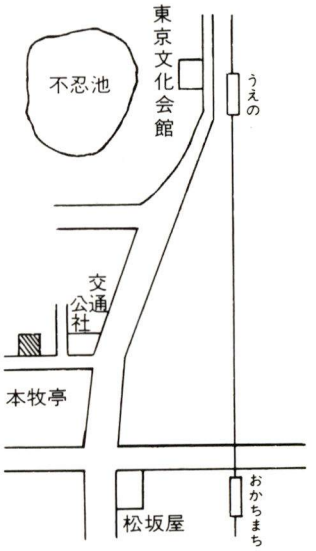
「ウィリアム・テル」序曲　「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたづら」　交響曲第6番ヘ長調「田園」

1987年1月25日(日)　午後2時　開演　　練馬文化センター(西武池袋線練馬駅前)

とんかつ 武蔵野

演奏会のお帰りにお立ち寄り下さい
60名様までのご宴会うけたまわっております

台東区上野2－8－1（本牧亭向い）　TEL．831－1672



電子楽器からオーケストラまで
楽器輸送のエキスパート

(東京) 田中陸運 (全国)

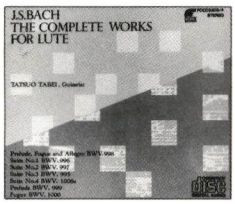
電話（370）6275
東京都渋谷区代々木4－60－10

世界に飛躍する日本の演奏家

■ 新譜ディスコグラフィー 好評発売中

「田部井辰雄／プレリュード」
(FONC-5024・LP)
「大聖堂／田部井辰雄ギター・リサイタル」
(FONC-5045・LP)
に続く第3弾。

6弦ギターによる世界初の全集CD



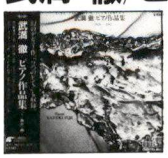
(曲目)
プレリュード
フーガ
アレグロ BWV.998
リュート組曲 (全4曲)
プレリュード BWV.999
フーガ BWV.1000

J.S.バッハ リュートのための作品全集

田部井辰雄さんのギターによる演奏は、現在最も信頼できる新バッハ全集をテクストとし、一音もおろそかにしない誠実さと、こまやかな詩情がまことに印象的だ。
(角倉一朗：東京芸術大学教授)

田部井辰雄(ギター)
FOCD-3203/4(CD 2枚組)**¥6,400**

武満 徹/ピアノ作品集



1.雨の樹素描
2.閉じた眼
3.フォー・アウェイ
4.ピアノ・ディスタンス
5.遮られない休息
6.2つのレント(世界初録音)

藤井一興(ピアノ)　FOCD-3202(CD)　¥3,200

中井正子 ドビュッシー/12の練習曲集

—自筆原稿からの厳密な校訂による—



1.〈五指〉のための 2.〈三度〉のための
3.〈四度〉のための 4.〈六度〉のための
5.〈八度〉のための 6.〈八指〉のための
7.半音階のための 8.装飾音のための
9.反復音のための
10.対比させられる響きのための
11.〈みあわされたアルペッジョ〉のための
12.和音のための
＋〈みあわされたアルペッジョ〉のための習作

解説／平島正郎・浅田 彰・小鍛冶邦隆
中井正子(ピアノ)　FONC-5071(LP)　¥2,500

花房晴美 ドビュッシー前奏曲集第2巻



1.霧 2.枯葉 3.酒の門
4.仙女は優れた踊り手なり
5.ヒースの生い茂る土地
6.風変りのラヴィーヌ将軍
7.月光に映ゆる謁見の露台
8.水の精 9.ピックウィック殿下礼讃
10.カノープ 11.交替する3度 12.花火

花房晴美(ピアノ)　FONC-5072(LP)　¥2,500
●1984年4月21日／東京新宿文化センター実況録音
●使用楽器：スタインウェイ(ニューヨーク)



「花房晴美 ドビュッシー前奏曲集第1巻」
亜麻色の髪の乙女　他全12曲
花房晴美(ピアノ)
FONC-5063(LP)　¥2,500



「花房晴美 ラヴェルアルバム」
夜のガスパール・鏡
花房晴美(ピアノ)
FONC-5035(LP)　¥2,500

FONTEC RECORDS

●全国有名レコード店で取扱っています。手に入りにくい場合は下記へお問合わせ下さい。
発売元：株式会社フォンテック
〒167 東京都杉並区荻窪5-22-5　☎03-393-0183(代)

---

nero

世界の名器直輸入販売

どうぞ電話でお問合せください。

NERO MUSIC CO., LTD.

〒150 東京都渋谷区渋谷2-9-10(キングビル)
TEL.400-7466,

営業時間　平　日　AM10:00～PM8:00
　　日祭日　AM10:00～PM6:00

29・NOV・86

OPEN・EX SHIBUYA PALCO PART I 6F・DOMON SHIBUYA PALCO PART II B1・JUN DOMON-EX OHNISHIYA

世界へはばたく

Pygmalius



上級者向けソロ用として、
当社の送りだす最高級品ブランドです。
創業以来培われてきた製作技術の全てを
つぎこみ製作したこのブランドは、
他に類のない程に自信を持って皆様に
お勧めできる音質・音量を持っており、
楽界の多くの著名なバイオリニストにより
試奏して頂き、驚嘆にも似た称賛の言葉を
いただいております。
使用される部品の数々に至るまで全て手作りの上、
仕上げも熟練した技術員が一台一台心をこめて
塗り上げたものです。
音質や音量共にその風格のある姿も
是非一度手にとってお確め下さい。
※ピグマリウスには、バイオリンの他
ビオラ、チェロもございます

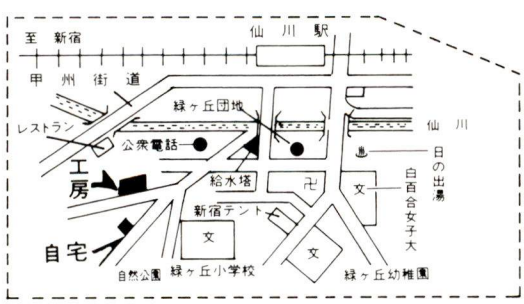
好評発売中

文京楽器製造株式会社
〒112 東京都文京区小石川2-1-11
Tel. 03−811−2084（代）

●工房製分数バイオリン・バイオリンケース、西独製分数V弓その他、特別注文も承っております。お気軽にお問合せください。

陳バイオリン工房

日本弦楽器製作者協会会員
アメリカバイオリン製作者協会会員



京王線
仙川駅下車

1976年度フィラデルフィアに於けるアメリカ国際・バイオリン・ビオラ・セロ製作者コンクールに於いてバイオリン・ビオラ・セロの音響と細工の全6種目中5種目ゴールドメダル受賞。
1984年アメリカバイオリン製作者協会より無鑑査製作家の特別認定を受ける。

東京都調布市緑ヶ丘2−37

工房（03）308−5550
自宅（03）307−5541

